

愛知県東海市

かみはまだ

上浜田遺跡発掘調査報告

1999年

愛知県東海市教育委員会

愛知県東海市

かみはまだ

上浜田遺跡発掘調査報告

1999年

愛知県東海市教育委員会



棒状脚台の製塩土器を差し込んだと思われる穴の跡



調査区 2 遺物集中部出土資料

序

愛知県東海市は、伊勢湾と三河湾を隔てて伸びる知多半島の付け根の西岸に位置し、伊勢湾に面しています。現在は、臨海部が名古屋南部臨海工業地帯の一角を占め、新日本製鐵株式会社名古屋製鐵所、愛知製鋼株式会社、大同特殊鋼株式会社知多工場などの鉄鋼関係会社が操業し、中部圏最大の鉄鋼基地となっていますが、古代においては、海岸で土器製塩方法による塩作りが盛んに行われていました。ここで作られた塩は、律令制の時代にあって、税のひとつである調として課せられ、都へ納められていました。

上浜田遺跡は、知多半島でも有数の規模を持つ松崎の古代土器製塩遺跡の南に隣接する上浜田の地にあって、同じ砂堆上の一連の製塩遺跡としてとらえられるところです。この松崎・上浜田の地は、先進土器製塩地域であります大阪湾南岸から紀淡海峡周辺域の影響を受けた古式の土器製塩が始められたところです。やがて、土器製塩方法が知多半島独自の形態をもつ製塩土器によって、半島全域に広がって盛んに塩作りがなされるようになりますが、今回の発掘調査によって、この地が知多式土器製塩の発祥の地であった可能性が強くなりました。ここに、その成果をとりまとめ報告書として刊行いたします。

終りになりますが、発掘調査にあたりましてご指導ご協力をいただきました関係諸機関並びに関係者の方々に、深く感謝を申し上げます。

平成11年 3月

東海市教育委員会
教育長 伊藤 克己

例 言

- 1 本書は、愛知県東海市大田町上浜田61-4 他11筆に所在する上浜田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宝交通株式会社のマンション建設に起因し、遺跡は一部を除き滅失した。本発掘調査の現地調査は平成10年1月19日から3月31日までを要した。
- 3 本書で使用した方位は磁北（真北約6度30分西偏）である。高さの基準は東京湾の平均海面（T.P）である。
- 4 本調査は東海市教育委員会が主体者となり、社会教育課の立松彰、永井伸明が担当し、本書の執筆、編集にもあたった。
- 5 獣骨類については、堀木真美子氏（財団法人愛知県埋蔵文化財センター）に調査をしていただき、その報告もまとめていただいた。
- 6 本調査で出土した古墳時代土師器の編年等については、赤塚次郎氏（財団法人愛知県埋蔵文化財センター）に、同じく須恵器については、城ヶ谷和広氏（愛知県総務部県史編纂室）に、また石製品の石材については、堀木真美子氏にご教示をいただいた。
- 7 本調査ならびに報告書作成に際し、下記の諸氏、諸機関からご協力をいただいた。記して感謝する次第である。（敬称略）
池田喜美子、二村峰子（遺物整理臨時職員）
愛知県教育委員会文化財課、宝交通株式会社、山長造園株式会社、社団法人東海市シルバー人材センター、東海市文化財調査委員
- 8 出土遺物、調査関係記録類は、東海市立郷土資料館にて保管する。

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯と遺跡の概要	
第一節 調査の経緯	1
第二節 遺跡の立地	4
第三節 基本層序	4
第Ⅱ章 調査の成果	
第一節 遺構	7
1 かまど(縦穴住居跡)	7
2 土坑	7
3 煎熬場(製塩土器を差し込んで鹹水を煮沸した場)	10
4 製塩土器廃棄場	12
5 貝層	12
第二節 遺物	14
1 かまど(縦穴住居跡)出土遺物	14
2 土坑出土遺物	15
3 調査区2遺物集中部出土遺物	15
4 製塩土器	17
5 包含層出土須恵器	22
6 包含層出土土師器	23
7 包含層出土陶器類	24
8 包含層出土石製品・土製品・金属製品・骨角製品	25
第三節 上浜田遺跡における獣骨類の調査報告	26
第Ⅲ章 まとめ	30

図・表目次

第1図	上浜田遺跡位置図	2・3
第2図	遺構等配置図	5
第3図	基本土層図	6
第4図	かまど平面及び断面図	8
第5図	土坑平面及び断面図	9
第6図	調査区1平面及び横断模式図	11
第7図	製塩土器廃棄層断面図	11
第8図	貝層1断面図	13
第9図	製塩土器脚部計測基準	20
第10図	知多式製塩土器1類の編年	30
第11図	5世紀の製塩遺跡と製塩土器	31
第12図	6世紀の製塩遺跡と製塩土器	32
第13図	かまど内出土遺物	34
第14図	かまど周辺出土遺物	35
第15図	土坑出土遺物	36
第16図	調査区2遺物集中部出土須恵器	36
第17図	調査区2遺物集中部出土土師器①	37
第18図	調査区2遺物集中部出土土師器②	38
第19図	包含層出土須恵器	39
第20図	包含層出土土師器①	40
第21図	包含層出土土師器②	41
第22図	包含層出土土師器③	42
第23図	包含層出土陶器類等	43
第24図	包含層出土土錘・金属製品・骨角製品	44
第25図	製塩土器(松崎類, 知多式0類・1類等)	45
第26図	製塩土器(知多式3類)①	46
第27図	製塩土器(知多式3類)②	47
第28図	製塩土器(知多式4類)	48
第29図	製塩土器(知多式4類・特殊品等)	49
第1表	貝類構成比一覧表	13
第2表	獣骨類種名表	27
第3表	獣骨類計測一覧	27
第4表	ほ乳類一覧	28・29
第5表	土器等観察表	50
第6表	土錘計測表	54
第7表	製塩土器観察表	55

第 I 章 調査の経緯と遺跡の概要

第一節 調査の経緯

上浜田遺跡は東海市大田町61-4 他11筆に位置する（第1図）。本遺跡の北側には、製塩遺跡として著名な松崎遺跡が隣接している。

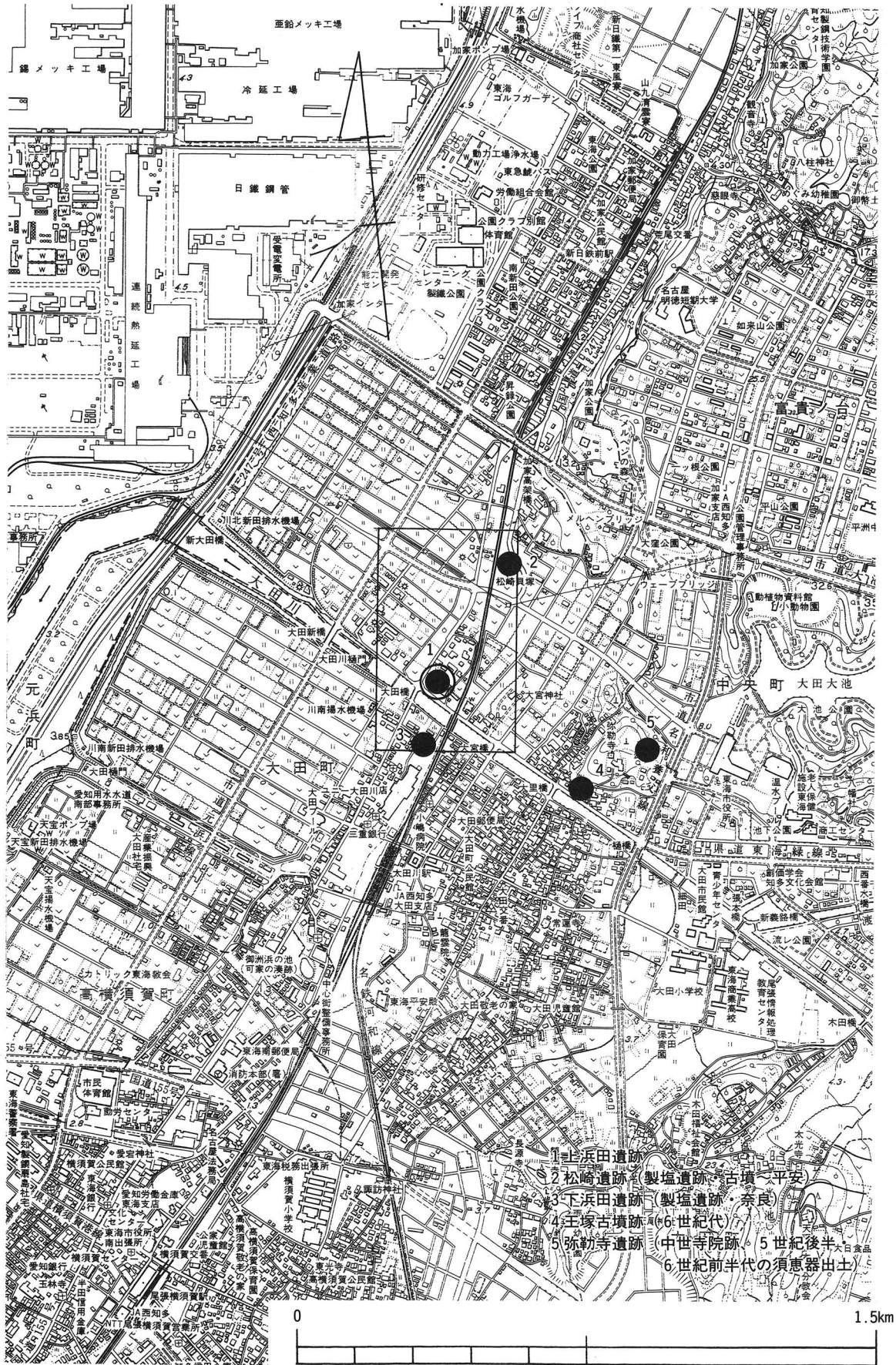
当該地にマンションを建設する予定がある旨、平成9年10月に事業者である宝交通株式会社から東海市教育委員会に通知があり、遺跡有無の確認申請がなされた。申請地の付近には、隣接して松崎遺跡が所在するため、遺跡有無確認の試掘調査を平成9年同月に実施した。その結果、申請地にも製塩土器等を多量に含む遺物包含層が堆積していることが確認された。計画の変更はできないため、工事着手前に発掘調査を実施することとなった。事業範囲のうち約2分の1は駐車場とし、地面を掘削しないこと、また申請地の南東部は試掘調査の結果、遺物包含層が確認されなかったことなどから、実際の建設部分のうち約900m²と浄化槽設置部分約100m²のみ発掘調査を実施することとなった。

平成10年4月には工事を着工したいとの要請があったため、平成10年1月に入り発掘調査の準備に取りかかった。南側の建物建築部分を調査区1とし、北側の浄化槽設置部分を調査区2とし、西側から東側に向かって5m間隔でA～M、また調査区1の北壁を基準に同じく5m間隔で南へ1～5・北へ10～12というように調査区を区画した（第2図）。

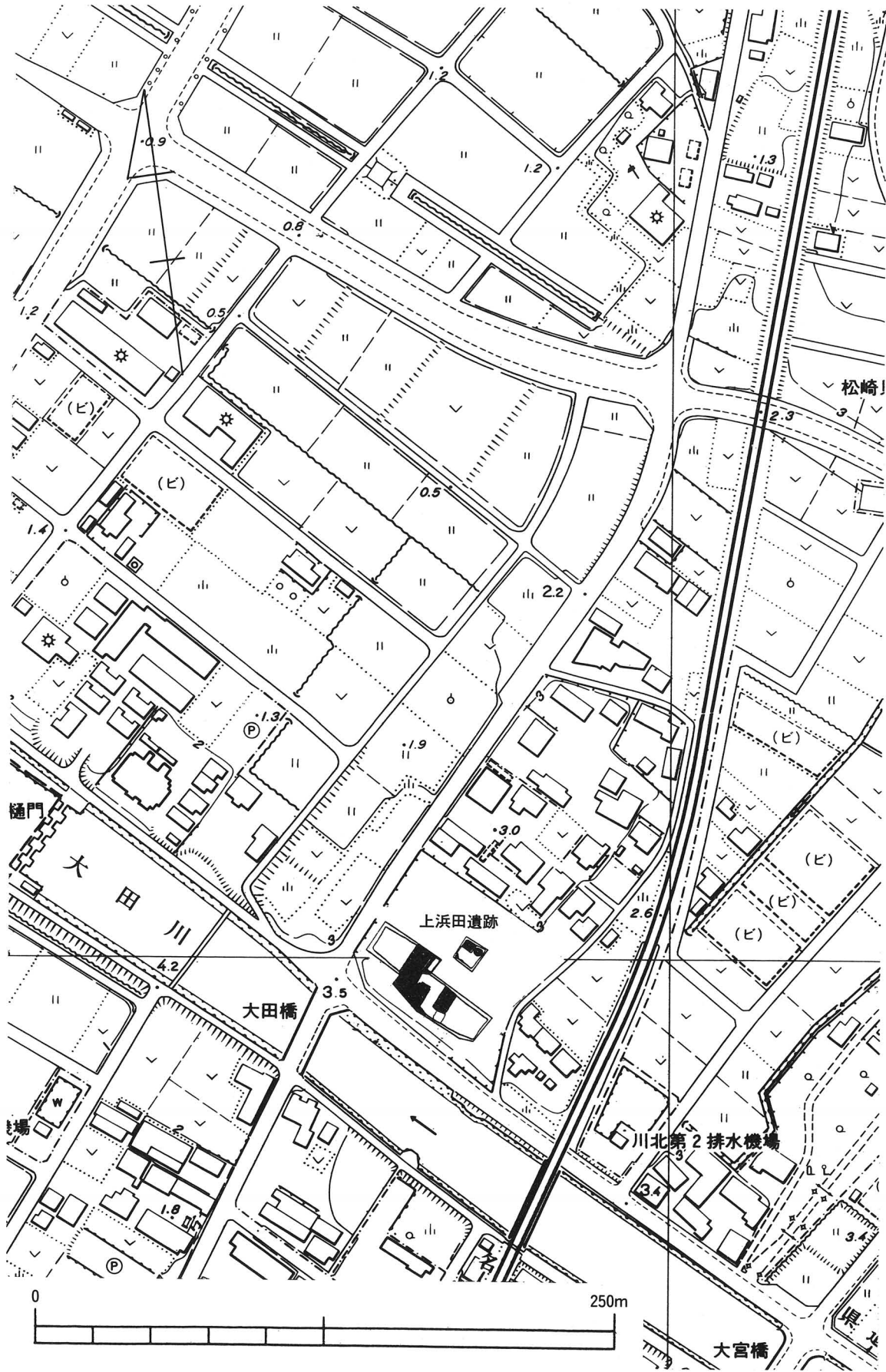
1月19日～23日に重機を使用して表土除去を行った。表土の厚さは様々であり、厚い部分で1m50cm、浅い部分で40cm程の埋め土及び無遺物層を除去した。また、表土を除去した段階で、調査区の4割近くが、従前の建物等の建設によると思われる攪乱を受けていることが判明した。その後、1月27日から手掘りによる下層の調査にかかった。

調査は調査区1の西側（A～D区）から順に東側へと進めた。A・B・C区は、知多式製塩土器3・4類を多量に含む遺物包含層（以下、製塩土器廃棄層）を40cm～1m程掘り下げた。A区とB区の一部については、1m程掘り下げた段階で水が湧き、壁の崩落等の危険があるため、この高さで調査を中止した。ついで、E・F・G・H・I区の調査を行ったが、攪乱を受けている部分が多く、E・F区については僅かに帯状に残存しているのみであった。D～H区にかけては、本遺跡の標高の最も高い部分であり、製塩土器廃棄層がA～C区より浅く残存しており、20～50cm程であった。しかし、F・G・H区の製塩土器廃棄層を除去した段階で、当初地山と考えていた層の下から古い時期の遺物が出土したため、さらに下層の調査に取りかかったところ、5～10cm程の遺物をほとんど含まない層を挟んで、下層に40～50cm程の古墳時代の土師器・須恵器等を含む層を確認した。また、F-2区では古墳時代（6世紀中頃）のかまどを検出し、I-5区でも古墳時代（5世紀初頭頃）の土坑を検出した。このため、J・K・L区の調査と並行して、古い時期の層が存在する可能性の高いC・D区の下層の調査を行った。J・K・L区は、A～H区のような製塩土器を多量に含む層は見られず、部分的に灰釉陶器等が出土した程度であった。一方、下層の調査を行ったC区からは、東山11号窯式（5世紀後半頃）の須恵器がまとまって出土した。

調査区1の調査がほぼ終了した段階で、調査区2の調査にかかった。調査区2には、40～50cmほどの製塩土器廃棄層が堆積しており、南西部には、この層を取り除いた下層から古墳



第1図-1 上浜田遺跡位置図(1/15000)



第1図-2 上浜田遺跡位置図 (1/2500)

時代の須恵器（東山11号窯式）・土師器（宇田式前・中期頃）・古いタイプの製塩土器等が、ほぼ同一レベルでまとまって出土した。

発掘作業は3月23日に終了し、翌24日に完掘状態の実測・写真撮影を行い、調査を終了した。

本遺跡周辺は、松崎遺跡も含めた知多半島でも最大級の製塩遺跡が広がっていると思われる。

第二節 遺跡の立地

上浜田遺跡は、古墳時代から平安時代の製塩遺跡である。今回調査した地点は、東海市役所の西方約800m、名古屋鉄道常滑線の西側の大田川沿いに位置する（第1図）。

本遺跡は知多半島北部の伊勢湾岸にあり、海岸平地が広がっているところにある。この海岸平地上の最も海岸寄りに、標高3mほどの高まり（砂堆）があり、今回の調査では、丁度この高まりを横断する様に調査区が設定されている。

この高まりは、本遺跡の北側に近接する松崎遺跡から続くもので、大田川を挟んで南側にも続くようで、製塩遺跡である下浜田遺跡がある。この高まりのほぼ全域にわたって、古墳時代から平安時代頃まで続いた製塩遺跡が広がっていたようである。

なお、現在の大田川は、江戸時代（寛永期）に尾張藩2代藩主徳川光友が、横須賀御殿造営のために川路を変えたものといわれ、本遺跡の位置する高まりを横断して流れている。

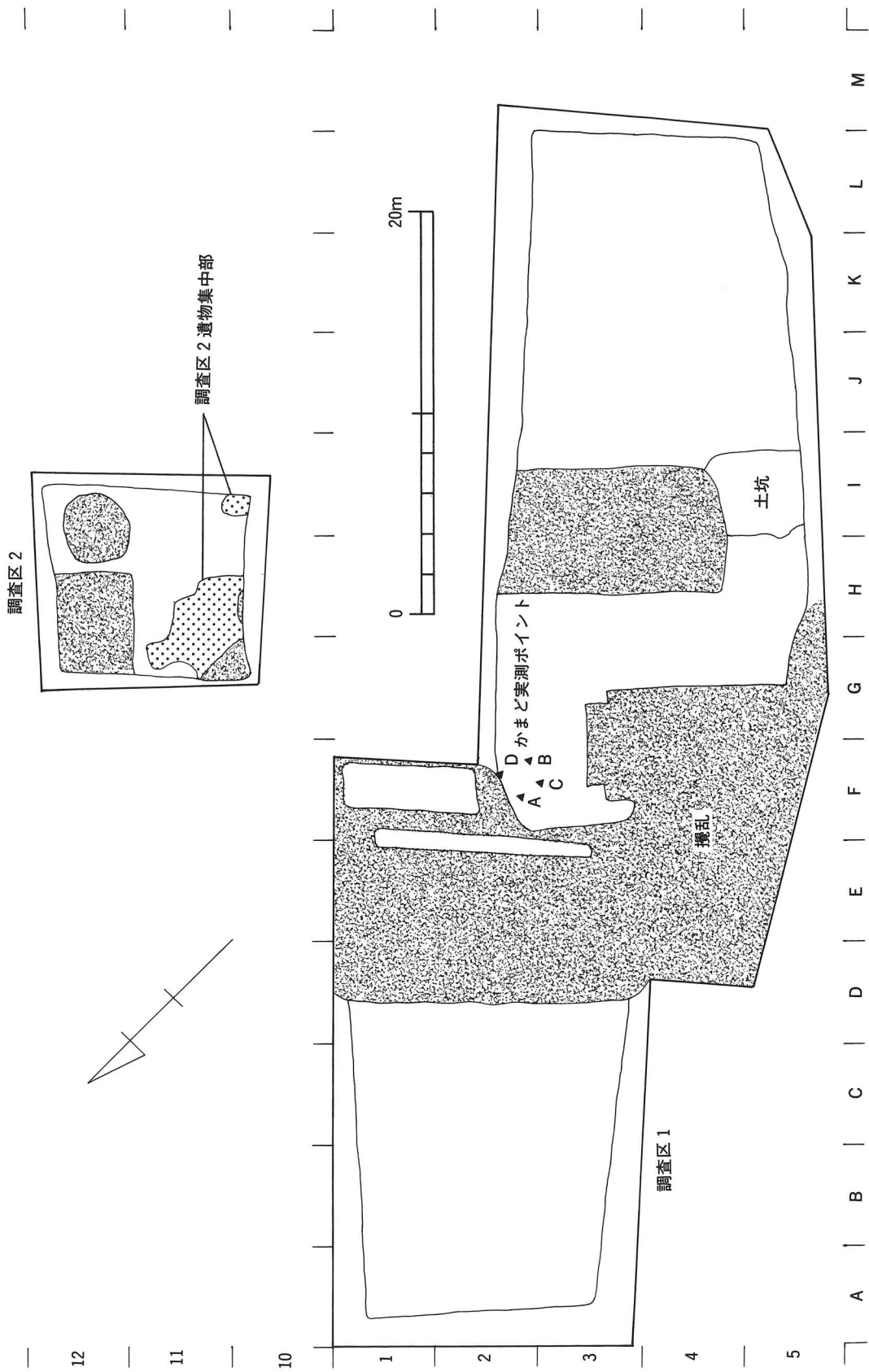
第三節 基本層序（第3図）

本遺跡は海岸寄りの砂堆上に位置し、現地表面は標高3m～4mである。調査区1は、この高まりを横断する様に配置されており、中央部が最も高く、両側に低くなっていく。本遺跡の基本土層は1～15層に分けられる。以下、各層ごとに説明する。

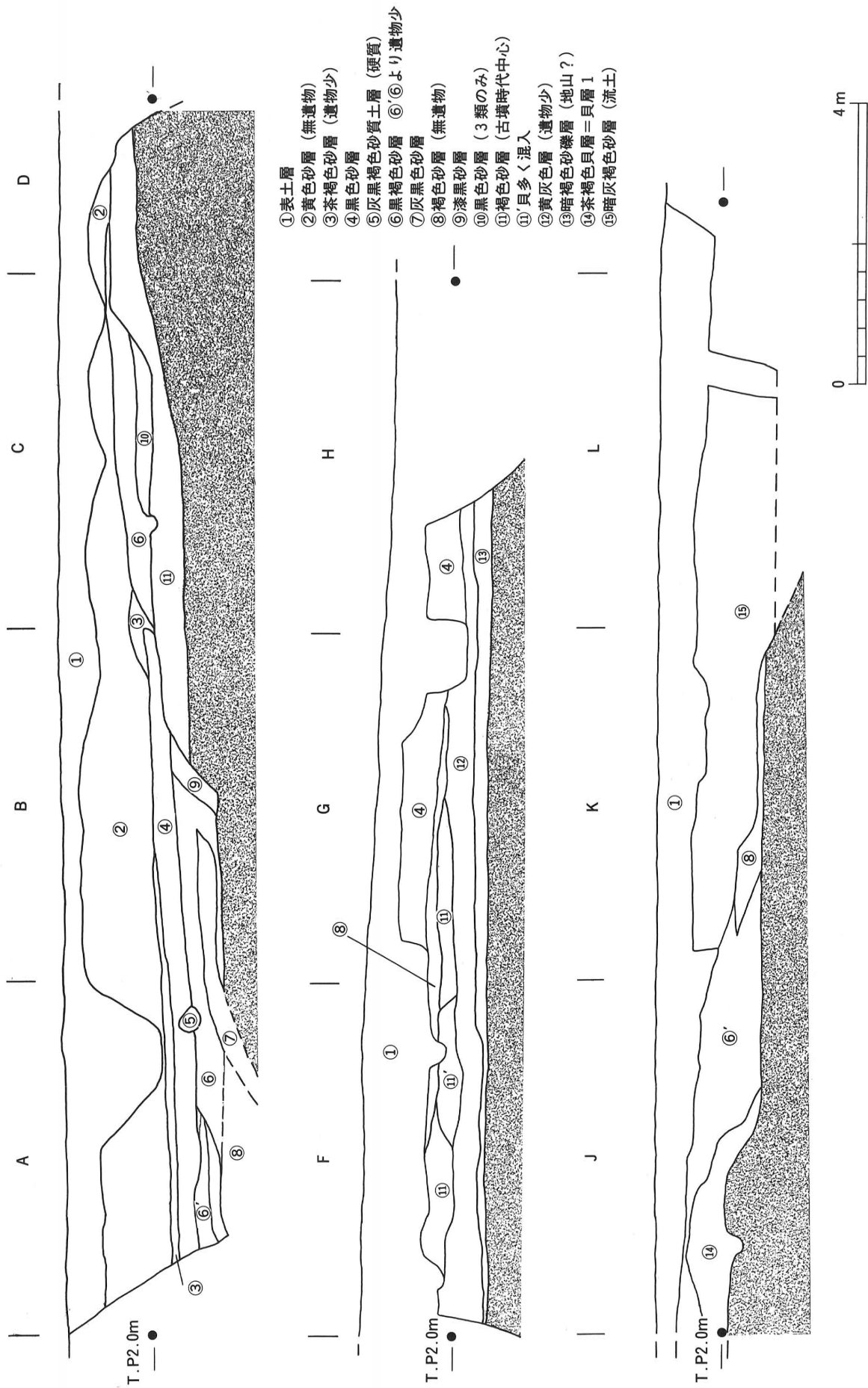
1層は、50～80cm程の表土及び盛土である。2層は、遺物を含まない黄色砂層である。8層を除く3～14層は、遺物包含層である。3層は、茶褐色砂層である。A～B区の北壁沿いで細かく割れた清郷型鍋が多量に出土しているほかは、製塩土器等遺物の混入は少ない。4層は知多式製塩土器3・4類を多量に含む黒色砂層である。5層は灰色がかった硬質な黒褐色砂質土ブロックである。6・7・9層は4層同様知多式製塩土器3・4類を多く含む層で、6層は黒褐色、7層は灰黒色、9層は漆黒色の砂層である。6層は遺物がやや少ない。10層は、知多式製塩土器3類のみを包含する黒色砂層である。

11～13層は、古墳時代の遺物を包含する層である。11層は褐色、12層は黄灰色の砂層で、12層には遺物の混入が少ない。11'層は貝（ハマグリ主体）が多く混入する。13層は暗褐色砂礫層で、地山の可能性があるが、遺物を少量含む。

14層は茶褐色の貝層（シオフキ主体＝貝層2）で、下層では平安時代（折戸53号窯期）の灰釉陶器が比較的まとまって出土している。15層は全体をみると暗灰褐色砂層であるが、細かく観察すると、わずかに色調の異なる薄層が幾重にも重なっており、流土と考えられる。



第2図 遺構等配置図 (1/300)



第3図 基本土層図・調査区1北壁 (1/80)

第Ⅱ章 調査の成果

第一節 遺構

遺構としては、本遺跡を特徴づける製塩土器堆積層群がほとんどで、以外には、かまど1基（縦穴住居）と土坑1基を検出したのみである。以下、各遺構ごとに説明する。

1 かまど〔縦穴住居跡〕（第4図、第13・14図1～26）

本遺構は、調査区1のほぼ中央（F-2・3区）に位置する。縦穴住居跡に伴うかまどと思われるが、周囲を精査したにもかかわらず堅穴住居の範囲を確認することはできなかった。

本かまどは砂地に築かれている割に、天井部が崩落している以外は遺存状態は良好である。かまどの焚口方向からみて、住居の北壁に位置すると考えられ、黄褐色の粘質土（いわゆる山砂）で築かれている。遺存状態から規模を推定すると、焚口から煙道奥まで約130cm、幅約130cm、床面からの高さは約50cmである。

かまどの内部には、炭火物・焼成粘土塊等が混入した褐色砂が堆積しており、同層中からは須恵器坏身7、土師器平底甕^{かめ}2、製塩土器知多式1類（第25図33・34）、石製支脚5が出土している（第13図1・2・4～7）。石製支脚5は、かまどの中央西寄りに、直立した状態で出土しており、近接して土師器平底甕2が出土している。また、かまどの袖部上で須恵器甗^{こしき}3が出土しているほか、かまど周辺からは須恵器の坏身・坏蓋・高坏・甗、土師器の甕・坏・小形壺が出土しているが、本住居跡に伴う遺物かどうかは住居範囲を確認することができなかったこともあり、不明である。

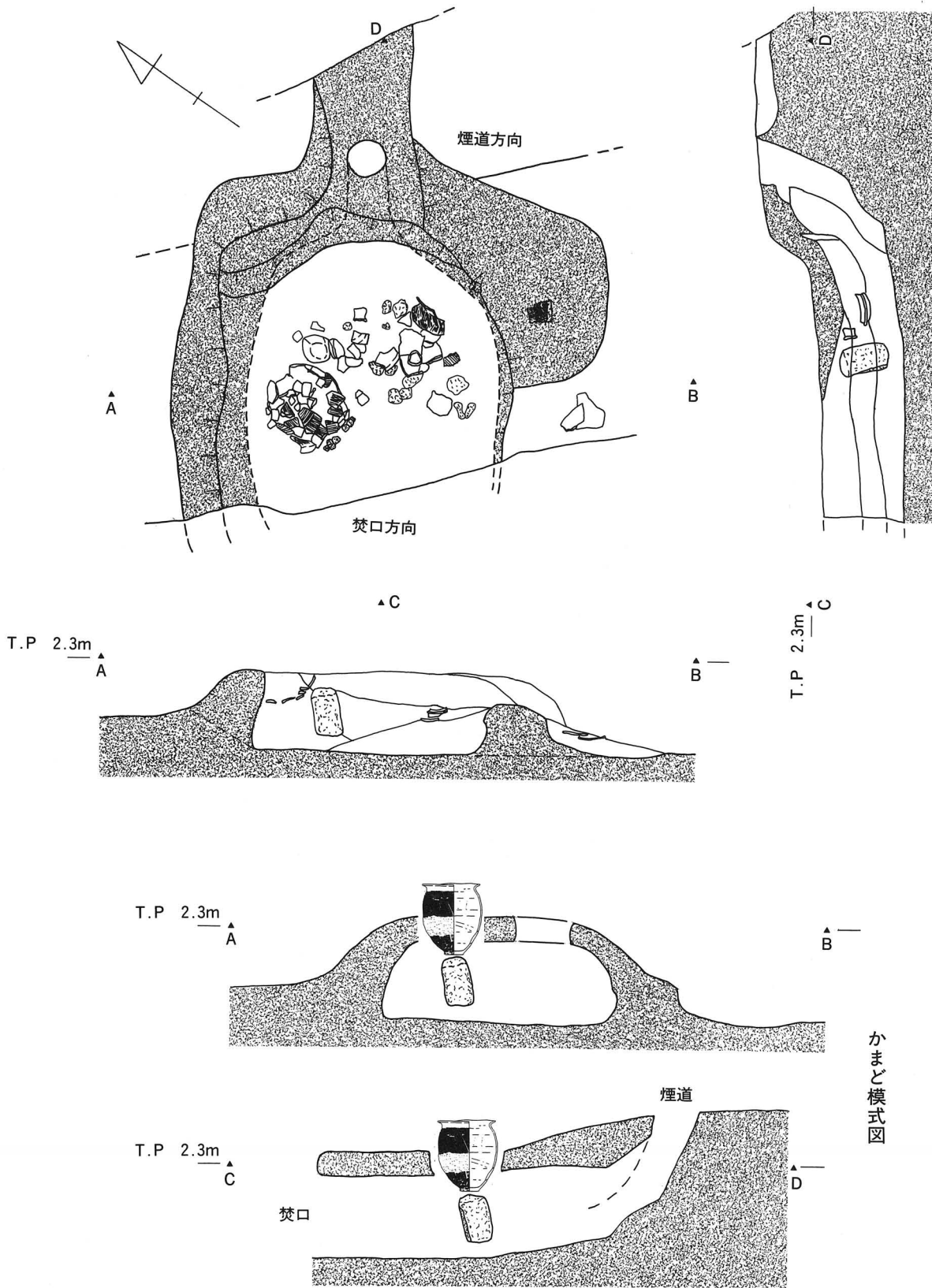
本住居跡の帰属時期は、かまど内から出土した須恵器坏身7から、東山61号窯式（6世紀前半）に比定できよう。

2 土坑（第5図、第15図27～34）

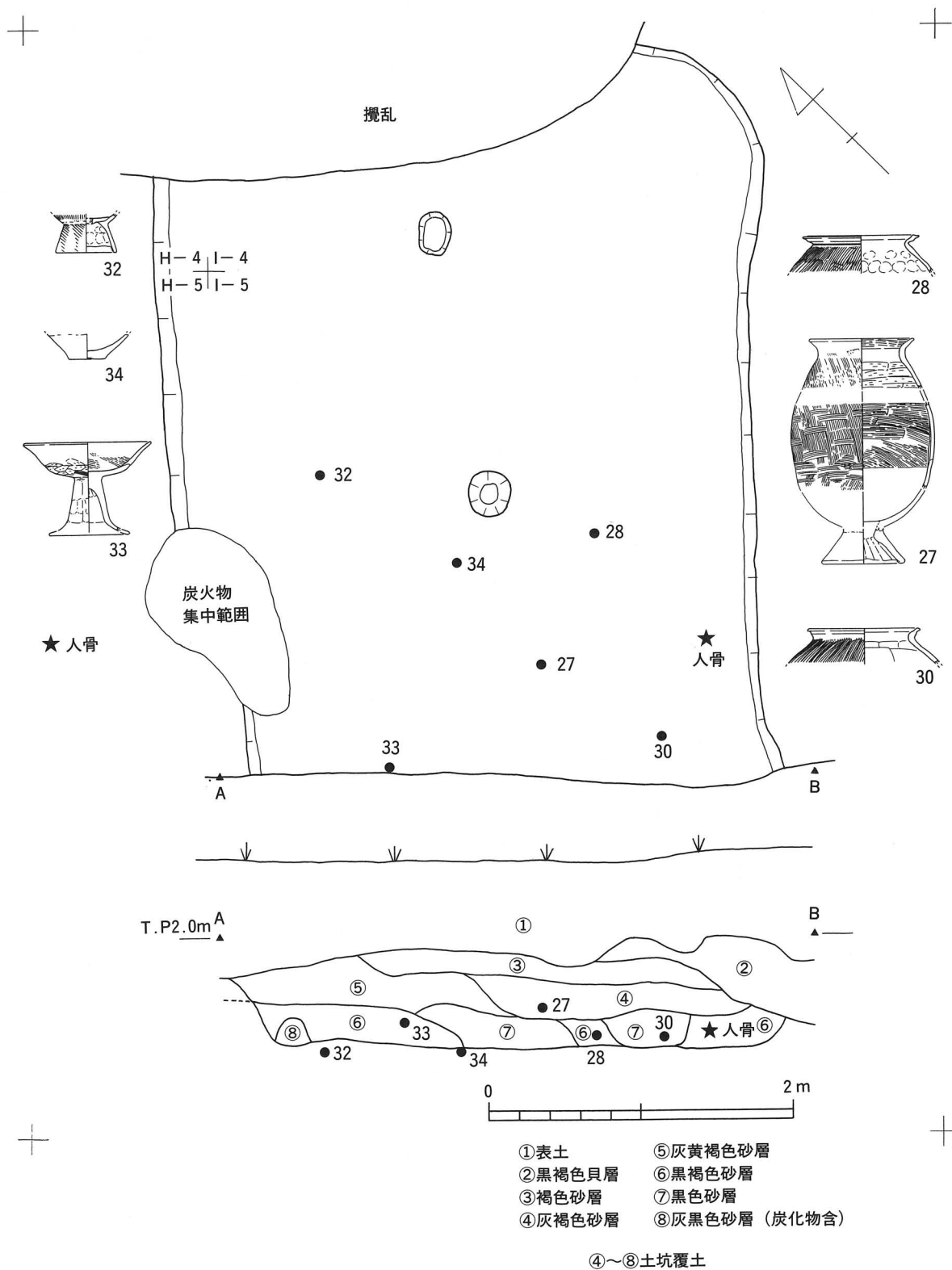
本遺構は調査区1の南部中央（I-4・5区）に位置する。遺構北側の一部が後世の攪乱によって破壊されているほか、南側は調査区外にかかっており、正確な規模は不明だが、1辺約4mの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは約35cmである。遺構中央には、床面から掘り込んだ2基のピットを検出した。また、南西隅の遺構の肩付近には、炭化物を含む、灰黒色砂質土が分布しているが、いずれも用途は不明である。

遺構内からは、人骨（頭部）が出土しており、土壙墓とも考えられるが、規模が大きいこともあり、不明である。また、人骨出土地点周辺から土師器の高坏・台付甕・S字状口縁台付甕等が出土している（第15図27～34）。S字状口縁台付甕（以下、S字甕）28・31・32、壺底部34が床面直上または若干浮いた状態で出土しているほかは、覆土から出土している。

本遺構の帰属時期は、床面から出土しているS字甕等から、松河戸I式後半期～松河戸II式期頃（5世紀初頭頃）に比定できよう（赤塚1996）。



第4図 かまど平面及び断面図 (1/20)



第5図 土坑平面及び断面図 (1/40)

3 煎熬場（製塩土器を差し込んで鹹水を煮沸した場）

本遺跡は旧海岸に平行して北東から南西方向に伸びる砂堆上に立地し、調査区1は、ちょうどその砂堆を横断している。現状で浸水しない砂堆の幅は、およそ50mで、もともとの砂堆の形状は、1.5mほどの高まりをもって緩やかな曲線を描いて盛り上がっていたものとみられるのであるが、調査の所見によれば、三段に造成されている。すなわち、調査区1の北東断面（第6図のアーイ・ウエ横断模式図）によってみると、北西側（伊勢湾に面する海側）から南東の内側（陸側）に向かって、標高約1mのところでは3m程が平坦となっている（1段目、①面とする）、次いで、標高約2mのところでは5m程が平坦となっている（2段目、②面とする）、そして最も高い標高約2.3m～2.1mのところでは20m程が平坦となっている（3段目＝最上段、③面とする）、この面から下がって、標高約2mのところでは12m程が平坦となっている（2段目、④面とする）、さらに下がって、標高約1.7mのところでは6m程が平坦となっている（1段目、⑤面とする）。

このうち、最上段の③面の全面（攪乱を受けた部分にも広がっていたとみられる）及び②面の③面寄りの部分（①面と②面の境の斜面にも分布する）に、直径1.5cm～2.0cmの円形の斑点が認められる。この斑点は、黒色のものが多いが、地山を構成する砂と同様の黄色のものも混じる。斑点には規則性がなく、乱雑なかたちで分布し、割合密に広がっている（巻頭カラー図版参照）。この斑点の断面をみると、深さが3cm～12cmとバラツキがあり、先端は尖りぎみで丸くおさまるものが多い（ちょうど出土した製塩土器の脚の形に似る）。ほぼ垂直のものが大半を占めるが、斜めのものも認められる。この面は、周囲に分布する製塩土器の廃棄状態から見て、煎熬の場であったところであり、この斑点が煎熬するために製塩土器を差し込んだ痕跡である可能性が高い。

知多式製塩土器は、海岸の砂に差し込んで立たせて使用されており、できるだけ差し込みやすいように工夫されて、先端の尖った棒状脚へと変化している。こうした製塩土器を立たせる場所としては、実は、何も手を加えない砂のままの状態が、最も差し込みやすいのである。そうしたことからみても、斑点が今回多量に出土した知多式製塩土器3類（及び4類）を差し込んだ痕跡であるとみられるのである。

ただ、こうした斑点が間違いなく製塩土器の脚を差し込んだ痕跡であると確定できない要因も残る。すなわち、①脚を抜き取った後の、穴に入り込んだ黒砂等に炭化物などの不純物が混入していない。煎熬に使用した燃料の灰や炭化物が製塩土器を取り巻いていたとすれば抜いた瞬間に多少なりともそれらが混じるのではないだろうか、との疑問が生じる。②製塩土器の棒脚は、その色調変化からみて中程まで差し込んでおり、その深さは5cm以内であるが、残存する穴で、その倍以上に深いものがある。この現象は、脚を坏部との付け根まで差し込まないと生じない。③斜めの穴がある。単純に縦に砂に差し込めば済むものを、斜めにも差し込むのであろうか、などの疑問である。

以上の疑問が残るものの、斑点は、煎熬の場所とみられる区域にのみ分布していることや、煎熬の場でこうした穴（斑点）が生じる他の要因が考えられないことから、現状判断としては、製塩土器を差し込んだ痕であったと考えている。

その後、1999年（平成11年）1月に、東海市横須賀町の宮西遺跡の製塩遺跡を調査したが、ここでも、同様の状態を示す斑点を検出している。ただ、両遺跡とも調査した範囲では、この穴（斑点）に製塩土器の脚が刺さったままの状態は検出していない。

4 製塩土器廃棄場

③面の煎熬の場から、海岸寄りに下がる②面、①面方向に使用した製塩土器を廃棄している（第7図参照）。③面の南西側は、攪乱を受けており製塩土器廃棄の状態を確認できないが、南東側の④面、⑤面には広がっていない。

この三段面のうち、③面肩下の②面上と②面肩下の①面上に知多式製塩土器3類のみの廃棄層が堆積することからみて、3類の使用時期（7世紀前半）には形作られていたことが分かる。また、⑤面からは灰釉陶器の折戸53号窯式（現在、10世紀前半代に編年されている）の製品が出土しており、この時期に形作られている。④面は、③面との差が顕著ではなく広がっており、③面寄りには知多式製塩土器4類の細片や貝殻の混じる黒色土層が広がり、⑤面寄りには折戸53号窯式の製品を伴出するシオフキを主体とする貝層（貝層2）が広がっている。このことからみて、④・⑤面方面は土器製塩操業時には段は造成されておらず、自然傾斜のなだらかな斜面であったとみられる。

ここで、土器製塩操業時に形成された①・②面の段の意味合いについて考えてたい。

結論としては、製塩土器を差して煎熬するための場として段が作られたと、みている。

まず、前述したように製塩土器廃棄層の堆積状態からみて、3類使用の時期に、①・②・③面を平坦に作り出していることが分かる。第6図の土層断面オーカ・キークに示すように、③面の上面から②面の肩にかけてと、②面から①面への斜面に3類のみを包含する廃棄層が堆積する。また、①面から下がる斜面にも4類と混在はするが3類が出土する。これは、各平坦面で煎熬作業を行った結果、平坦面にたまった灰・炭などの不要物を下方へ掻き出したことによって生じたものとみられる。その上面に、間層を挟まずに、4類の廃棄層が堆積していることからみて、このあたりでは、3類から4類へと引き続いて、ないしは程無く煎熬作業が行われている。4類使用時にあたって、本来、②・①面上にも使用廃棄された3類層が広がっていたのであろうが、それが取り除かれたような状態となっている。この堆積状態は、上方の③面あたりで煎熬作業を行い、その不要物を②・①面方向の下方へ単に掻き出しただけでは生じないものである。おそらく、4類使用時にあっても各段を作り出して、それぞれの面で煎熬作業を行ったものと考えられる。

実際には次のような過程が考えられる。まず、①面で煎熬作業を行い、その不要物を下方へ単に掻き出す。この面が、作業による地表面硬化あるいは不要物の下方への掻き出しが難儀になった段階で、②面に煎熬場を移し、①面方向へ不要物を掻き出した。この面も、作業による硬化あるいは不要物の下方への掻き出しが難儀になった段階で、③面へ移動し、②面方向へ不要物を掻き出した、という煎熬作業場の移動である。

なお、名古屋港の平均満潮・干潮面（1994年のデータ）をみると、平均満潮面が標高（T.P）0.718mで、現在の暦（太陽暦）で最も高位となる9月の平均満潮面が0.888mであり、通常の潮の満ち引きでは①面②面③面④面⑤面とも冠水はしない高さである。平均干潮面は-0.722mである。

5 貝層

貝層1（第3図） G3区に広がる貝層で、推定の大きさが径3m・厚さ50cmである。製塩土器4類の碎片を含む黒色砂層に介在しており、貝層中にも製塩土器が混入している。本遺跡における4類使用時期は、8世紀を中心とする頃ととらえており、貝層も同時期に形成

されたものであろう。

貝層2（第3図14層）I区・J区の2区から5区にかけて広がり、北東の未調査区域にも連なっている。灰釉陶器の折戸53号窯式（10世紀前半）の製品が伴出しており、その頃に形成されたものであろう。

両貝層のほぼ中央部でブロック・サンプリングした土のう袋の一つ分の貝構成比は、第1表のとおりである。

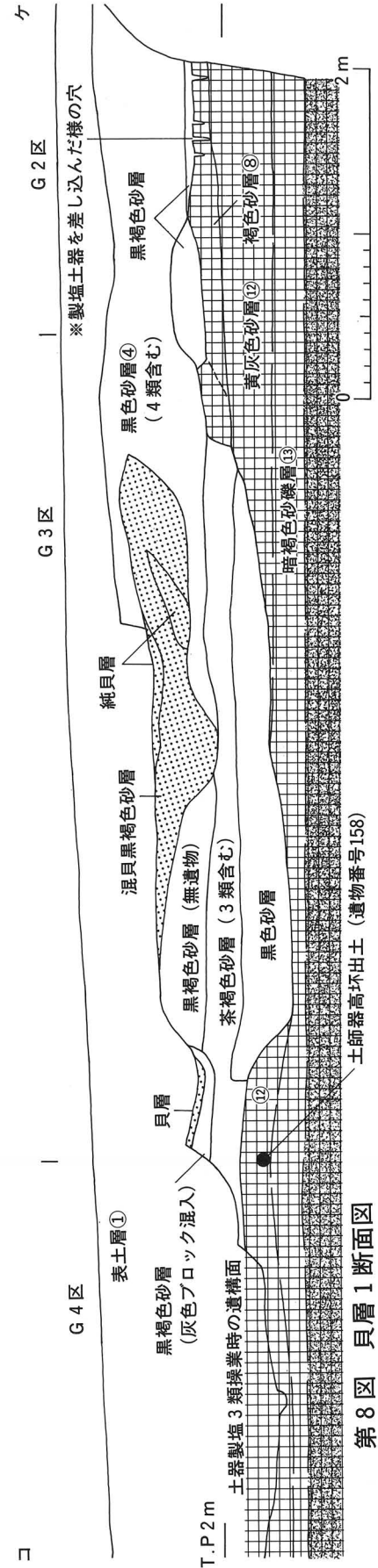
本遺跡の北に広がる松崎遺跡の古墳時代から平安時代にかけてのいくつかの貝層では、ハマグリが6割以上を占め、ついでシオフキが2割程度を占めている。300mほど南に連なり一連の製塩遺跡としてとらえられる上浜田の地では、ほとんどがシオフキの貝層もあり、貝構成に違いが認められる。貝類の採集は、基本的に昼間に潮が干る3月から8月にかけての潮干狩りの時期が最適であり、古代にあっても同様な時期であったろう。とすると、ハマグリとシオフキをある程度分けて利用していたのではないかと考えられる。また、単に、ある時にシオフキが以上繁殖した結果とも考えられる。

第1表 貝類構成比一覧表

貝層1		
種名	個体数	%
シオフキ	226	67.3
ハマグリ	102	30.4
アサリ	4	1.2
オオノガイ	1	0.3
マテガイ	1	0.3
ニナ類	2	0.6
計	336	100.1
備考	製塩土器4類混入	
貝層2		
種名	個体数	%
シオフキ	245	81.4
ハマグリ	54	17.9
アサリ	1	0.3
マテガイ	1	0.3
計	301	99.9
備考	灰釉陶器段皿片混入	

果とも考えられる。

ただ、貝としては、カガミガイ・ヤマトシジミ・オキシジミ・マテガイ・マガキ・イタボガキ・サルボウ・アカニシ・ツメタガイなど多種のものがあ



第8図 貝層1断面図

第二節 遺物

1 かまど〔縦穴住居跡〕出土遺物（第13・14図1～26、第25図33・34、第5表）

(1) かまど内出土遺物

かまど内部からは、土師器甕、須恵器坏身、石製支脚、知多式製塩土器1類が出土している（第13図1・2・4～7、第25図33・34）。

土師器甕1・2・4・6は平底と思われるが、6については脚台が付く可能性もある。これらはいずれも、口縁部回転ナデ調整、胴部外面ハケ調整、胴部内面ナデ及びヘラ削り調整を加えている。1・2・4・6は胴部下半に火熱を強く受けており、器表面が剥離および赤色に変色している。2はかまど内に直立した状態で出土した石製支脚5に近接して出土しており、支脚とともにかまどに設置された状態で廃棄された可能性が高い。胴部中ほど外面の幅5cm程が擦れて器表面剥離が目立っており、かまどの天井部との接していた部分と考えられ、かまどの天井部分の厚さが5cm程であったことが解る。

土師器甕の時期については、宇田式後期頃（6世紀前半頃）に位置づけられよう。

須恵器坏身7は口縁部がやや内傾して立ち上がり、端面は内側に傾斜する。体部下半の約1/2にはヘラ削り調整を加えている。東山61号窯式（6世紀前半頃）に比定できると思われる。

石製支脚5は花崗岩製で、火熱を強く受けており、表面は非常にもろくなっている。最下部は打ち搔いて尖らせており、最上部は意図的かどうかは不明だが平坦である。

製塩土器（第25図33・34）は、坏部33と脚台34があり、同一個体の可能性が高い。脚台は、筒形を呈し、高さ6.5cmで、脚台下端を指先でつまんでおり、知多式製塩土器1C類に分類できる（立松1994）。また、かまどの東側袖部上からも知多式製塩土器1類の脚台上部が出土している。

須恵器甕^{こしき}3はかまどの東側袖部上で出土している。胴部外面は叩き調整を加え、中部に幅4mm程の沈線を1条めぐらしている。残存する胴部下端は、外面の調整痕からみて把手が付いていたと思われる。内面はヘラ削り調整の後、丁寧なナデ調整を施している。

須恵器甕3以外は、かまど内部でまとまって出土しており、一括廃棄された可能性が高い資料である。

(2) かまど付近出土遺物

本住居跡は住居範囲を確認できなかったため、現地調査では住居跡埋土中から出土した遺物を特定できなかったが、推定の住居範囲と出土レベルから、住居内から出土したと思われる遺物を抽出した（第14図8～26）。抽出した遺物には、須恵器の坏蓋（8～11）・坏身（12～15）・無蓋高坏（16）・甕（17～19）、土師器の甕（20・21）・坏（22・23・24）・小型壺（25）・短頸壺（26）がある。

8は天井部の約1/2をヘラ削りし、平坦面になると思われる。口縁部は内湾し、端面は内側に傾斜する。9～11は8に比して口径が大きく、天井部のヘラ削り部分が1/2～1/3程度である。口縁部は内湾し、端部はやや外反するものもあり、端面は若干内側に傾斜する。

12～15は、口縁部が内傾し、端面は内側に傾斜する。体部は残存部分が少ないが、下底の1/2～1/3にヘラ削り調整を加える。12は外面に厚く自然釉がかかる。

16は坏部下底2/3ほどが回転ヘラ削りである。中央部には2条の沈線をめぐらす。口縁部

付近は焼き歪み、外面に黒色の自然釉がかかる。

17～19はいずれも把手を有し、中央部に1条ないし2条の沈線をめぐらす。17はほぼ直立する器形で、胴上半部は叩き調整、胴下半は縦方向のヘラ削り調整である。軟質な焼成である。18・19は全体的に丸みのある器形で、口縁下部に突出する稜をもつ。18は胴部外面に叩き調整を加えた後、把手下部分の幅2cm程を回転ナデ調整を加えている。19は全面回転ナデ調整である。

20は比較的明瞭な肩部をもち、短く外反する口縁部をもち、端面は平坦になる。胴部外面はハケ調整を加え、口縁部及び内面は回転ナデ調整である。台付甕の脚台部21は内外面とも指ナデで、下端部に指頭痕が残る。砂粒を多く含む胎土で、本遺跡から出土している宇田型甕の胎土に似る。

22は、ほぼ半円形の器形で、口縁部がわずかに内湾し、端面は内側に傾斜する。口縁部と体部上半は回転ナデ調整で、体部下半は静止ヘラ削りである。23も全体的に丸みのある器形だが、22よりやや扁平である。口縁部が若干内傾気味に立ち上がり、端面は内側に傾斜する。底部は静止ヘラ削りである。24は口縁部が引き出されて横にのびる。内外面とも回転ナデ調整である。25は口縁部が回転ナデ調整である。26は、口縁部が外湾気味に短く立ち上がり、上端は平坦である。胴部外面はヘラ削りを加えるが、上部に指頭痕が残る、スガが付着する。須恵器坏類は、ほぼ東山61号窯期（6世紀前半）に比定できるが、8は若干古い様相をもつ。一方、須恵器高坏・甑は坏類に比べ若干新しく、東山44号窯期あるいは東山50号窯期頃（7世紀代）まで下る可能性もある。

2 土坑出土遺物（第15図27～34、第5表）

土坑内からは、土師器の台付甕（27）・S字甕（28～32）・高坏（33）・壺底部（34）が出土している。

27は短い頸部を有し、長胴形を呈する器形である。胴部外面は乱雑なハケ調整で、上部の器表面は剥離が目立つ。内面は、胴部上面がヘラ削り、中央部はハケ様の削り調整である。脚台部は内外面ともナデ調整で、端部を折り返す。28～31は口縁端部が肥厚し、面を有する。28・29は、口縁部が外方にひらき、端面に若干の窪みをもつ。30・31は28・29に比べ端面は狭く、外側に傾斜する。28～31はいずれも肩部付近の横方向のハケ調整は施していないようである。脚台部32は薄手の作りで、下端部を折り返し、内面には指頭痕が残る。

33は、口縁部付近が回転ナデ調整、底部外面がヘラ削りで、内面は底部付近にヘラミガキ調整を加えている。脚部は緩やかに広がる裾部をもつ。内外面ともナデ調整で、上部にのみ、ヘラミガキ調整を加える。

34は、器形は不明だが、内面は丁寧なナデ調整で、外面にはヘラミガキ調整を加える。また、底面中央が窪んでいる。

本遺構から出土したS字甕は、松河戸Ⅰ式後半期～松河戸Ⅱ式期頃（5世紀初頭頃）に位置づけられよう。

3 調査区2遺物集中部出土遺物（第16・17・18図35～80、第5表）

前節遺構では述べていないが、調査区2の南側で、知多式製塩土器3・4類を含む層を取り除いた下に堆積する同一層から平面的にも集中して検出した遺物群がある。本遺物群は遺

構に伴うものではないが、一括廃棄された可能性の高いものとして、他の包含層出土遺物とは別に遺物集中部として述べることにする。

本遺物群には、須恵器の坏蓋第16図35、坏身36・37、有蓋高坏38～40、大甕41、土師器の甕第17図42～54、高坏第18図55～69、短頸壺70・71、小型壺72～79、坏80がある。

須恵器

35は天井部のほとんど全面が回転ヘラ削りで、口縁はほぼ直立し、口唇部内面はわずかに窪む。36・37は体部下半のほとんどが回転ヘラ削りで、口縁はほぼ直立し、端面は内側に傾斜する。38～40の坏部は、坏身36・37とほぼ同様の形状で、脚部は外湾しながら開き、下端部が突帯様に肥厚する。41は大甕の胴部片で、遺物集中部から若干離れた位置から出土している。外面に斜格子の叩きを施す。

坏蓋35・坏身36・37・有蓋高坏38～40は、いずれも東山11号窯式期頃（5世紀後半）に位置づけられよう。

土師器

42～44・46・48は宇田型台付甕である。胴部外面はハケ調整、内面はナデ調整だが、44のハケ目は荒く鋭い。また胴部下半にススが付着する。50は小型の台付甕で口端は尖っている。45・53は平底になると思われる。45は、丸みのある胴部に、く字状に外反する口縁部をもち、端部を丸くおさめる。外面胴部上半がハケ調整、下半がナデ調整で、内面は口唇部を除き全面ハケ調整である。外面全体にススが付着する。53は45に比べ胴部の膨らみが少なく、口縁部は内湾気味に立ち上がり、50同様口端が尖る。胴部外面はハケ調整、内面はヘラ削り調整で、外面には口縁部に至るまでススが付着し、胴下半部には火熱が強く加わる。47・49・54は甕の口縁部片で、47・49の外面にはススが付着する。いずれも、胴部外面はハケ調整である。47・54が口縁端部を丸くおさめるのに対して、49は跳ね上げ口縁をもつ。51・52は台付甕の脚台部で、内外面ともナデ調整である。

55・56は、坏部が丸みをもって立ち上がり、口端部は内側に傾斜する。坏部下半には粘土の接合跡が残る。脚台部は裾部が強く外反し、端部は丸くおさめており、接地面には平坦面が形成されている。脚部外面はヘラ削り整形後ナデ調整を加える。60・61は小形壺に脚台を付した様な器形で、外面全体に丁寧なナデ調整を加える。60は、丸みのある体部に屈曲する幅広の口縁部をもち、胴部下方に粘土の接合痕が残る。脚部は短く、付け根から直線的に開き、端部を丸くおさめる。61は、丸みのある体部に、短く屈曲する口縁部をもち、胴部と下方に粘土の接合痕が残る。62は、坏部が直線的に開き、口縁端部を丸くおさめる。坏部は回転ナデ調整で、体部と底部との間に突帯を付す。内面は器表面が磨耗している。57・63は、坏部が丸みをおびて立ち上がり、口縁部はさらに開き、端部はつまみ上げ様に突起する。58は、55・56と同様の器形だが、口縁部がやや強く外反し、端部の傾斜面が幅広である。59は、直線的に開く体部をもち、口縁端部はつまみ上げように突起する。65は坏部が割合深く、脚台の裾が横にのびる。64・66～69は脚台部のみで、いずれも裾部が強く外反する。70・71は、球形の胴部に短く外反する口縁部をもつ。70は、口縁部と胴部との間に明瞭な段を有し、口縁端部を面取りしている。いずれも胴下部外面はヘラ削り調整で、内面はヘラ削り調整後ナデ調整を加える。72～77は、球形の胴部に若干外反する幅広の口縁部をもち、底部は平底ないし丸底である。73の口縁部はやや受口状を呈する。77の口縁部はやや直立気味で、全体のつくりが粗雑で、指頭痕がよく残る。いずれも口縁部内外面は回転ナデ調整で、胴部はナ

デ調整を施す。内面は73がヘラ削り調整のほかは、指先によって整形している。78は球形の胴部に短い受口状の口縁がつく。外面には指頭痕が残る。

80は半球形の偏平な胴部に短く外反する口縁がつく。体部は、内外面ともナデ調整、口縁部は回転ナデ調整である。

本遺物群の土師器については、宇田型甕等の特徴から、おおむね宇田式前期から中期にかけての時期（5世紀後半頃）に位置づけられると思われるが、44の宇田型甕については、若干古く、松河戸Ⅱ式期頃（5世紀前半頃）まで溯る可能性がある。

この他、本遺物群からは、知多式製塩土器の古いタイプ（知多式製塩土器^{ゼロ}0類）を含む、製塩土器が数点出土しているが、製塩土器についてはまとめて別項で述べることとする。

4 製塩土器（第25～29図・第7表）

知多式製塩土器の3類（棒状脚が握りはなしのままの成形のもの）と4類（先端が尖った細身の棒状脚のもの）が主体である。このほかに、古式の製塩土器が十数点出土している。**古式の製塩土器（第25図1～16）** 知多式製塩土器松崎類に含められるものが、11点ほど出土している。器体は斜め上方にV字形に立上がり、底部に裾開きの低い脚台をつけるものである。1・2は、底面が平滑でふくらみをもつ円盤様の脚台をつける変形のものである。器体内底面は、棒状具（ヘラ様具）によって粘土を掻き取り、ナデ調整を施している。色調は赤褐色を基調とするが、部分的に黒色などに变化する。3～6の脚台は、下端を指先でつまみ出したようにして作りだし、わずかに裾広がりになる。そのため、底面がほんの少し窪んだ形態となる。内底面の調整および色調の変化は、前者と同じである。7は台径が前者よりやや大きく、底面を平坦に作りだす。これらも変形のものである。8・9の脚台は、底面が窪んだ杯を伏せたような倒杯形である。これも内底面の調整および色調の変化は、前二者と同じである。これらが松崎類の基本型である。10の脚台は、脚高（脚台下端から器体内底面までの高さを示す。以下同じ。第9図参照）が前者に比べてやや高く、外面には成形時の指先の跡がよく残るが、器体内面は丁寧なナデ調整を施す。以上のものが、松崎類に含められる。

11は倒杯形の脚台で、脚の内外面ともに丁寧なナデ調整を施すが、器体内底面は棒状具（ヘラ様具）によって粘土を掻き取って整形している。器体はV字形をなすものようである。12の脚台は、緩やかに裾が広がり、内側の窪みも深い。器体内底面は、薄く剥離する。13の台脚は、下端が裾広がりになる器形で、内底面は棒状具（ヘラ様具）によって粘土を掻き取って整形し、使用後の薄い剥離が認められる。色調の部分的な変化も紅色、白色等と著しい。以上のものは、分類がなされていない型のものであるが、現在のところ出土量もごくわずかである。

14～16の脚台は、下半分を指で摘んで引き伸して筒型に作り出し、下端がわずかに広がる。下端面を板などの平坦面で叩くか打ち付けるかして平らに作り出し、下端の粘土が内側へ折れ曲がっている。筒状脚の内側は指先で丁寧に押さえ付けて整形している。器体の内底面は、棒状具（ヘラ様具）によって粘土を掻き取り、ナデ調整を加える。煮沸使用に伴う薄い剥離のあるもの（14）認められる。器体は混在する破片から見て、第25図に示すような復原形態となる。

以上のものは、一個ないし数個の資料（図示するものが全出土資料）であるが、①通有の

日常容器類ではない特殊品である。②土器使用に伴う色調の変化が、製塩土器と同じである。③器体内面が煮沸使用によって薄く剥離するものが多く、製塩土器と同じ特徴をもつ、の理由によって、製塩土器と判断したものである。

古式の製塩土器の分類 1～10は、大阪湾南部から紀淡海峡周辺の先進土器製塩地域で作られ、出された倒杯形の脚台をつける脚台Ⅱ式土器に類似するもので、その影響下に作り出されたとみられる知多式製塩土器の「松崎類」に含まれる形態である。11は松崎類の脚台下端を引き伸ばしたような形態であり、疑似的な松崎類である。12・13は脚台が高くなって、知多式製塩土器1類の筒型脚へ変化する過程の器形ではないかと考えられる。14～16は、後章の「まとめ」において詳述するが、時期的に知多式製塩土器1類に先行するものであり、形式変化のうえからみても、一応、1類に先行する知多式製塩土器^{ゼロ}0類として位置付けられうるものである。

知多式製塩土器1・2類 (第25図17～36) 1類は、深鉢形の器体に、筒型の脚台をつけた土器である。17～27の脚は、当初に筒の下端を板で叩くか、板に打ちつけるかして平坦に作り出し、後に指で摘んで、やや先細りになるように作り出している。器体の内底面は棒状具(ヘラ様具)によって粘土を掻き取って整形している。27は脚の下方三分の一のところでは色調が灰色に変化しており、この辺りまで砂に差し込んで使用された状況を示している。底径・脚高・器体と接する部分の脚の径の法量と、下端面を後に指先で摘んでいるものの当初は平坦に作り出している特徴から1A2類として区分できる。

28～31の脚は、前者と同様の作りであるが、脚が高くて1B類として区分できる。30は器体の内底面が薄く剥離する。31は脚の中程のところでは色調が灰色・紅色・赤褐色に変化している。32は筒脚の下方がやや下つぼみとなり、下端を指で摘んでつくりだしている。IC類として区分できる。33・34はF2区のかまど内から出土したものである。33は復原口径14cm、復原深さ11.5cmの深鉢形の器体で、口縁部は先尖りの素縁である。外面には掌の痕が残り、内面はヘラ削り、ナデ調整によって丁寧に平滑に仕上げている。外面よりも内面を丁寧に仕上げる作り方は、製塩土器に通有である。器壁の厚みは1.5mm～3mmと、大変薄い。34の脚も33同様、F2区のかまど内から出土したもので、1B類に含められよう。

35・36は当初筒形脚に作り出した後、先端部分をやや先尖りに丸く閉じ合わせた作りの2類である。器体の内底面は前者の1類と同様の作りである。35は復原した脚の長さのほぼ中程で色調が変化し、下方が灰褐色になる。やはり、このあたりまで砂に差し込んで立たせたものとみられる。大きさからみて、35が2A類、36が2C類に含められよう。

知多式製塩土器3類 (第26・27図37～123) 37・38の脚は、器体と接する脚部の径が太い。器体内底面はナデ調整を施し、棒状の脚の部分は握りはなしのまま、指の痕が顕著に残る。胎土は砂粒を多く含み、ザラザラとした器表面である。37は脚のほぼ中程で、色調が灰褐色に変色する。38は器体内底面が薄く剥離する。これらは、大きさからみて3A類に区分できる。39・40も太めの脚端で、同類に含められよう。41・42は器体の口縁部で、外面には掌の痕や粘土紐の接合痕が残り、内面はヘラ削りとナデ調整によって丁寧に平滑に仕上げている。厚みは2mm～3mmと薄く、先尖りの素縁である。43・44は器体の下底部で器体はU字形に丸みをおびて立ち上がる。器体部がこの程度まででも伸びて残存するものは少なく、ほとんどのものが脚と器体の接合部で破損している。器体内底面は43がヘラ削り、44がナデ調整である。

45～61はE 2・3区のほぼ同一の製塩土器包含層から出土したものである。脚はすべて握りはなしのままの成形で、器体と接する脚部の径が細いことから、総体として3 B類に含められるものである。器体内底面はナデ調整するものが多いが、ヘラ削り痕(49・59など)や絞り込んだ皺の痕の残るもの(48)もある。そのほとんどのものが、脚の中程で色調が変化し、下半が灰色・灰褐色・黒色・紅色などに変色する。ちょうど中程あたりが、砂中に差し込まれた部分と露出する部分の境で、煮沸使用によって色調が変化したものとみられる。

これらを詳細にみると、器体と接する脚部の径(脚径)と脚高(長さ)の違いによって、さらに四つに細分できる。3 B①48～50は脚径が2.3cm～2.7cm、高さが7.7cm～8.5cmで、太くて短いもの。3 B②45～47は、脚径が1.9cm～2.2cm、高さが8.7cm～9.0cmで、細くて短いもの。3 B③51～59は、脚径が1.9cm～2.4cm、高さが8.8cm～9.8cmで、太くて長いもの。3 B④60・61は、脚径が1.9cm～2.5cm、高さが10.2cm～10.7cmで、太くて最も長いもの、である。

62～76は、D 2区の灰層から出土した一括資料である。62・63・65は器体の口縁部で、外面には掌の痕、粘土紐の接合痕が残り、内面はヘラ削りとナデ調整によって丁寧に平滑に仕上げている。厚みは全体が一律ではなく、2mm～3mmに仕上げるものも多く、65のように5mmほどの厚みをもつ部分もある。口端面は部分的にほんのわずかな平坦面を持つ部分もあるが、全体は先尖りの素縁である。64は器体の胴部で、わずかに屈曲する。66～76の脚は、器体内底面はヘラ削りやナデの調整を施す。絞り込んだ皺の痕の残るもの(69)もある。66・72のように煮沸使用後に内底面が薄く剥離するものも多い。また、そのほとんどのものが、脚の中程で色調が変化し、下半が灰色系の色に変色する。先の細区分でみると、66・68が3 B②、76が3 B④、その他が3 B③である。

77～79は器体の口縁部で、外面には掌の痕、粘土紐の接合痕が残り、内面はヘラ削りとナデ調整によって丁寧に平滑に仕上げている。厚みは全体が一律ではなく、2mm～3mmに仕上げるものが多い。77・78の口縁部と、80～91の脚はD 1区の同一の製塩土器包含層出土資料である。器体内底面の調整や、脚の色調変化は前者と同様である。80～82が3 B②、83～86が3 B③、87～91が3 B④に区分できる。

92～95の脚はC 3区の同一の製塩土器包含層出土資料である。器体内底面の調整や、脚の色調変化は前者と同様であるが、絞りの皺の残るものが多い。脚の中程で色調が変化する。これらは3 B①に区分できる。

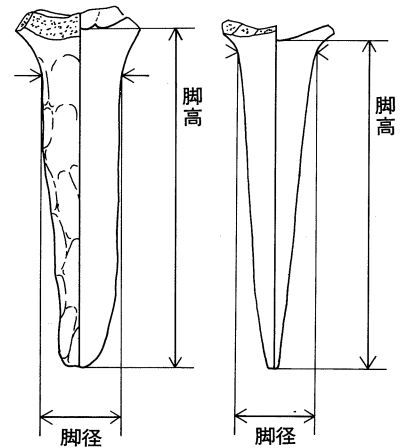
96～109の脚と111～113の口縁部は、B 1区の同一の製塩土器包含層出土資料である。器体内底面の調整や、脚の色調変化は前者と同様である。96～100が3 B②、101～107が3 B③、108・109が3 B④に区分できる。110～114の口縁部は先尖りの素縁で、外面には掌の痕、粘土紐の接合痕が残り、内面はヘラ削りとナデ調整によって丁寧に平滑に仕上げている。

116～123の脚は、各所から出土したもので、116が3 B①に、117～119が3 B③、120・121が3 B④に区分できる。122のように短いものもごく希にある。123は、器体下底部で、U字形に立ち上がる。

知多式製塩土器4類(第28・29図124～204) 4類は、3類に比べ、胎土に砂粒の混入が少なく、器表面がザラザラせず滑らかである。124～158はF 2区内で比較的明瞭に分離できる製塩土器包含層別に分けたものである。124～127は器体口縁部で、先尖りの素縁である。あ

186・187に示すように、部分的に厚みを減じないで口縁が丸みを持つところもある。外面には掌の痕、粘土紐の接合痕が残り、内面はヘラ削りとナデ調整によって丁寧に平滑に仕上げている。2mm～4mmの厚みである。

4類の脚は、脚径と脚高の違いによって、大きく三つに区分されている。4A類は脚径が1.3cm～2.0cmで、高さの違いによってさらに三细分される。4A1類が高さ8.5cm～11.2cm、4A2類が高さ7.1cm～8.4cm、4A3類が高さ5.5cm～7.0cmほどである。4AB類は脚径が2.1cm～2.5cmで、高さが9.0cm～11.0cmほどで、高さにはバラツキがある。4AC類は脚径が2.7cm～3.6cmで、高さが9.0cm～11.0cmほどで、高さにはバラツキがある。4AB類と4AC類の出土量は少ない。現在のところ、以上のように把握されている(立松1994)。



第9図 製塩土器脚部計測基準

129～136はF2区の灰褐色土層からの出土で、129～133が4A1類、134～136が4A3類に区分できる。125～128の口縁部と137～147の脚はF2区の黒色砂層からの出土で、137・138が4A1類、139～145が4A2類、146・147が4A3類に区分できる。148～158はF2区の灰層からの出土で、148～156が4A2類、157・158が4A3類に区分できる。これらの器体の内底面は、ヘラ削りによって調整するものが多い。脚の表面は平滑で、板の上で転がして作り出している。131には、転がしたときの螺旋の痕がよく認められる。脚の中程で色調が変化しており、このあたりが砂に差し込まれた部分と露出する部分の境で、煮沸使用によって変色をきたしたものとみられる。159～169はE1区の灰と炭の混入する黒色砂層からの出土で、すべて4A2類に区分できる。170～204は各所から出土したものを、類別に集めたものである。170～174と186～190は口縁部で、前者と同様の作りである。186・187は小破片であるが残存する部分の中でも先尖りと丸みをもつところがあり、口端の整形は一律ではない。ただ、3類に比べ器体の口径が小さくなるのに、器壁が4mm・5mmと厚い部分をもつものも認められる。191～193は器体の胴部で口縁部と同じ調整である。175～185は4A1類に区分できる。194～198は4A2類に区分できる。199～202は4A3類に区分できる。203・204は4B類に区分できる。

土器製塩に係わるとみられる特殊な土器(第29図205～226) ここで述べる遺物は、212・221を除いて、ほぼ同一の遺物密集範囲(B1区のT.P1.8m～2mの斜面)から出土したものである。密集する遺物のほとんどは、214～218の器の胴部破片によって占められている。205～209は破損する側が太くなる断面が不整形の円形の棒状土製品である。図示するもののほかに破片がもう1点出土しているのみである。端部を押さえて平らに作り出すもの(205・207)と丸みをおびるもの(208)がある。破損するもう一方の側については不明であるが、何等かの器がつくものではないかとみられる。胎土は砂粒の混入が少なく、器表面は滑らかである。手づくりで握り放しのままの凹凸が残り、太くなる側にはナデ調整が加えられる。前述した製塩土器と同様の色調の変化が認められることから、この項に取り上げたものである。

205は下端の1cmほどが薄い桃色でその上部は、白(黄)色に変色している。206は下端の

1 cmほどが灰色、その上の3 cmほどが白色、その上が灰黄色に変色している。206の色調変化は明確ではない。208は下端の1 cmほどが明褐色、その上の3 cmほどが灰褐色、その上の1 cmほどが黒色、その上が褐色に変色している。特に、208に顕著なように、製塩土器同様、^{かんすい}鹹水（濃縮した海水）煮沸によってしか生じないであろう色調の変化であり、かつ、製塩土器の脚のように砂中に差し込んで使用したものと考えられる。209も前者と同様のものとみられるが、変色もなく、太さが一律に伸びるもののようにも見受けられ、土棒かもしれない。

210・211の口縁部は、多量の遺物の中から図示した2点のみが混在していたもので、他の破片とは胎土が異なる。胎土に砂粒を多く含み、器表面がザラザラする。器壁は1.3cm程の厚みで、口端が外側へ張り出す。器体の内側はナデ調整を施す。これに伴う、胴部および底部は、同一固体とみられる資料が全くなく、不明である。

213の口縁部は、器壁が1 cm程の厚みで、先細りとなり口端を丸く作り出す。胎土に砂粒がほとんど混入しない。外面には粘土の亀裂が残るが、内面は丁寧にナデ調整を施す。212は、別場所からの出土資料であるが、213と同一の作りである。この口縁部の破片は、数点しかない。219は口縁部と胴部が接合できないが、同一地点でまとまって出土しており、同一固体とみられるものである。口縁部は外側へ引き出して、幅広く作り出し、回転ナデ調整を施す。内面の調整は（板）ナデ、外面もナデ調整を加えるものの成形時の指先の凹凸が残る。胴部の調整も同様である。口縁部の色調は、外面が黒色、内面が明褐色、胴部は内面が灰黄色、外面が暗灰褐色と明瞭に異なる。

220・221も口縁部で、前者と同様の作りである。214・218は胴部で、破片としては大き目のものである。内面は（板）ナデ調整によって平滑に作り出すが、外面には粘土のひびが残る。内面が薄く剥離するものが多い。220～226は底部で、細片化している。底面は板の上で作ったもののようで平坦である。外面には、粘土のひびが残る。薄桃色に色調が変化し、内面が薄く剥離する。これらは、部分的な色調の変化、内面の剥離、細片化の様相からみて、製塩土器と同様に鹹水を煮沸したものと考えられる。また、口縁部212・213の例から見て、素縁の土器もあった可能性が高い。あるいは、これらのものが205らの棒状脚にともなう器体の口縁部かもしれない。

219の土器は、口縁形態がいわゆる「清郷型鍋」に類似（胎土は異なる）するものであり、日常の煮沸土器と同じ作りのものを、鹹水煮沸の煎熬に使用したものと考えられる。ただ、破片の量は多いものの、固体数としては少ない。227の灰釉陶器の碗（高台を欠く）は、前者と伴出したもので、施釉方法は漬け掛けである。本遺跡出土の灰釉陶器は、折戸53号窯式（10世紀前半に編年）のものが多く、227の灰釉陶器の碗も同時期の可能性が高い。219様の口縁部を形作る清郷型鍋は11世紀前半代に位置付けられるもの（永井1996）に類似している。おそらく、10世紀の後半から11世紀の前半のある時期にも、海辺では土器を使って製塩を行った場合があったものと考えられる。市域には、数多くの製塩遺跡が分布するが、こうした例ははじめてのものであり、現状では特殊な事例である。

5 包含層出土須恵器（第19図81～118、第23図205・206、第5表）

包含層から出土した須恵器は多時期にわたっており、器種としては、坏蓋（81～83、89・91～93）・坏身（85～88、94～104）・無台坏身（105・108）・有台坏身（106・107）・鉢（109）・高坏蓋（90）・高坏（84・110～114）・甌（115）・壺（116）・甗^{はそう}（117・118）・大甕（205・206）がある。

なお、81～88は、調査区西側（C－1区）の地山にめり込む様にまとまって出土しており、遺構に伴うものではないが、一括廃棄された可能性が高い資料である。

C－1区須恵器集中部

81～83は天井部の1/2～2/3が回転ヘラ削り調整で、口縁部は直立し、端面が内側に傾斜する。83は器形がやや偏平である。85～88は体部の2/3が回転ヘラ削り調整で、口縁部は内傾気味に立ち上がり、端面は内側に傾斜する。85～87は軟質な焼成である。88はやや偏平な器形である。84は有蓋高坏で脚に三方向に方形の透し孔をあける。

本集中部から出土した須恵器については、ほぼ東山11号窯期（5世紀後半）に位置づけられよう。

須恵器坏（高坏）蓋

89は、厚手のつくりで、偏平な器形である。天井部のほとんど全面を回転ヘラ削り調整によって仕上げ、口縁部は直立し、端面は丸くおさめる。

90はつまみが付き、有蓋高坏の蓋と思われる。天井部は2/3以上が回転ヘラ削り調整で、口縁部はわずかに丸みを持ち、端面は内側に傾斜する。91は天井部の1/2を回転ヘラ削り調整によって仕上げ、内湾気味に若干開く口縁部を持ち、端面は内側に傾斜する。92はやや小ぶりで、天井部の2/3が回転ヘラ削り調整で、若干開く口縁部をもつ。93は、天井部のほとんどを回転ヘラ削り調整によって仕上げているが、下方のみ静止ヘラ削りによって調整する。口縁部は外反し、外面に2段の波状文を施す。

須恵器坏（高坏）蓋の時期については、89が本遺跡で出土している須恵器の中では、最も古く位置づけられると考えられ、城山2号窯式又は東山218－1号（東山48号）窯式頃（5世紀中頃）まで溯る可能性がある。90は東山11号窯式（5世紀後半）に、91は東山61号窯式（6世紀前半）にそれぞれ位置づけられよう。92・93については類例がわからず時期不明である。

須恵器坏身・鉢 94～103は、体部の1/2～1/3が回転ヘラ削り調整で、口縁部は内傾気味に立ち上がるもの（94～98・100～103）と直立するもの（99）があり、端面は内側に傾斜するものがほとんどである。104は、体部の1/3が回転ヘラ削り調整で、口縁部は前記した坏身に比べ短く、内傾する。口縁部と体部との間の段下に1条の沈線がめぐる。

105は、外底面のほとんどが回転ヘラ削り調整で、体部が若干開き気味に立ち上がる。108は、底部が静止ヘラ削り調整で、体部が105に比べ開く。

106は、体部が内湾気味に立ち上がり、直立する口縁部と体部との間に段を有する。107は、底部の2/3が回転ヘラ削り調整で、中央部のみ回転糸切り未調整である。

須恵器坏類の時期については、94～103が東山11号窯期もしくは若干新しい時期（5世紀後半～6世紀初頭頃）に、104が東山44号窯式あるいは東山50号窯式（7世紀代）に、105・108が高蔵寺2号窯式（8世紀初頭）、106・107が岩崎25号窯式～鳴海32号窯式頃（8世紀中葉～後半頃）にそれぞれ位置づけられよう。

109は、底部が回転ヘラ削りで、体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部は短く外反し、端部は平坦面をつくりだす。帰属時期については不明である。

高坏 110は、体部下半が回転ヘラ削り調整で、口縁部が外反する。体部中央と、口縁部と体部との間に段を有し、その間に波状文を施す。外面に厚く自然釉がかかる。111は、体部下半が回転ヘラ削り調整で、脚部の最上部に貫通しない一対の長方形の孔を穿ち、その直下に沈線をめぐらす。112は最下部のみ回転ヘラ削りで、体部に二つの段を有し、口縁端部が内側に傾斜する。内面には、自然釉とともに砂粒が付着する。113は脚中央部に2条の沈線をめぐらす。114は四方向に長方形の孔を穿つ。

高坏の時期については、110・114が東山11号窯期（5世紀後半代）に、111～113は東山44号窯期以降（7世紀以降）に位置づけられよう。

その他の器種

115は、鉢様の器形を呈する甑と思われる。胴部外面が叩き調整で、二条の沈線を施す。116は肩部が張り、頸部が直立気味に外反し、口縁部に段を形づくる。胴部には、櫛状工具による横線を間隔をおいてめぐらす。117は、甗の口頸部とみられる。口縁部が外反し、口縁部の段直下に波状文を施す。118は、残存部では孔の跡が見られないが、甗と思われる。底部が静止ヘラ削りで、胴部中央に1条の沈線を施し、その上部に波状文を施す。壺類については帰属時期が不明だが、115については、東山44号窯式あるいは東山50号窯式頃（7世紀代）に位置づけられよう。

205・206は口縁部が直線的に開き、端部に外傾する縁帯を有する。いずれも内面に自然釉がかかる。後述する灰釉陶器の一部とともに出土しており、折戸53号窯式に位置づけられよう。

6 包含層出土土師器（第20・21・22図119～179、第23図210、第5表）

包含層から出土した土師器には、甕（119～150）・甑（151・152）・高坏（153～170）・壺（171・177～179）・小形壺（174・175）・埴（172・173・176）・中世の土師皿（210）がある。

煮炊具 119～127・129～137は台付甕と考えられる。119～121は、口縁部が大きく外傾し、端部は丸くおさめるものと（119・121）、外側に傾斜する面を形成するもの（120）がある。いずれも胴部外面はハケ調整、内面はナデもしくはヘラ削り調整で、119・121の外面にはススが付着する。

122～127・129はいわゆる宇田型甕と思われるが、口縁部に明瞭な屈曲は見られないものがほとんどであり、129は他と比べて小形である。いずれも胴部外面はハケ調整であるが、122・124は深く荒いハケ目である。126の胴上部外面には一条の沈線が施される。

128は、口縁部が大きく外反し、端部をつまみ上げている。胴部外面はハケ調整、内面はナデ調整である。口縁部は、「口縁端部つまみ上げ丸底甕」（城ヶ谷1996）の特徴をもつ。

130～137は台付甕の脚台部で、下端部を折り返すものと（132～134・136）、折り返さないもの（134・135・137）がある。

138は、球形に近い胴部に、強く外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめている。底部を欠いているが、恐らく丸底になると思われる。胴部外面はナデ調整だが、一部に指頭痕がのこる。内面は、胴上・下部がヘラ削りで、以外はナデ調整である。胴中部は火熱を強く受

け、器表面が剥離している。139は小形の平底甕で、口縁部が外反し、端部は丸くおさめる。胴部外面はハケ調整で、内面はヘラ削り調整の後ナデ調整である。胴下半部にススが付着し、器表面の剥離も目立つ。

140～147は甕の上部破片である。口縁部は、140が直立気味である以外は強く外反する。また、140の内面は、口縁部と胴部との境に粘土接合痕が残る。端部は丸くおさめるものと(140・142・143・145)、外側に傾斜する面を形成するもの(141・144・146・147)がある。140の外面にはススが付着する。

148～150は粗製の甕である。148は、内外面ともナデ調整だが、外面には板で叩いたように平坦面が形成されている。149は、色調・作り等が製塩土器様の特徴をもつ。口縁部が肥厚し、端部がやや内側に傾斜する面を形成する。外面は指頭痕がのこるが、内面は比較的丁寧な指ナデ調整である。150は、口縁部がやや直立気味で、粗雑なつくりである。外面は、胴中部がヘラ削り調整で、内面は胴部がハケ調整で、口縁部と胴部との境に粘土接合跡がのこる。胴上部・口唇部にはススが付着する。

151は甑の把手と思われる。全面に指頭痕がのこり、先端部は平坦に調整する。152は鉢形を呈する甑で、底部中心に1孔、縁辺に5孔を穿つ。胴下部に粘土接合痕が明瞭にのこる。外面はナデ調整で、内面はハケ状工具による削り調整である。

包含層から出土した煮炊具については、時期幅があると思われるが、概ね宇田式前～中期頃(5世紀後半～6世紀初頭頃)が中心で、一部、松河戸Ⅱ式期(5世紀前半代)まで溯る可能性のもの(124・140等)や、宇田式後期ないし飛鳥時代(6世紀代)まで下る可能性のもの(128・138等)もある。

坏身・高坏 坏身は、体部が内湾して立ち上がり、端部が短く外反し、内側に傾斜する面を有するもの(153・154)と、体部から口縁部に至るまで内湾し、端面は内側に傾斜するもの(155)がある。いずれも残存部については回転ナデ調整である。

高坏の坏部は、体部が内湾して立ち上がり、端部が丸くおさまるもの(156・157・160)または内側に傾斜する面を有するもの(158)、体部が直線的に開き、端部を丸くおさめるもの(159・161・162・163)がある。これらのほとんどが体部と底部との境は粘土の接合跡をのこす程度であるが、163については断面三角形の突帯を付す。

脚部は、下部が強く外反し、裾部を形成するものと(156～159・164～169)、付け根から端部まで直線的に開くもの(170)がある。169は端部を下方に折る。

坏身・高坏の時期については、概ね宇田式前～中期頃(5世紀後半～6世紀初頭頃)に位置づけられるものが多い。

壺類 171は有段口縁をもつ壺で、胴部外面はハケ調整である。時期としては、松河戸Ⅱ式期頃(5世紀前半代)に位置づけられよう。

172・173は罎で、直立気味の口縁部をもち、端部は丸くおさめる。176は、高坏の可能性もあり、外反する口縁部をもつ。174・175は小形壺(短頸壺)で、短く外反する口縁部をもち、174は端部が外側に傾斜する面を有する。177～179は、壺もしくは甕の底部破片で、178の底面には木葉痕がのこる。

7 包含層出土陶器類(第23図180～200、第5表)

包含層から出土した陶器類には、灰釉碗(180～188)・緑釉段皿(189)・灰釉皿(190～

199)・灰釉長頸瓶(201~204)・山茶碗(200)があり、主に調査区1の東側で出土している。

180~188は、体部は丸みをおびて立ち上がり、体下部を回転ヘラ削りによって調整し、やや崩れた三日月高台である。180~183・188は、漬け掛けによって体部内外面に施釉する。

緑釉段皿189は、断面が四角形に近い、いわゆる角高台が付く。底部内面も含め全面に施釉する。

190は、角高台に近く、ハケ塗りによって施釉している。191~199は、底部が回転ヘラ削りのものと(190・192~197・199)、回転糸切りのもの(191・198)があるが、いずれも崩れた三日月ないしは三角高台を付ける。また、194・198を除く皿類は、いずれも漬け掛けによって施釉する。

201・202は、口縁部が外反し、端部が肥厚する縁帯をもつ。残存部については、全面に施釉が認められる。203・204は、ハ字状に開く高台を付け、胴下部外面が回転ヘラ削り調整である。

山茶碗200は、底部が回転糸切りで、高台を比較的丁寧に付けているが重ねによって潰れ、接地部には粉がら圧痕がのこる。

灰釉陶器の時期については、碗・皿類の多くが折戸53号窯式(10世紀前半)に位置づけられるが、皿190及び長頸瓶については若干古く、黒笹90号窯式(9世紀後半)まで溯る可能性がある(1994齊藤)。

山茶碗200の時期については、常滑窯編年の3型式期頃(12世紀後半~13世紀前半頃)(中野1994)に位置づけられよう。

8 包含層出土石製品・土製品・鉄製品・骨角製品(第23・24図207~209・211~244、第6表)

石製品 包含層から出土した石製品としては、砥石(第23図207)・用途不明石器(第23図208・211)がある。207の石材は、砂質凝灰岩で、使用面に線状の使用痕がある。208の石材は、黒色片岩で、三角形に形作られているが、用途等は不明である。211の石材は、ホルンフェルスで、図上の下~右側縁に刃部様の加工が施されており、上側縁を丸く磨いている。時期・用途等は不明であるが、土師器甕(第21図127)など同一の層で出土している。

土製品 包含層から出土した土製品としては、鞆(ふいご)の羽口(第23図209)・土錘(第24図212~240)がある。209は、窄まる方が火熱を強く受けており、孔径は2.2cmである。土錘は、径3cm前後の大型のもの(212~215)、径2cm前後の中型のもの(220~240)、径1cm前後の小型のもの(216~219)がある。土錘は、大・中・小にかかわらず、知多式製塩土器3・4類が出土している層(製塩土器廃棄層)から出土しているものが多い。

なお、土錘の法量については第6表に記す。

鉄製品 包含層から出土した鉄製品としては、釣針(第24図241)・刀子(第24図242)がある。241は、径5mmで、一方が曲がる形状から釣針と思われる。242は、刀子の柄部分と思われる、知多式製塩土器3類のみが出土する層から出土している。

骨角製品 包含層から出土した骨角製品としては、銚様に加工したもの(第24図243)、鹿の角座の中央に孔を穿つもの(第24図244)があるが、いずれも用途は不明である。

第三節 上浜田遺跡における獣骨類の調査報告

堀木 真美子

上浜田遺跡からは、魚類・爬虫類・鳥類・ほ乳類などの骨が遺構検出中に出土し採取された。骨の保存状態はおおむね良好であるが、破損を受けているものが多い。出土した時期は古墳時代～中世にかけてである。このころ当遺跡では、製塩土器による製塩が盛んに行われていた時期であり、多くの動物遺体はこれら製塩土器の破片とともに出土している。

魚 類 クロダイ属の前上顎骨や歯骨、マダイの上後頭骨・主上顎骨・鰭棘骨、フグ亜目の前上顎骨・歯骨などが出土している。また、コイ科の右咽頭骨も出土している。

鳥 類 ガンカモ科の肩甲骨や上腕骨などが出土している。1点カラスとおもわれる大腿骨が出土している。

爬虫類 ヌマガメ科の背甲・腹甲が出土している。サンプル番号1は、背甲と腹甲がほぼそろっている。

ほ乳類 同定できた資料の中ではウマがもっとも多く115点を数える。続いてシカ35点、ヒト22点となる。イヌによる噛み跡がみられるものは少ない。

ヒトはF2区から下肢骨がまとまって出土している。これらのうち指骨では骨端部分の癒合が完了しておらず、若い個体と思われる。

ネズミは、クマネズミ大と思われる大きさの左下顎骨や大腿骨・脛骨などが出土している。

ウマは、保存状態がほぼ良好で、F3区から出土したものは同一個体のもと思われる。各部位の測定値は、中手骨で最大長19.25cm、19.72cm、中足骨で最大長20.58cmとなる。これらの値より体高は103～120cmと推定される。これは、小型馬のトカラ馬の108～121cmに近く、小型馬が存在していたものと推定される。また骨端の癒合が完了していない若い個体もみられた。

ウシは6点しか得られていない。中手骨の最大長19.49cmは、在来和牛の口之島ウシのオス4体平均18.95±0.33cm・メス15体平均19.05±0.48cm、見島ウシのメス2体平均19.22cmより大きく、オス2体平均19.91cmよりも小さい。この値から推定される体高は120cmとなり、小型のものとなる。

シカは中手骨や角が多く出土している。角は大半が切断の痕跡を持つ。

他に、イヌがF2区より、イノシシがH12区よりまとまって出土している。C1・C2区からはクジラ類の椎骨も出土している。

以上、上浜田遺跡から出土した主な動物遺体についての同定を行った。今回の試料は、遺構検出などに伴って出土したものであるため、定量的な取り扱いはできなかった。しかし今後、ブロックサンプル等による詳細な分析が行われることにより、当時の漁猟や家畜等を推定するうえで重要な試料となりうるであろう。

なお、魚類および鳥類の同定は、奈良国立文化財研究所の松井章氏所蔵の骨格標本を借用させていただいた。記して感謝の意を表します。

<参考文献>

西中川駿・松本光春(1991) 遺跡出土骨同定のための基礎的研究.平成2年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書. 164-188.

第2表 獣骨類種名表

脊椎動物門 VERTEBRATA

硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

コイ科 Cyprinidae

タイ科 Sparidae

マダイ *Pagrus major*

クロダイ属 *Acanthopagrus*

フグ亜目 Tetraodontoidei

科不明 Fam.indet

爬虫綱 REPTILIA

ヌマガメ科 Emydidae

鳥綱 AVES

ガンカモ科 Anatidae

科不明 Fam.indet

ほ乳綱 MAMMALIA

ヒト科 Hominidae

ヒト *Homo sapiens sapiens*

ネズミ科 Muridae

イヌ科 Canidae

イヌ *Canis familiaris*

ウマ科 Equidae

ウマ *Equus caballus*

イノシシ科 Suidae

イノシシ *Sus scrofa nippon*

シカ科 Cervidae

シカ *Cervus nippon*

ウシ科 Bovidae

ウシ *Bos taurus*

イルカ科 Delphinidae

科不明 Fam.indet

第3表 獣骨類計測一覧

サンプル番号	部位	左右	最大長 G L	近位端最大幅 B p	近位端最大矢 D p	体部最小部 S D	遠位端最大幅 B d	遠位端最大矢 D d	推定体高
ウシ1	中手骨	左	19.49	4.24	3.87	2.06	4.59	2.60	120.6(最大長より)
ウマ70	中足骨	右					4.59	3.16	
ウマ73	中足骨	左	20.58			2.93	4.60		103.2(最大長より)
ウマ75	中手骨	右	19.25	3.95	2.70	2.55	3.80	2.62	117.5(最大長より)
ウマ77	中手骨	左	19.72	4.48	2.81	2.80	4.02	2.94	120.0(最大長より)

単位：cm

第4表 ほ乳類一覧①

	出土区										種別計																	
	B1	B2	C1	C1・C2	C2	F1	F・G3	F2	F3	F3・J5		G2	G3	G12	H3	H11・I2	H12	I4	I5	J3	J4	J5	K3	K4・H12	K4	K5	L3	排上等
ヒ	頭蓋骨 下顎骨 環椎 上腕骨 尺骨 手根骨・足指骨 中足骨・足指骨 膝蓋骨・脛骨 距骨・腓骨 踵骨 足根骨						1	1	1			1						3 1										22
ネ	下顎骨 尺骨 大腿骨 機骨 脛骨					1	2 1 1			1																		6
イ	胸椎 脛骨		1									1																5
ウ	頭蓋骨 下顎骨 上顎歯 下顎歯 歯 椎骨 上腕骨 橈骨 尺骨 手骨 中足骨 中足骨 踵骨 手根骨・足根骨 基節骨 中節骨 末節骨	1	1					1 12 6	1 1 1			3					1	4 2	1	2	1 1		1	1 4	2 1			1
イノシシ	頭蓋骨 下顎骨 大歯 肩甲骨 上腕骨 大腿骨 脛骨 指骨														1	1 1												115
					1		1																					11

第三章 ま と め

1 知多式製塩土器0（ゼロ）類の設定

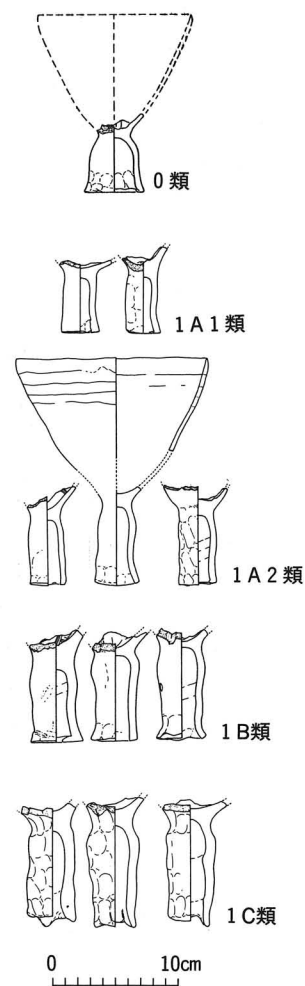
知多半島を中心として分布するこの地方独自の形態である筒型の脚台を付ける知多式製塩土器1類の発生と展開については、現在のところ次のようにとらえられている（立松1994）。

知多半島の土器製塩は、大阪湾南部・紀伊周辺から備讃瀬戸にかけて広がる先進土器製塩地域からの影響下に成立し、独自の製塩土器形態を作り出していった。当地方において先の地域からの影響下にある製塩土器としては、脚台Ⅱ式（広瀬1994）に類似する松崎類、脚台Ⅲ式に類似する塚森類がある。先の地域では、5世紀末を中心とした時期に、脚台Ⅲ式のような脚台をもつものから丸底の土器へと変化するが、知多では6世紀前半を中心とした時期に独自の製塩土器が作り出される。それが、知多式製塩土器1類として区分する筒型の脚台を付けるものである。その後、筒型からさらに砂に差し込みやすい棒状脚へと変化していく。

ここでは1類を問題とするが、1類は脚台下端部の調整や法量の違いによってA・B・Cに細区分され、1A類→1B類→1C類への大型化の変遷が認められる。時期は、1A類が5世紀末葉～6世紀前葉、1B類が6世紀中葉～7世紀前葉、1C類が7世紀前半代に比定されている。

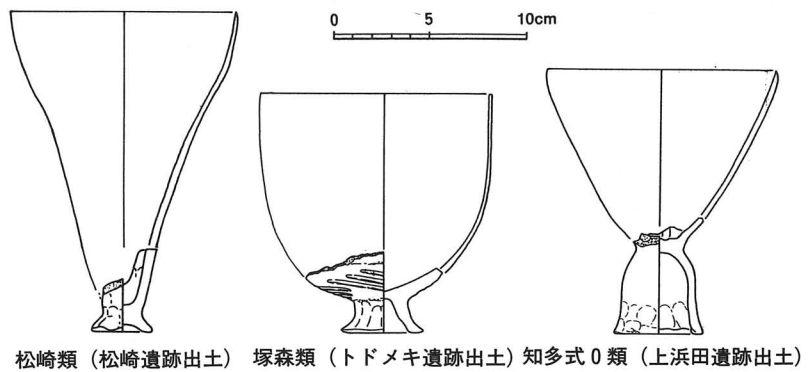
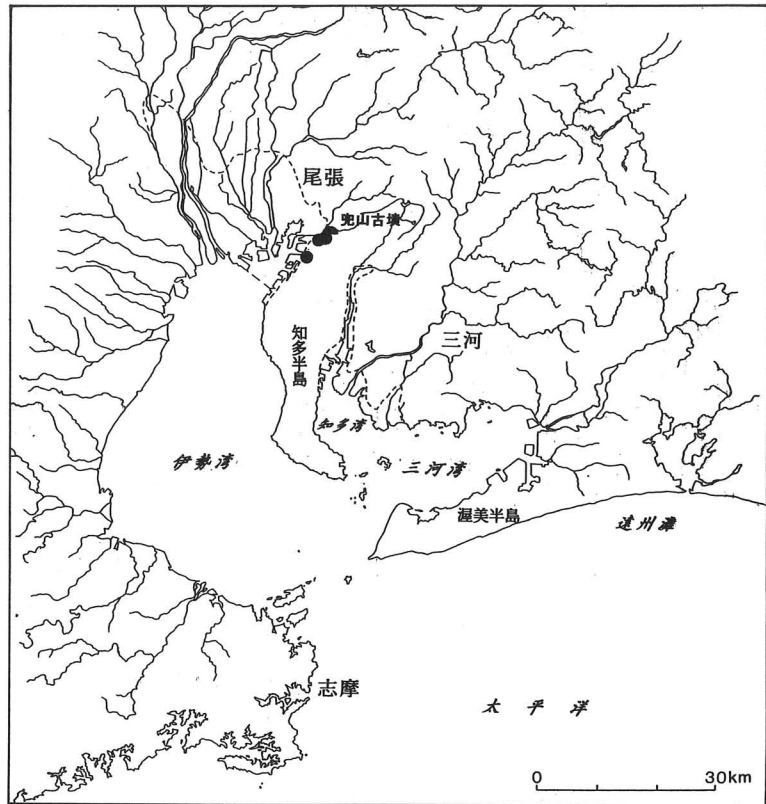
それぞれの器形についてみると（福岡1991）、1A類は、口径11.9cm・深さ8.6cmほどの深鉢形の器体に、脚径が2.3cm～3.1cmほどで、底径が2.7cm～3.7cmほどの脚台の下端が平坦に作り出された筒型脚台が付く。この脚台は脚高に5.7cmほど（1A1類）と7.1cmほど（1A2類）を中心値とする高低二種類のまとまりがある。1B類は、口径14.4cm・深さ10.8cmほどの深鉢形の器体に、脚径が2.6cm～3.5cmほど、底径が3.6cm～4.5cmほど、脚高が7.1cm～8cmほどの、脚台の下端が平坦に作り出された筒型脚台が付く。1C類は、口径17.1cm・深さ10.7cmほどの深鉢形の器体に、脚径が2.9cm～3.5cmほど、脚高が8.9cm～9.4cmほどの、脚台の上方にふくらみをもつ筒型脚台が付く。脚下端は、前者と異なり平坦に作らず、指でつまんで先尖りになるように作り出している。知多式製塩土器は、総体として脚台を砂に差し込んで立たせる方向に進んでおり、1C類に至って脚先端を尖らせ始めており、筒型のままで砂に差し込みやすくする指向が顕著になっている。一方、2類のように筒型脚台の下端を閉じ合わせて先尖りにしたもの（先端のみを閉じており、脚台のなかは空洞となっている）も併行して作られていたようであるが、出土数はごくわずかであり、筒型脚台が主流となっている。やがて、7世紀前半代に角型の棒状脚台に変化し、それまで別々の変化をたどってきた尾張と三河が同一の技術圏となっていく。

さて、今回の調査で調査区2の遺物集中部から出土した第25図



第10図 知多式製塩土器1類の編年

14～16の脚台を引き伸ばして筒型に作り出す一群は、第15～17図35～80に掲げる遺物と伴出しており、5世紀の後半に位置付けられ、古い時期のものである。1A類使用の一端も同じく須恵器編年の東山11号窯式期にあるとみられ、そのみで新旧を特定できない。しかし、形態を比較すると、上浜田の土器自体の大きさは、脚高が4.3cm～5cm、脚径が2.5cm～2.8cm、底径が4.5cm～4.7cmで、知多式1A類と比較すると、脚径はほぼ同じであるが、脚高はおよそ1cm低くて、底径がおよそ1cm広い。底径が広く下端を平坦に作り出すのは、土器自体をそのままの状態を立てさせて安定させる指向が強いことを示している。知多半島では、これらの土器に先行するものとして塚森類があり、これは土器自体を直立させて使用されている。塚森類から1A類に至る直接的な変化を明確にすることはできないが、知多式は全く独自に派生したのではなく塚森類の脚台を祖形として、それが長大化したものとみる変遷過程も推測される。上浜田から出土した資料は、その形態変化の中に位置付けられるのであり、知多式1類に先行する「知多式0（ゼロ）類」として設定する。



第11図 5世紀の製塩遺跡と製塩土器

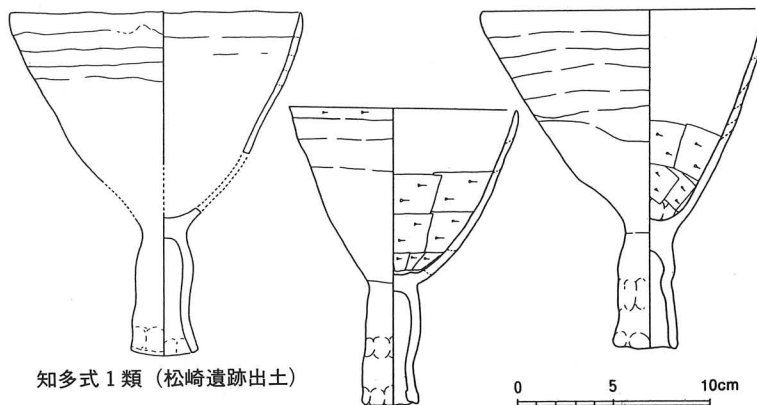
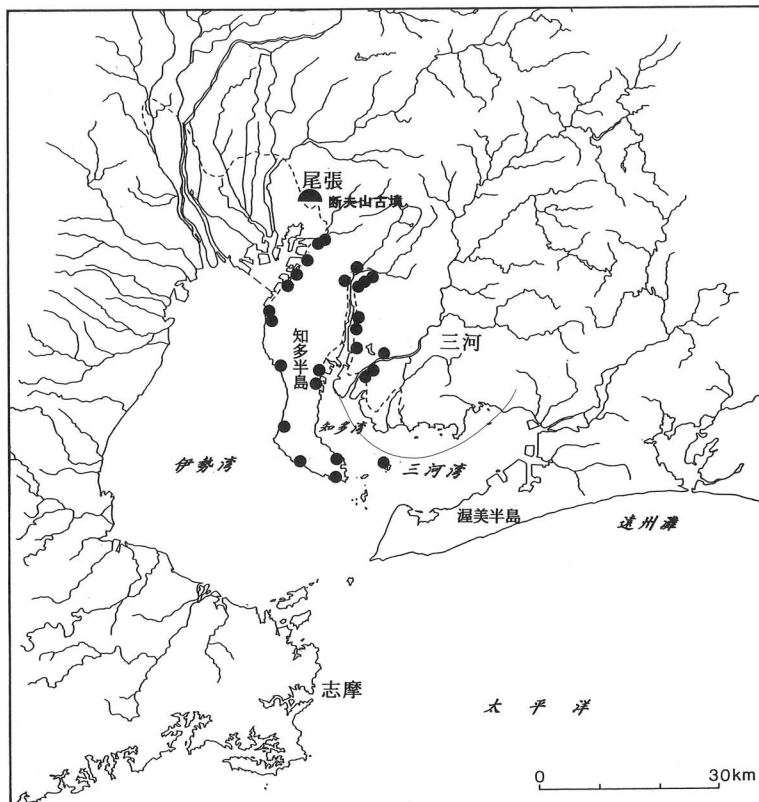
2 知多式土器製塩の展開

大阪湾南部・紀伊周辺から備讃瀬戸にかけて広がる先進土器製塩地域からの影響下に成立した知多半島の土器製塩は、5世紀の後半のうちには独自の製塩土器を作り出して展開した。古式の製塩土器である塚森類は伊勢湾奥の、いわゆるあゆち渦の南岸域でのみ見つかっている。その地域は、尾張南部で最も古い4世紀末ころに編年される三角縁神獸鏡などを副葬した兜山古墳の築かれた丘陵東下の、伊勢湾に面する狭小な海岸平地である。塚森類は、このトドメキ遺跡、塚森遺跡、長光寺遺跡、妙法寺遺跡から見つかっている。上浜田遺跡はそ

の約3 km南に位置するが、先の地域との間には、平地がなく、知多丘陵の支丘が海岸まで迫り出して崖となっている。この伊勢湾奥の地域で、土器製塩がわずかに行われ(第11図参照)、やがて、知多式0類の試行を経て1A類が成立すると、知多式1類の時期に瞬く間に知多半島全域から東海岸の知多湾周辺地域にまで土器製塩が展開する様相を示す(第12図参照)。詳細には、知多式1A類自体の展開の確証が必要であるが、大勢としては、前述のような動きが認められる。

知多式製塩土器が作られた地域としては、古式の製塩土器や知多式0類があって、さらに知多式1類がまとまって出土する松崎・上浜田の地域がもっとも有力である。そして、知多式1類の製塩土器は、徐々に伝播していったのではなく、ある指針の下に一気に展開したとみられ、知多半島先端の狭小な砂浜においても行われている。

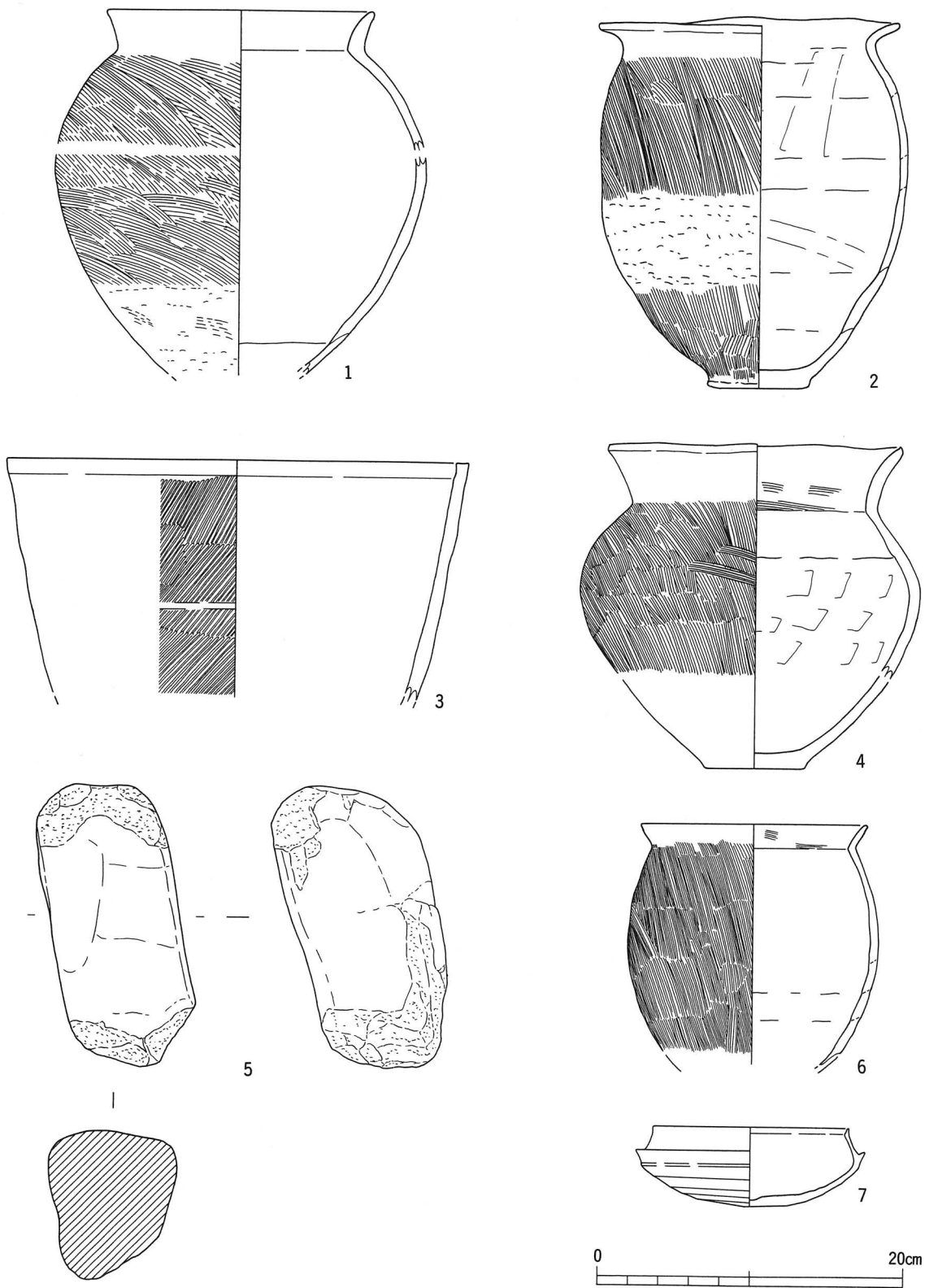
松崎・上浜田の地域も含むあゆち潟をめぐる名古屋台地周辺部では、5世紀になると須恵器の生産を始め、笠寺台地、瑞穂台地、熱田台地での盛んな古墳造営(犬塚1998)など、活発な動きをみせ始める(木村1997)。やがて、熱田台地には、全長150mの大型前方後円墳である断夫山古墳が築かれる。この古墳は、5世紀末から6世紀頃に築かれており、被葬者を、継体天皇の妃である日子媛の父、尾張連草香だとする考えがある(赤塚1989)。こうした勢力をもった当地方最大の豪族であった尾張氏は、伊勢湾に面する名古屋台地周辺部を本拠地として漁業と海上交通を支配していた(新井1998)。知多における土器製塩の展開もその動きの中に掌握されていたと考えられる。



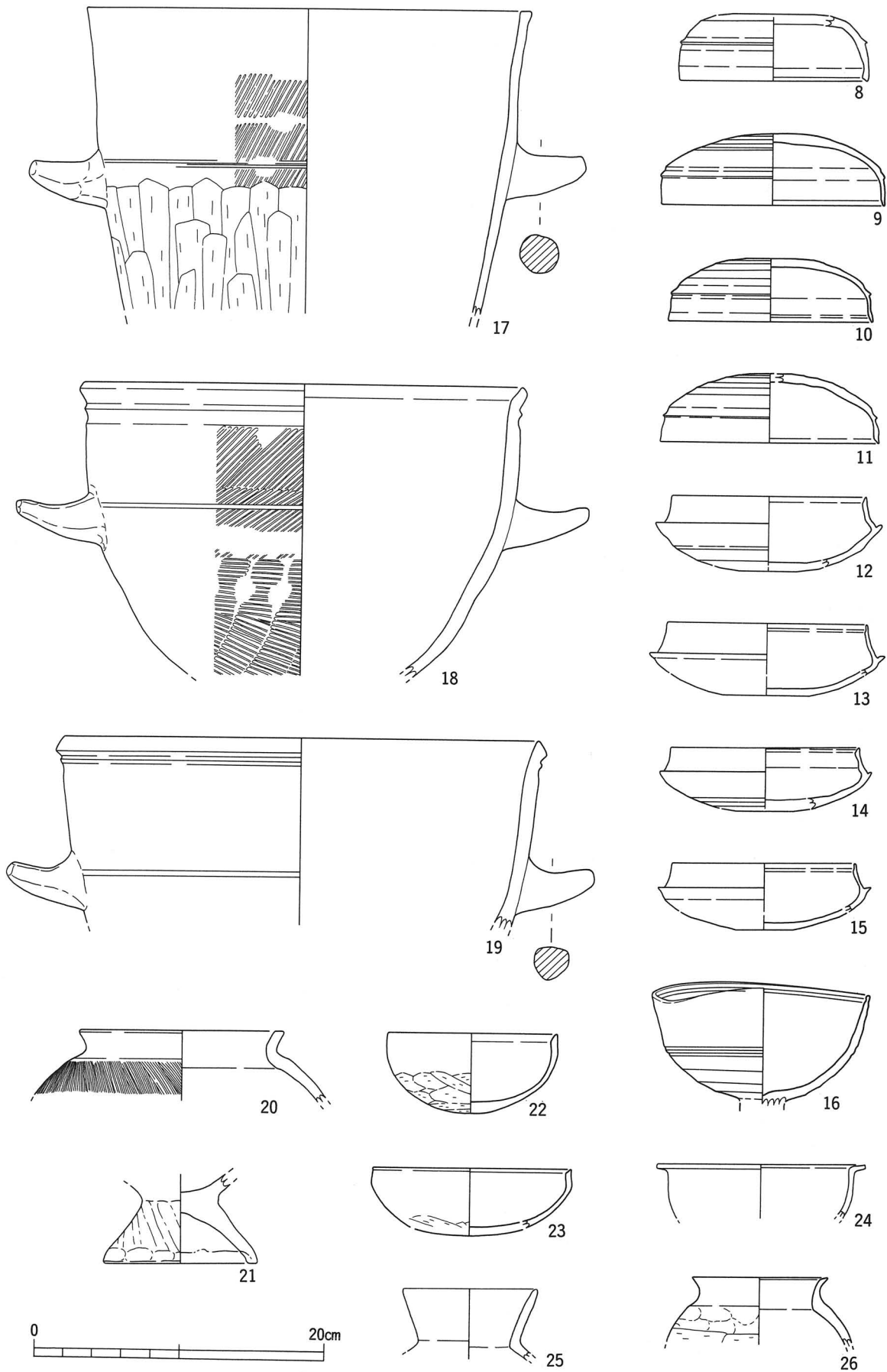
第12図 6世紀の製塩遺跡と製塩土器

〈引用文献〉

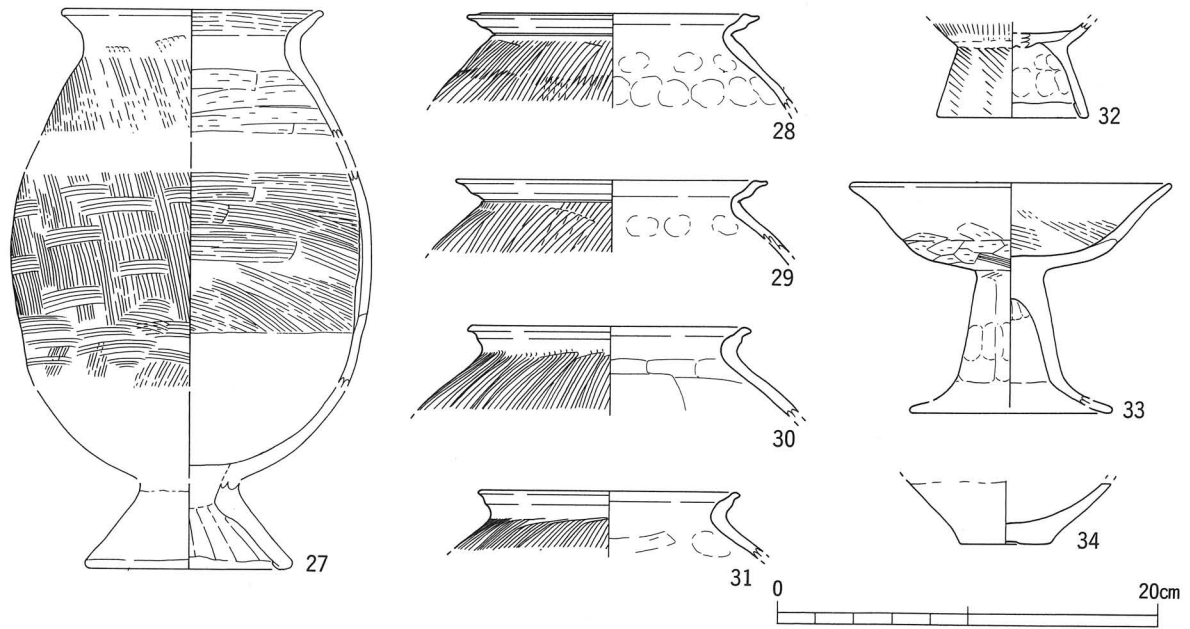
- 赤塚次郎 1989：「断夫山古墳をめぐる諸問題」 第6回東海埋蔵文化財研究会『断夫山古墳とその時代』 愛知考古学談話会 p.8～p.17
1996：「濃尾平野低地部における古墳時代の甕」 第4回東海考古学フォーラム『鍋と甕そのデザイン』 p.114～p.125
- 新井喜久夫 1998：「第五章律令国家以前の名古屋地方」 新修名古屋市史編集委員会編『新修名古屋市史』第一巻 名古屋市 p.463～p.534
- 犬塚康博 1998：「第四章古墳時代」 新修名古屋市史編集委員会編『新修名古屋市史』第一巻 名古屋市 p.325～p.461
- 木村有作 1997：『特別展・発掘された名古屋の五世紀』 名古屋市見晴台考古資料館
- 齊藤孝正 1994：「東海地方の施釉陶器生産—猿投窯を中心に」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3—施釉陶器の生産と消費』古代の土器研究会第3回シンポジウム p.109～p.120
- 立松 彰 1994：「愛知県」近藤義朗編『日本土器製塩研究』青木書店 p.408～p.449
- 中野晴久 1994：「赤羽・中野『生産地における編年について』」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所 p.7～p.181
- 永井宏幸 1996：「尾張平野を中心とした古代煮炊具の変遷」第4回東海考古学フォーラム『鍋と甕そのデザイン』 p.203～p.217
- 広瀬和雄 1994：「大阪府」近藤義朗編『日本土器製塩研究』 青木書店 p.450～p.489
- 福岡晃彦 1991：「古墳時代の製塩土器」『松崎遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告第20集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター p.39～p.43



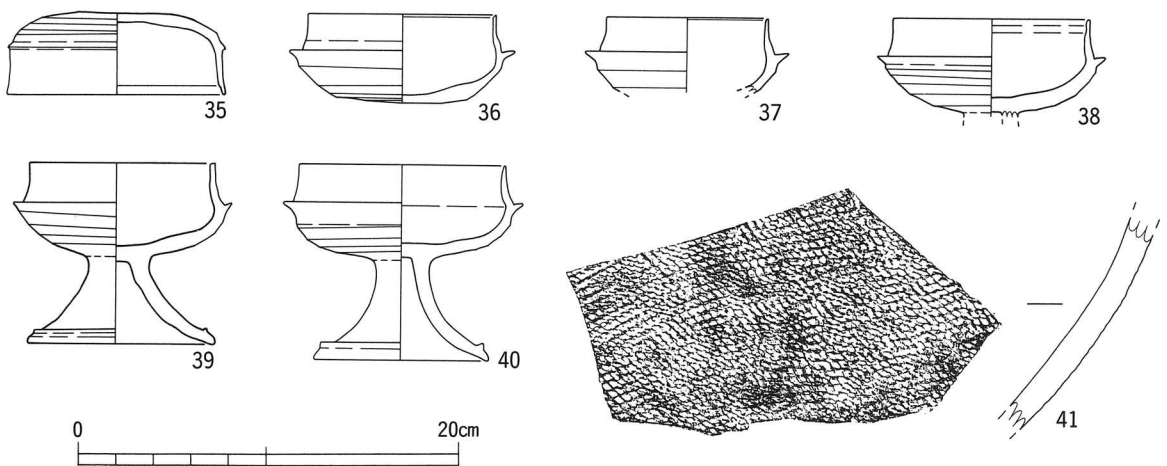
第13図 かまど内出土遺物 (1 / 4)



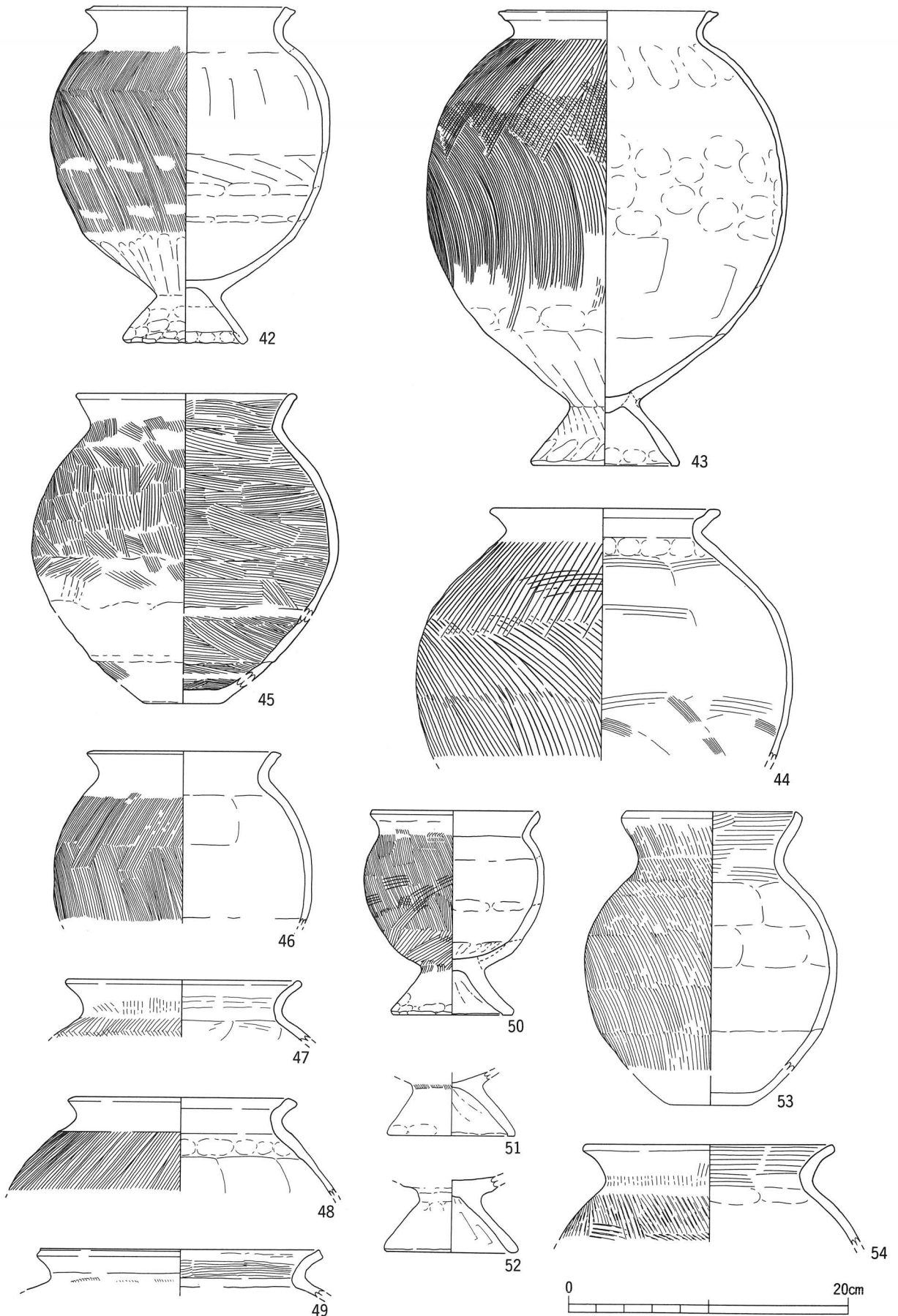
第14図 かまど周辺出土遺物 (1 / 4)



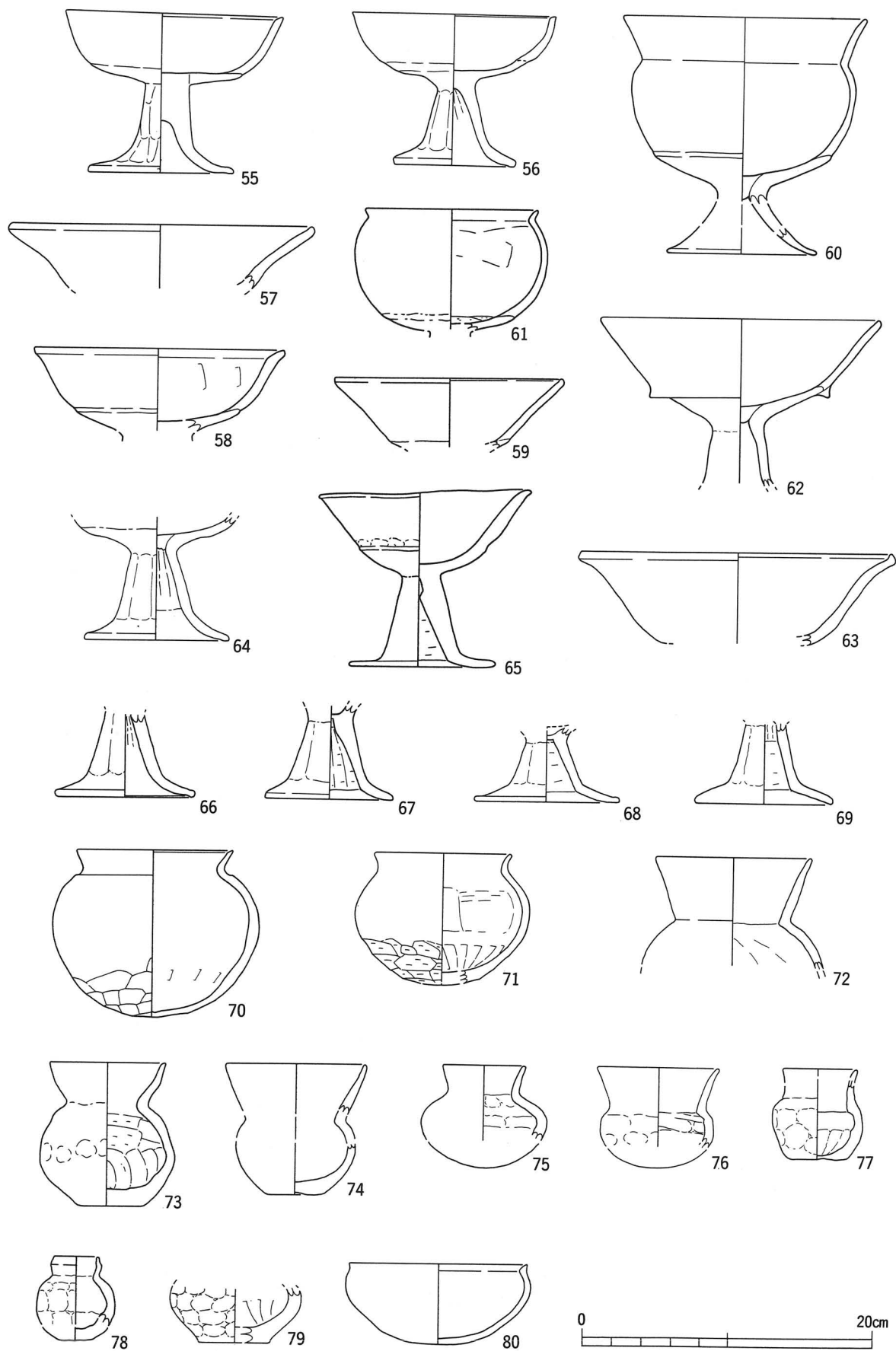
第15図 土坑出土遺物 (1 / 4)



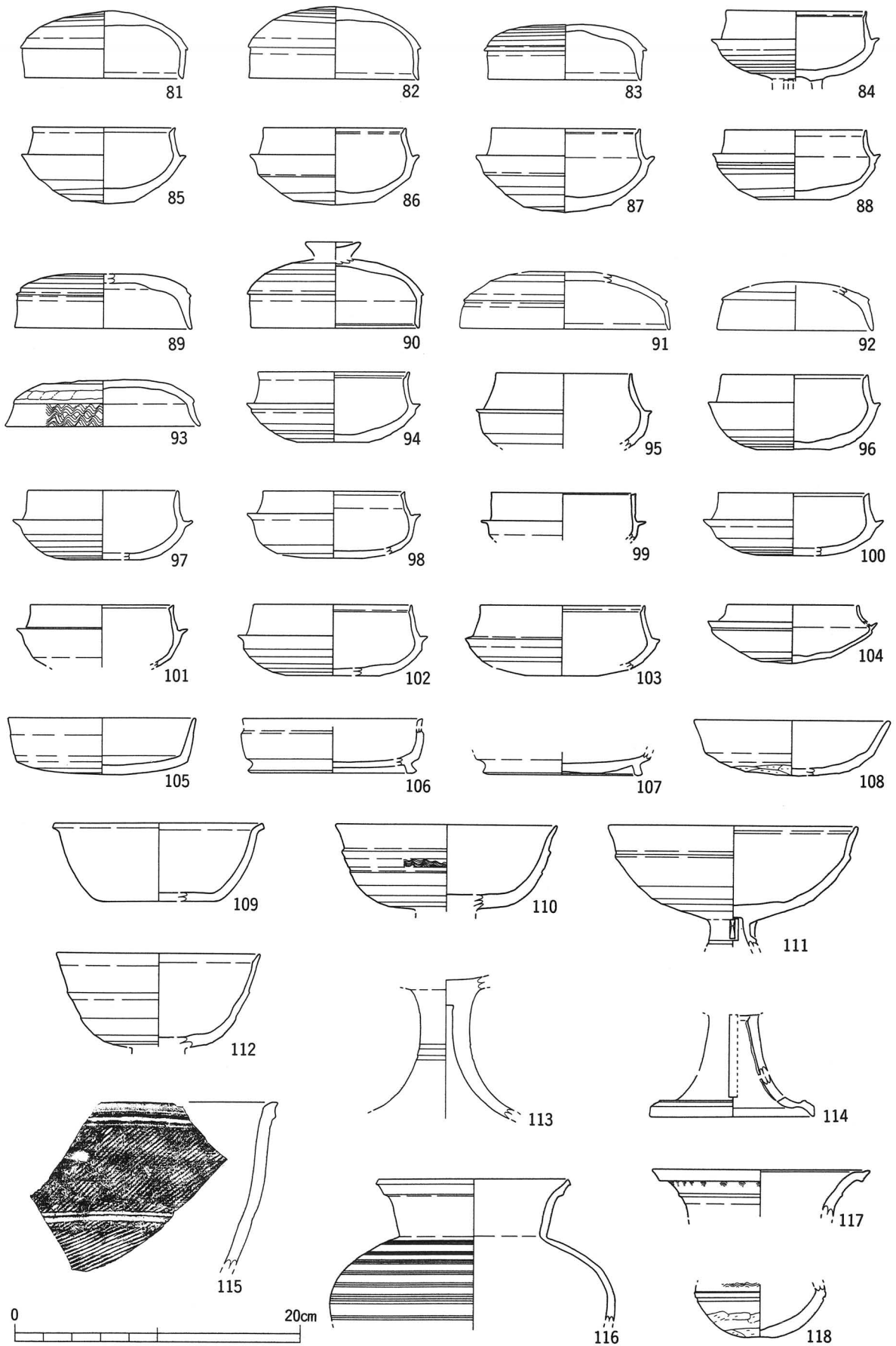
第16図 調査区2 遺物集中部出土須恵器 (1 / 4)



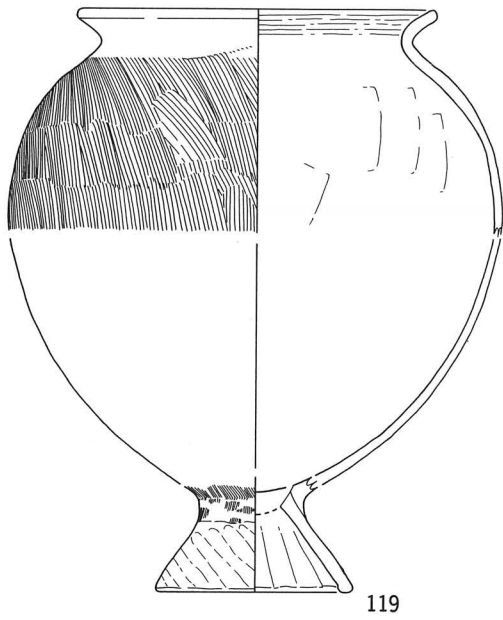
第17図 調査区2 遺物集中部出土土師器① (1 / 4)



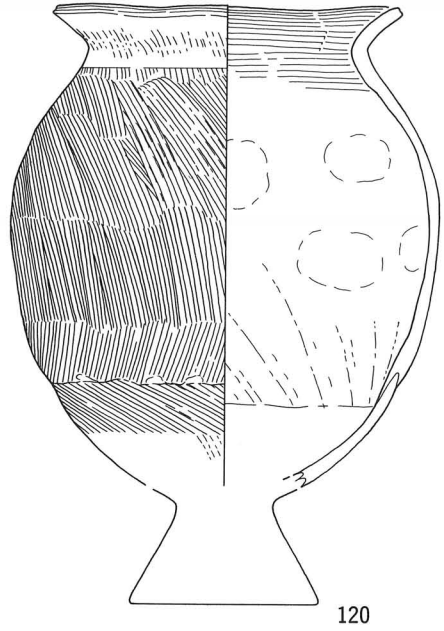
第18図 調査区2 遺物集中部出土土師器② (1 / 4)



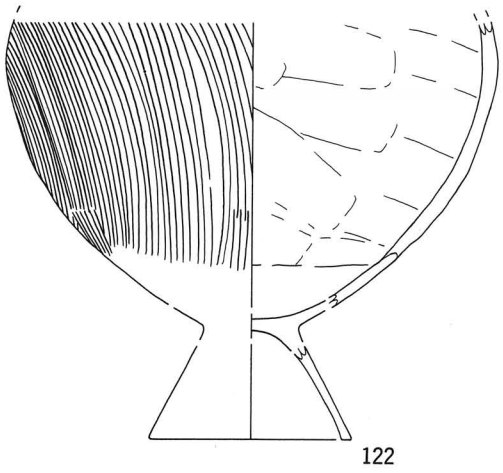
第19图 包含層出土須惠器 (1 / 4)



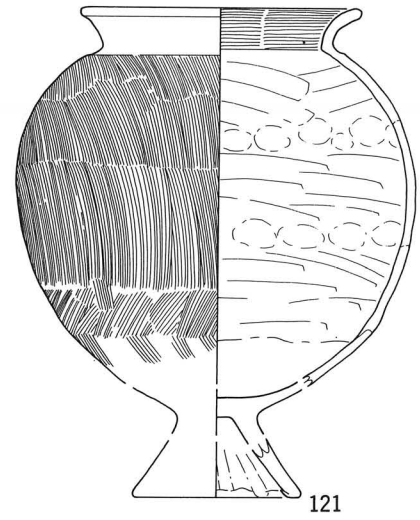
119



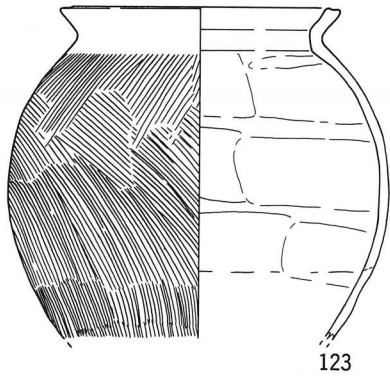
120



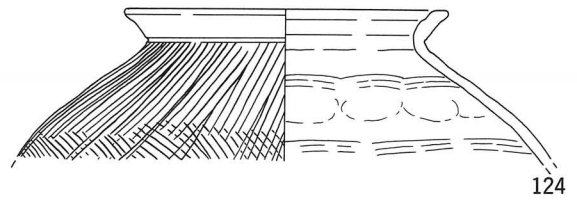
122



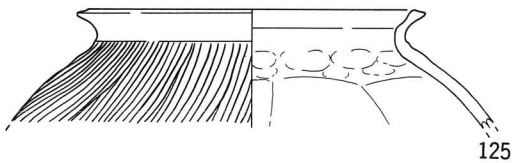
121



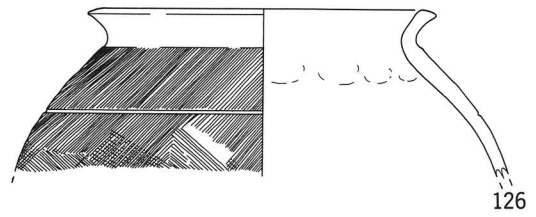
123



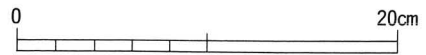
124



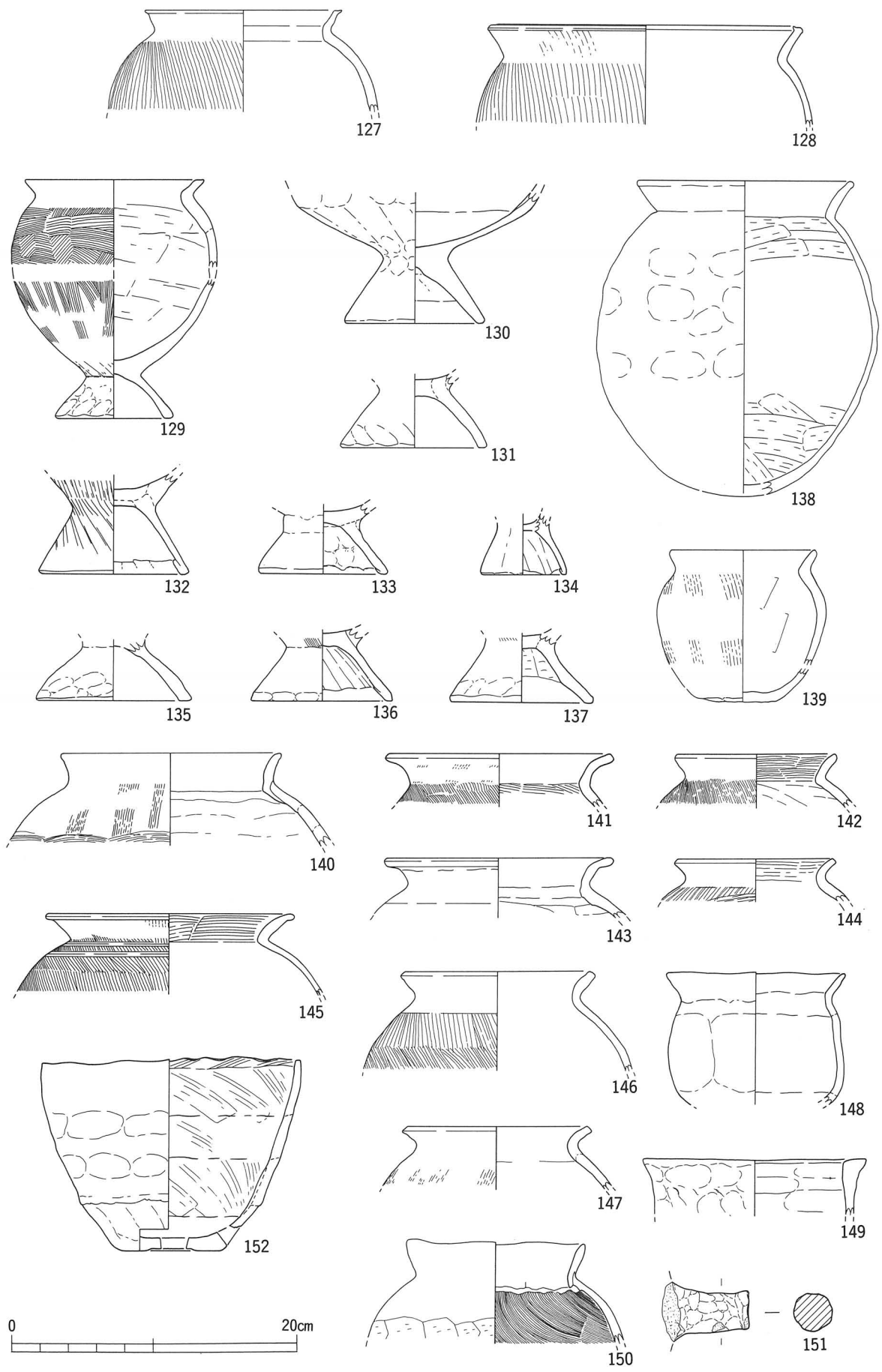
125



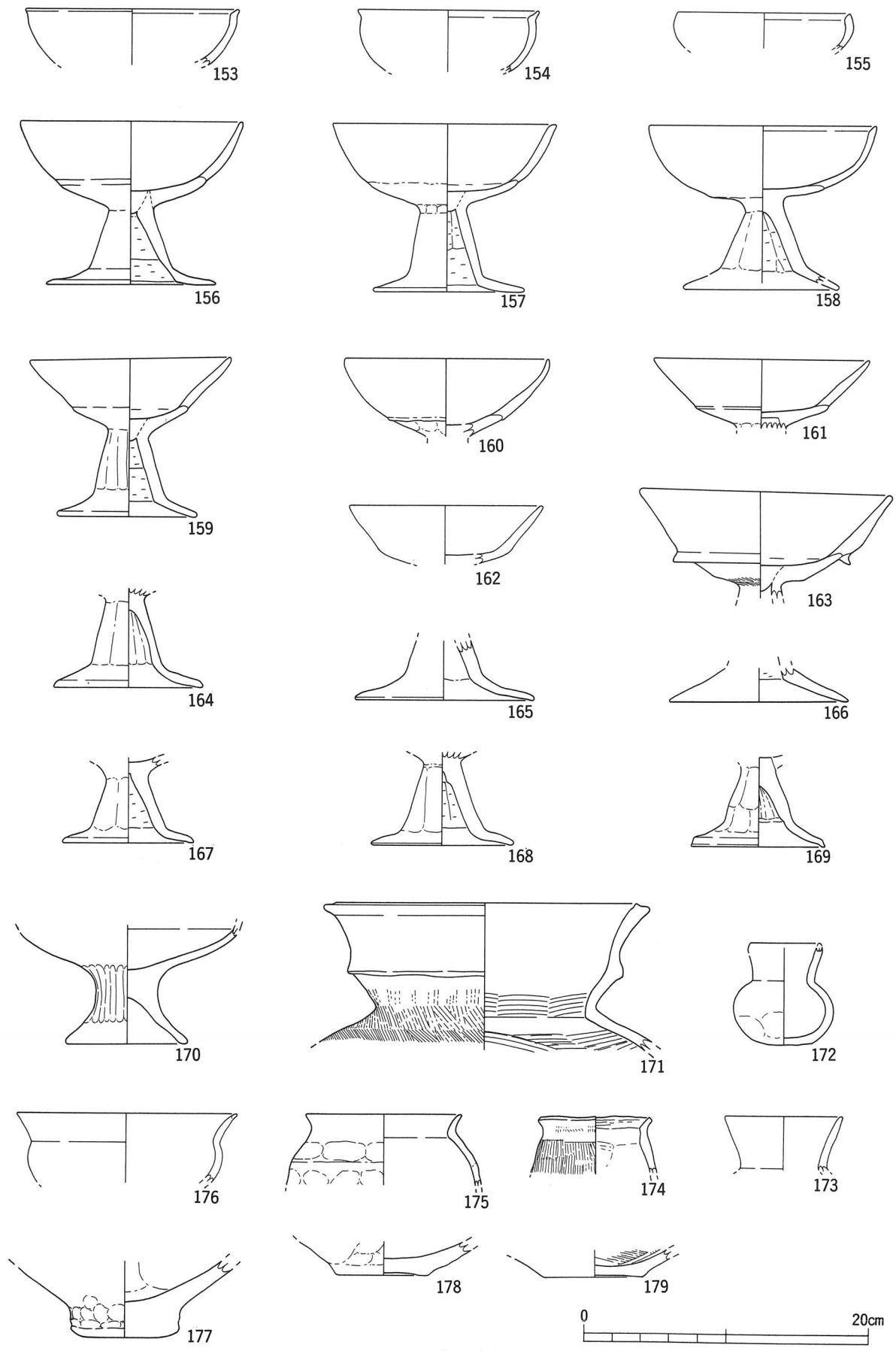
126



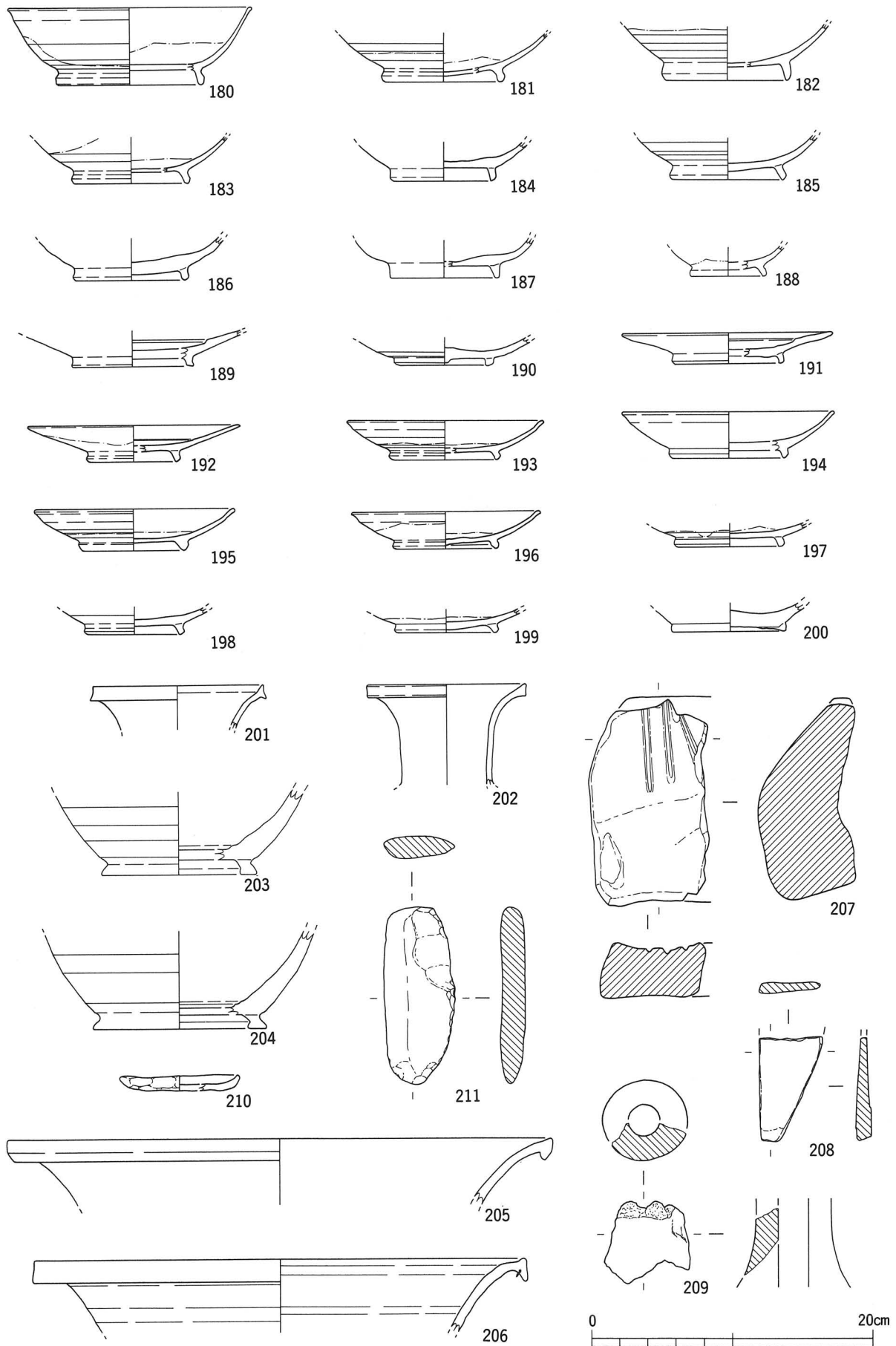
第20図 包含層出土土師器① (1 / 4)



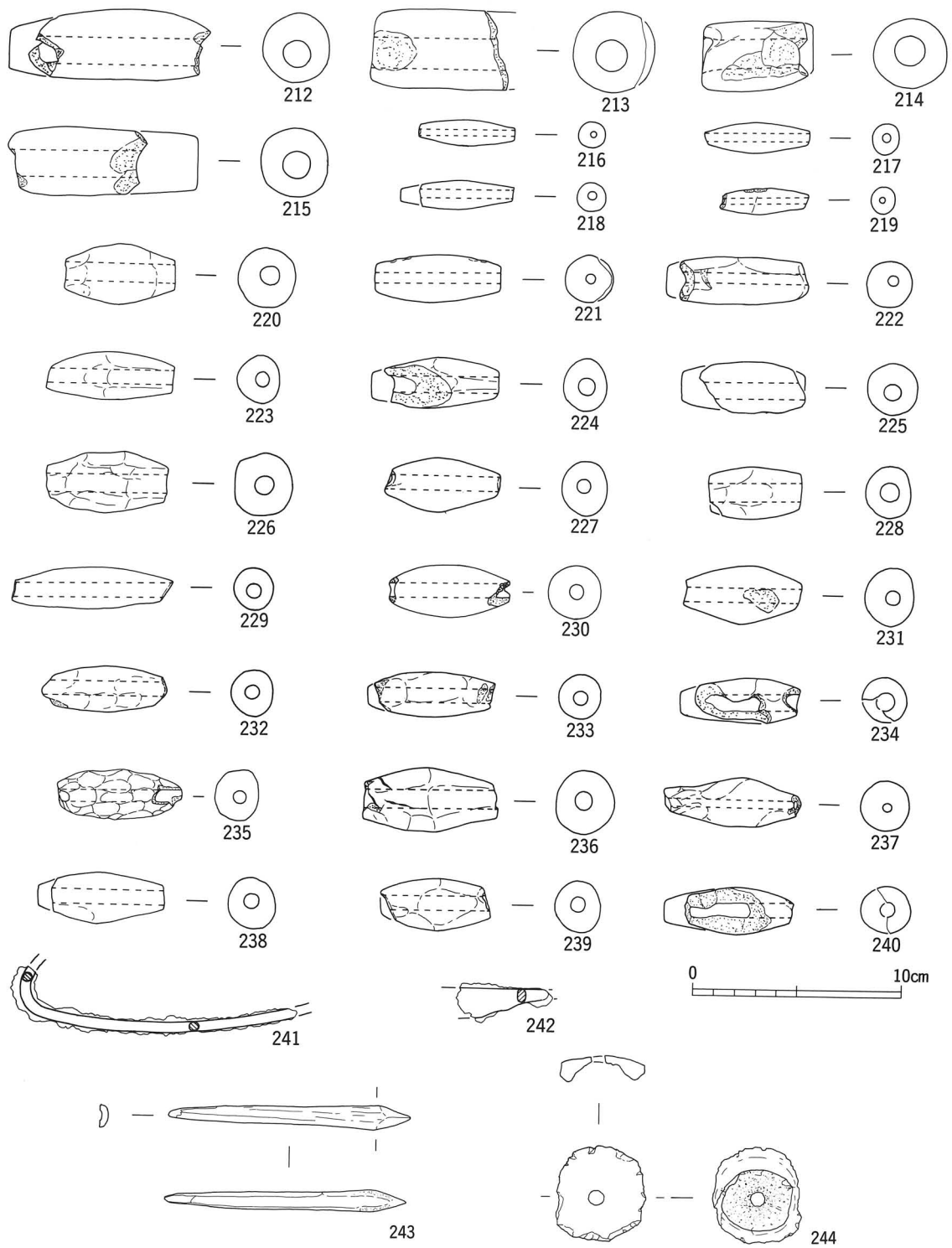
第21图 包含層出土土師器② (1 / 4)



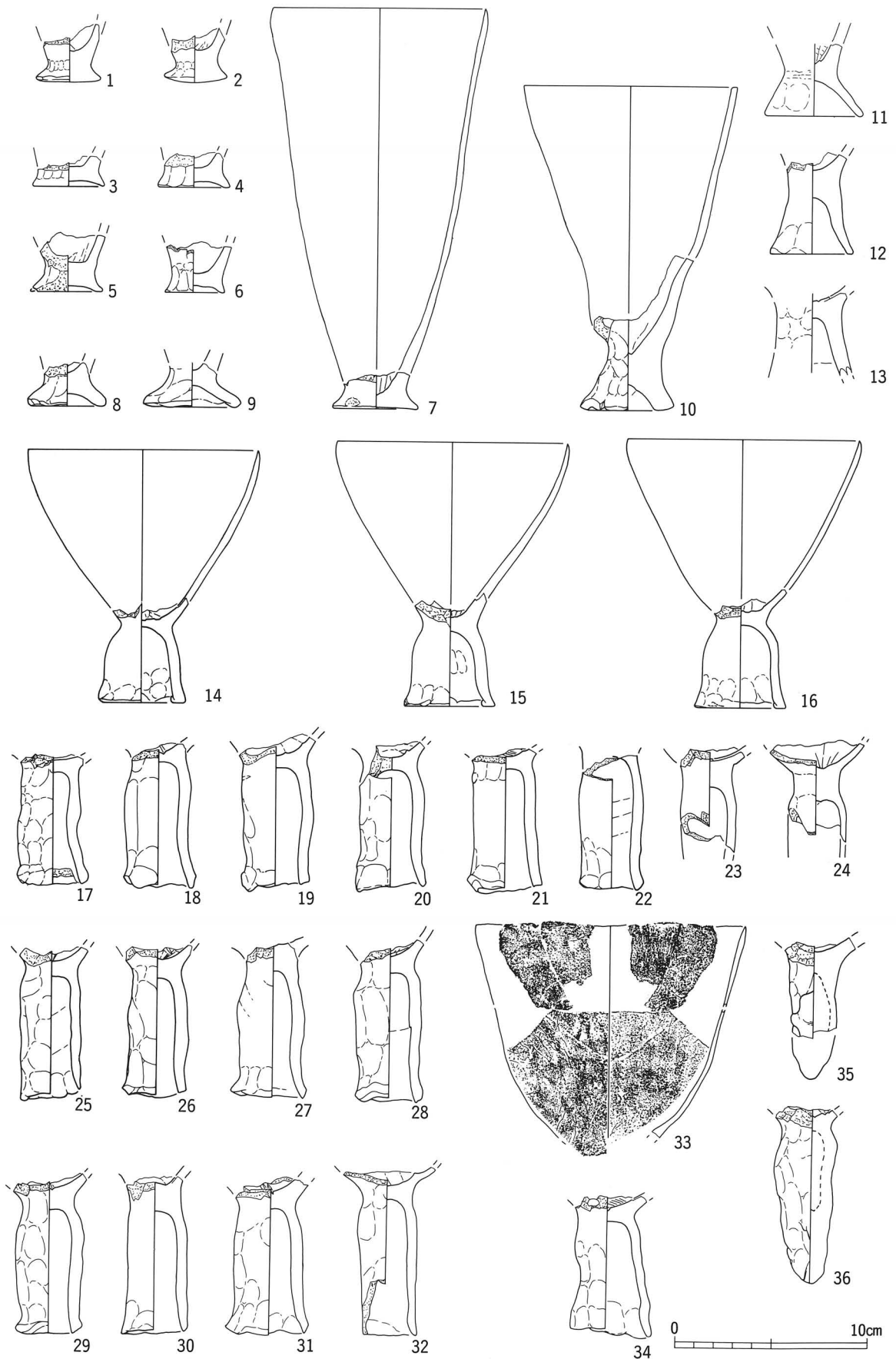
第22图 包含層出土土師器③ (1 / 4)



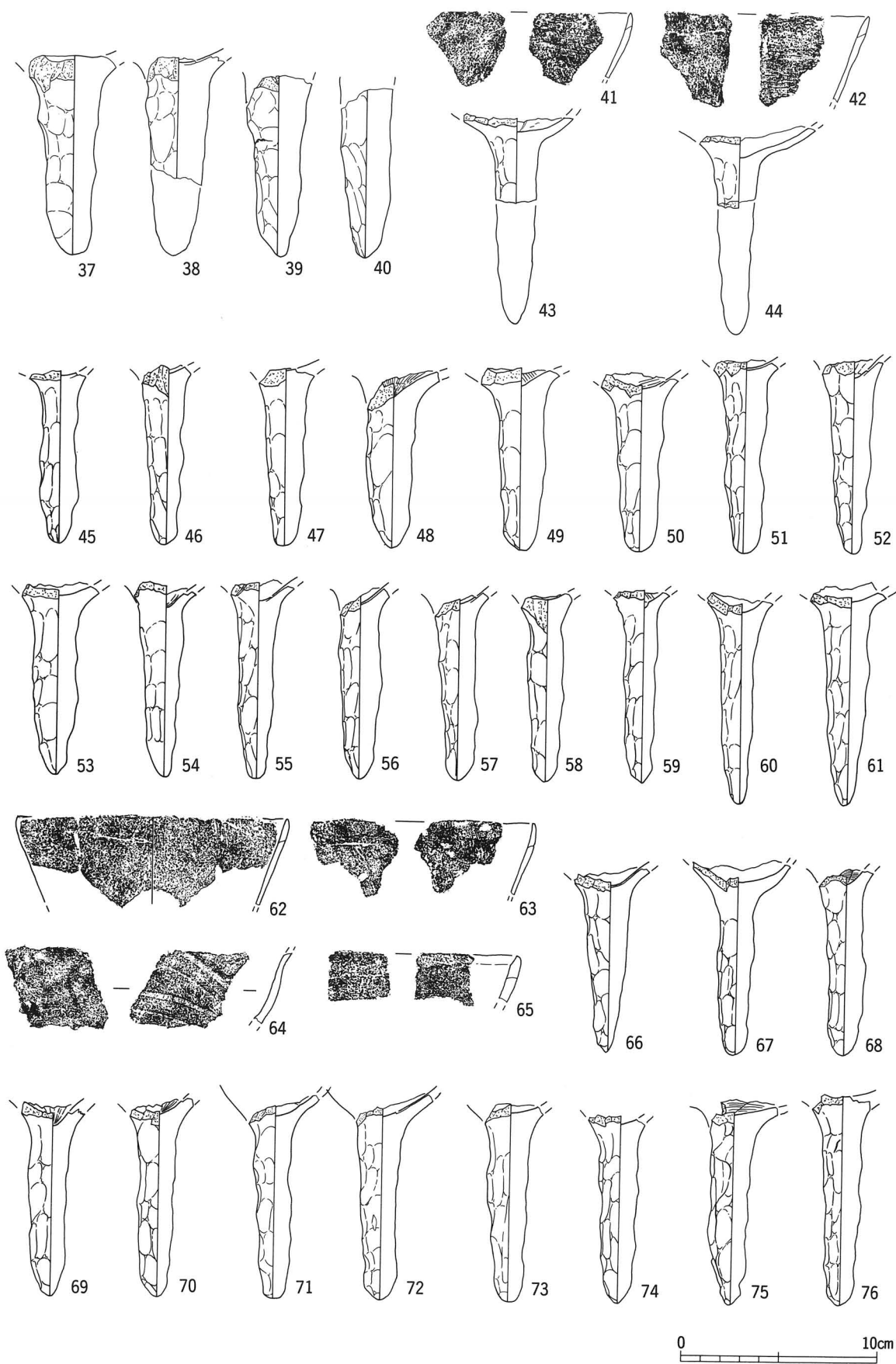
第23図 包含層出土陶器類等 (1 / 4)



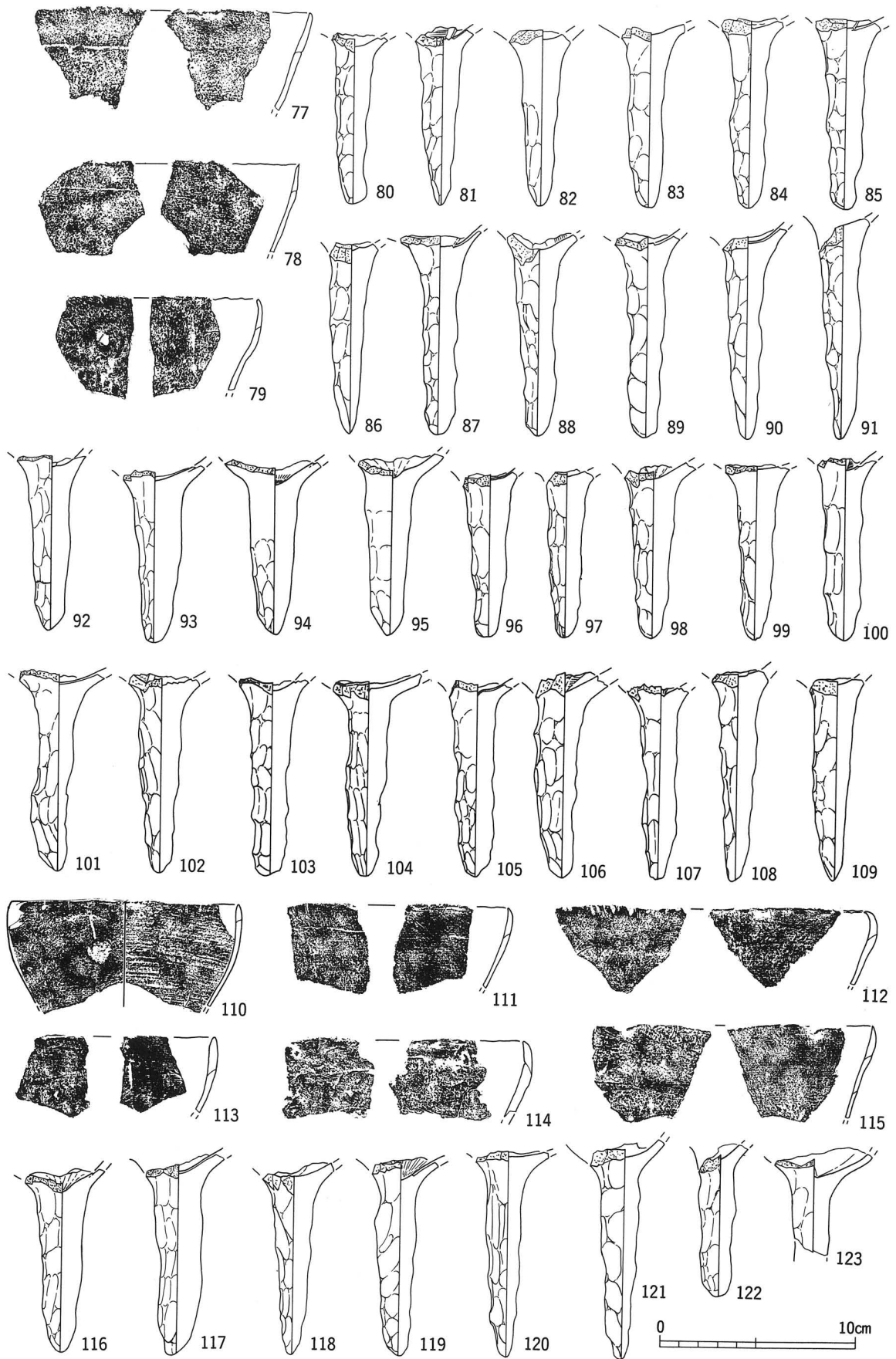
第24図 包含層出土土錘・金属製品・骨角製品 (1 / 3)



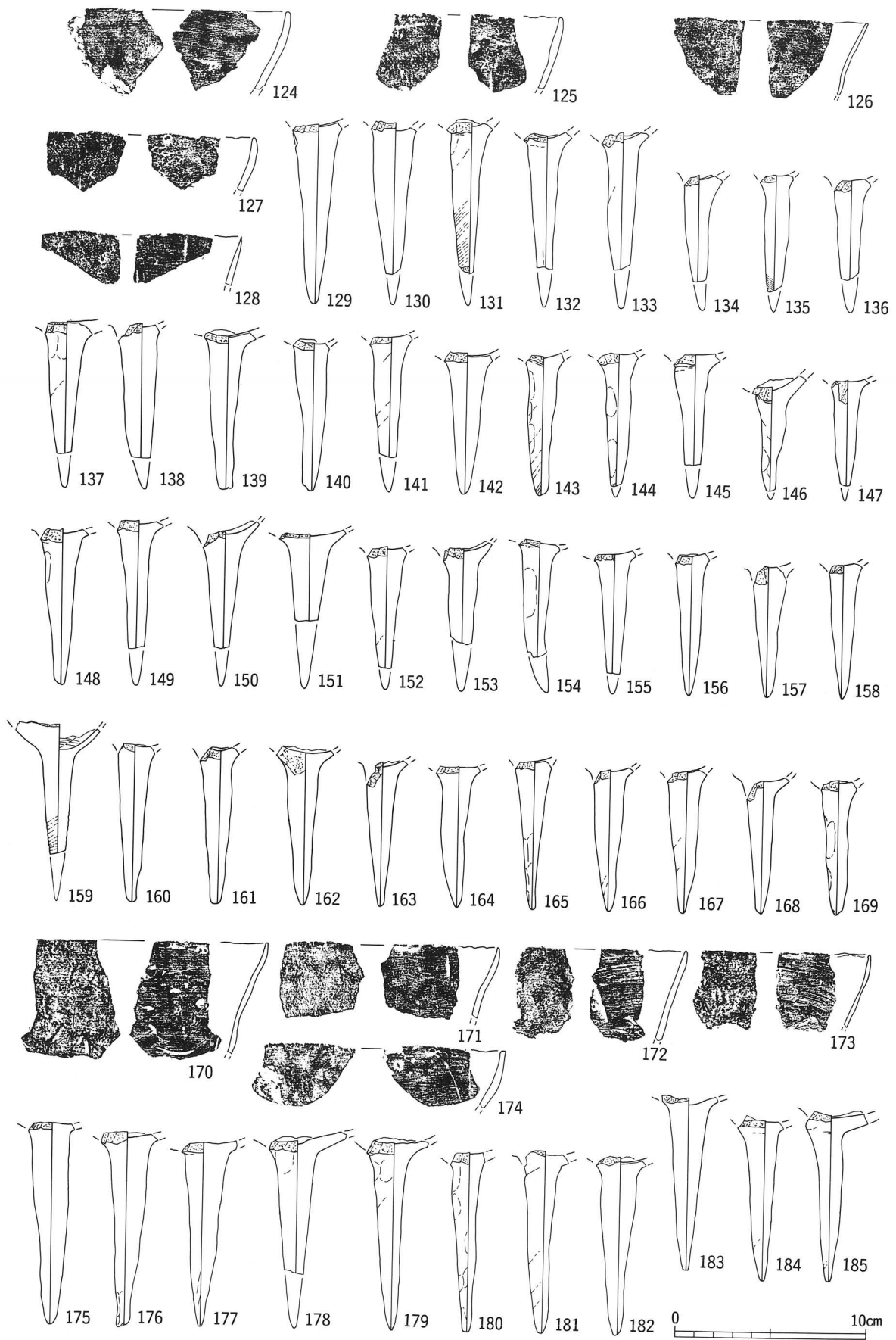
第25図 製塩土器 (松崎類, 知多式0類・1類等)



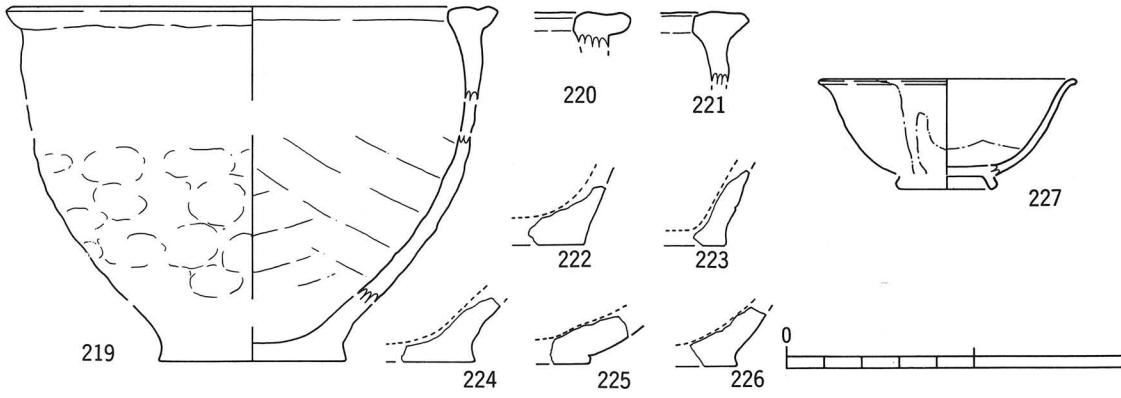
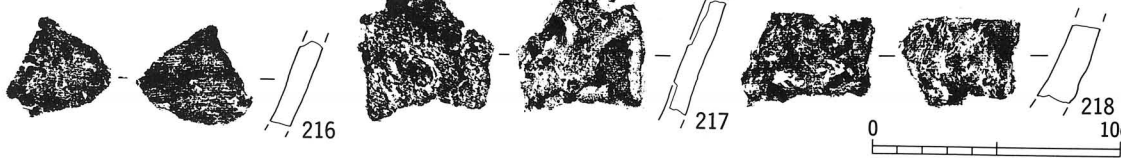
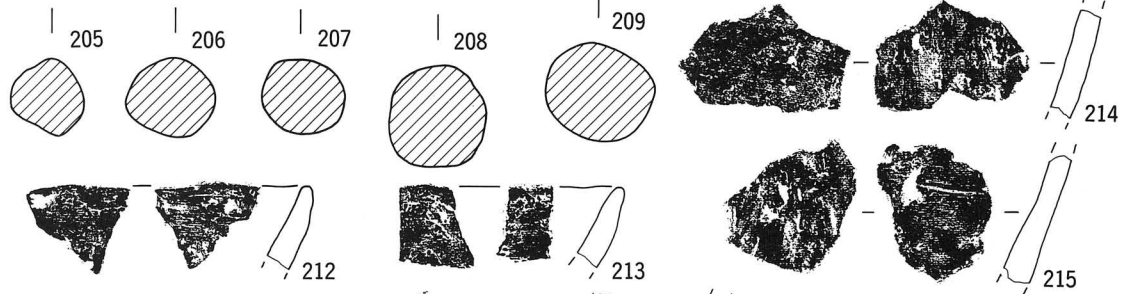
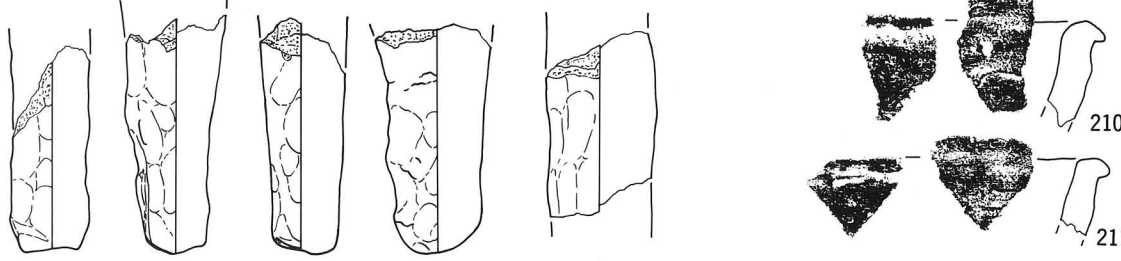
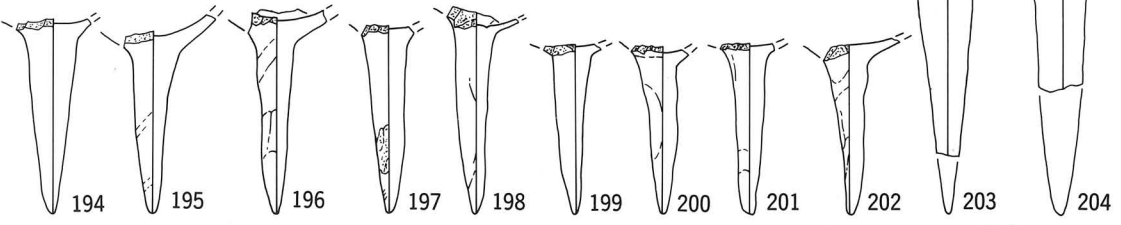
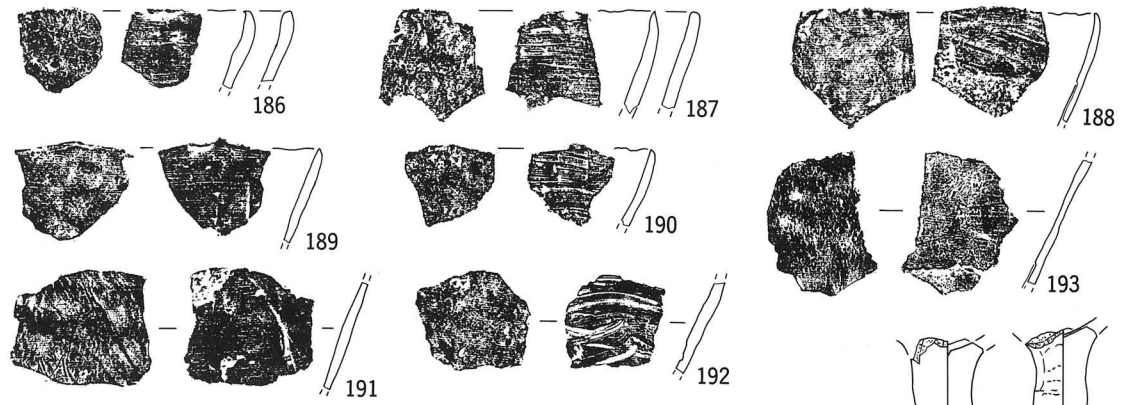
第26図 製塩土器 (知多式3類) ①



第27図 製塩土器 (知多式3類) ②



第28図 製塩土器 (知多式4類)



第29図 製塩土器 (知多式4類・特殊品等)

第5表 土器等観察表

図番号	出土区	器種	法量 (cm)			色調	備考
			器高	口径	底径		
13図-1	かまど内	土師器 甕		17.6		橙色	胴下部被熱・器表面剥離
2	かまど内	土師器 平底甕	23.7	19.7	6.5	淡褐色	胴中部以下被熱・器表面剥離
3	かまど内	須恵器 甗		30.2		灰黄色	胴中部沈線1条
4	かまど内	土師器 平底甕	21.0	19.0	6.5	明赤褐色	胴中部被熱、胎土に小礫含む
6	かまど内	土師器 甕		14.7		淡褐色	胎土に砂粒含む
7	かまど内	須恵器 坏身	5.2	12.8		灰白色	
14図-8	かまど周辺	須恵器 坏蓋	4.6	12.9		黒色	
9	かまど周辺	須恵器 坏蓋	5.0	15.2		暗青灰色	
10	かまど周辺	須恵器 坏蓋	4.4	14.0		灰褐色	
11	かまど周辺	須恵器 坏蓋	4.8	15.0		青灰色	
12	かまど周辺	須恵器 坏身	5.2	13.4		黒色	外面厚く自然釉
13	かまど周辺	須恵器 坏身	5.0	13.8		灰色	薄手
14	かまど周辺	須恵器 坏身	4.4	13.0		青灰色	
15	かまど周辺	須恵器 坏身	4.6	12.6		青灰色	薄手
16	かまど周辺	須恵器 高坏		15.0		青灰色	口縁ひずみ、外面黒色自然釉
17	かまど周辺	須恵器 甗		30.4		白色	軟質、胴中部沈線1条
18	かまど周辺	須恵器 甗		30.0		青灰色	胴中部沈線1条
19	かまど周辺	須恵器 甗		32.4		灰白色	胴中部沈線1条
20	かまど周辺	土師器 甕		14.0		赤褐色	
21	かまど周辺	土師器 台付甕			10.4	明褐色	胎土砂粒多
22	かまど周辺	土師器 坏	5.6	11.6		赤褐色	
23	かまど周辺	土師器 坏	4.7	13.8		赤褐色	
24	かまど周辺	土師器 坏		14.4		明褐色	
25	かまど周辺	土師器 小型壺		9.0		明褐色	
26	かまど周辺	土師器 小型壺		9.4		淡褐色	外面スス附着
15図-27	土坑内	土師器 台付甕	29.6	13.6	10.6	暗赤褐色	胴上部器表面剥離
28	土坑内	土師器 S字甕		15.4		明褐色	
29	土坑内	土師器 S字甕		16.4		明褐色	
30	土坑内	土師器 S字甕		14.8		暗灰褐色	
31	土坑内	土師器 S字甕		13.8		明褐色	
32	土坑内	土師器 S字甕			8.0	明灰褐色	
33	土坑内	土師器 高坏	12.2	16.8	10.6	明褐色	
34	土坑内	土師器 壺			4.8	黒褐色	
16図-35	H-11区	須恵器 坏蓋	4.3	11.4		暗灰色	調査区2集中
36	H-11区	須恵器 坏身	4.6	9.8		灰黒色	調査区2集中
37	H-11区	須恵器 坏身		8.6		灰色	調査区2集中
38	H-11区	須恵器 有蓋高坏		10.4		灰黒色	調査区2集中
39	H-11区	須恵器 有蓋高坏	9.6	9.8	10.1	灰褐色	調査区2集中
40	G-11区	須恵器 有蓋高坏	10.4	10.7	9.0	灰色	調査区2集中
41	H-12区	須恵器 大甕				灰色	調査区2集中、外面格子叩き
17図-42	G-11区	土師器 宇田型甕	24.3	13.9	8.2	橙色	外面黒斑
43	H-11区	土師器 宇田型甕	33.0	14.4	10.4	明黄褐色	調査区2集中
44	H-10区	土師器 宇田型甕		16.2		黄褐色	調査区2集中、胴下部スス附着、胎土長石含む
45	H-11区	土師器 平底甕	22.5	15.6	5.7	暗褐色	調査区2集中、硬質、外面全体スス附着
46	G-11区	土師器 宇田型甕		14.0		明褐色	調査区2集中、外面全体スス附着
47	H-10区	土師器 甕		16.6		明褐色	調査区2集中、口縁付近スス附着
48	H-11区	土師器 宇田型甕		15.4		明褐色	調査区2集中、胎土砂粒含む
49	G-11区	土師器 甕		20.1		褐色	調査区2集中、外面スス附着
50	G-11区	土師器 台付甕	14.8	12.0	7.9	淡黄褐色	調査区2集中
51	G-11区	土師器 台付甕			9.0	暗褐色	調査区2集中
52	H-10区	土師器 台付甕			9.4	褐色	調査区2集中
53	H-11区	土師器 平底甕	21.3	12.2		暗赤褐色	調査区2集中、外面全体スス附着、胴下部被熱
54	H-10区	土師器 甕		17.1		灰褐色	調査区2集中
18図-55	G-11区	土師器 高坏	11.1	14.9	10.0	赤褐色	調査区2集中
56	G-11区	土師器 高坏	10.5	14.0	8.3	赤褐色	調査区2集中
57	H-10区	土師器 高坏		20.6		明赤褐色	調査区2集中

図番号	出土区	器種	法量 (cm)			色調	備考
			器高	口径	底径		
18図-58	G-11区	土師器 高 坏		17.0		赤褐色	調査区2集中、胎土砂粒含む
59	G-11区	土師器 高 坏		16.0		明褐色	調査区2集中
60	H-11区	土師器 高 坏	16.5	16.6	10.2	暗赤褐色	調査区2集中
61	H-11区	土師器 高 坏		11.8		褐色	調査区2集中
62	I-11区	土師器 高 坏		19.0		明褐色	調査区2集中、内面摩耗
63	H-10区	土師器 高 坏		21.5		明赤褐色	調査区2集中
64	G-11区	土師器 高 坏			10.0	褐色	調査区2集中
65	I-11区	土師器 高 坏	12.3	14.7	10.0	明褐色	調査区2集中
66	I-11区	土師器 高 坏			8.8	赤褐色	調査区2集中
67	I-11区	土師器 高 坏			9.2	赤褐色	調査区2集中
68	I-10区	土師器 高 坏			9.8	赤褐色	調査区2集中
69	H-10区	土師器 高 坏			9.2	赤褐色	調査区2集中
70	H-11区	土師器 壺	11.7	10.8		明褐色	調査区2集中
71	H-11区	土師器 壺	9.2	9.4		明褐色	調査区2集中
72	I-11区	土師器 小型壺?		10.8		灰黄褐色	調査区2集中
73	H-11区	土師器 小型壺	10.0	8.0	4.5	明赤褐色	調査区2集中
74	I-11区	土師器 小型壺?	9.1	9.4	4.0	明褐色	調査区2集中
75	I-10区	土師器 小型壺	7.1	5.8		黄褐色	調査区2集中
76	G-11区	土師器 小型壺		8.2		暗赤褐色	調査区2集中
77	I-10区	土師器 小型壺	6.3	5.2	3.8	赤褐色	調査区2集中、黒斑
78	H-11区	土師器 小型壺	5.8	3.0	2.0	黒色	調査区2集中、口縁受口状
79	I-11区	土師器 小型壺			4.8	黄褐色	調査区2集中
80	H-11区	土師器 坏	5.6	12.4		赤褐色	調査区2集中
19図-81	C-1区	須恵器 坏 蓋	4.7	11.0		灰褐色	C-1区集中、軟質
82	C-1区	須恵器 坏 蓋	5.1	11.6		白色	C-1区集中、軟質
83	C-1区	須恵器 坏 蓋	3.9	10.6		灰色	C-1区集中
84	C-1区	須恵器 有蓋高坏		9.6		黒色	C-1区集中、3方向に方形孔
85	C-1区	須恵器 坏 身	5.4	10.0		灰褐色	C-1区集中
86	C-1区	須恵器 坏 身	5.5	9.6		灰褐色	C-1区集中、軟質
87	C-1区	須恵器 坏 身	5.9	10.4		灰色	C-1区集中、軟質
88	C-1区	須恵器 坏 身	4.9	10.0		暗灰色	C-1区集中、外面黒色自然釉
89	G-2区	須恵器 坏 蓋	3.8	12.2		白灰色	
90	F-3区	須恵器 高 坏 蓋	6.1	11.6		灰色	
91	I-12区	須恵器 坏 蓋	4.0	14.6		青灰色	
92	G-3区	須恵器 坏 蓋	3.4	10.8		灰色	
93	G-3区	須恵器 坏 蓋	3.2	13.4		灰白色	口縁部に2条の波状文
94	F-2区	須恵器 坏 身	4.9	10.4	5.0	暗灰色	
95	F-1区	須恵器 坏 身		9.2		褐色	
96	F-2区	須恵器 坏 身	5.3	10.2	5.2	暗灰色	
97	H-3区	須恵器 坏 身	4.9	10.6	5.0	白黄色	
98	A-3区	須恵器 坏 身	4.7	9.8		黒色	
99	F-1区	須恵器 坏 身		10.0		青灰色	
100	F-2区	須恵器 坏 身	4.4	10.6		白色	
101	F-1区	須恵器 坏 身		10.0		黒色	
102	G-3区	須恵器 坏 身	5.0	10.8	6.6	灰色	
103	J-3区	須恵器 坏 身	4.9	11.4		灰褐色	
104	G-3区	須恵器 坏 身	4.1	9.2		暗灰色	体部に沈線1条
105	B-1区	須恵器 無台坏身	3.9	13.0	12.0	暗灰色	
106	F-2区	須恵器 有台坏身	3.8	12.4	11.0	褐色	
107	F-2区	須恵器 有台坏身			10.4	灰褐色	
108	B-1区	須恵器 無台坏身	3.9	13.6		灰白色	
109	G-3区	須恵器 鉢	5.5	14.6	8.0	暗青灰色	
110	I-5区	須恵器 高 坏		15.4		灰色	波状文1条
111	G-3区	須恵器 高 坏		17.2		暗灰色	脚上部に對で貫通しない長方形の孔
112	C-1区	須恵器 高 坏		14.2		暗青灰色	内面あめ色自然釉
113	G-3区	須恵器 高 坏				灰色	脚中部に沈線2条

図番号	出土区	器種		法量 (cm)			色調	備考
				器高	口径	底径		
19図-114	G-3区	須恵器	高 坏			11.2	暗青灰色	脚部4方向に縦長孔
115	C-1区	須恵器	甗				青灰色	体部に沈線2条
116	E-2区	須恵器	壺		13.4		青灰色	胴部櫛状工具による横線
117	F-1区	須恵器	甗		15.2		青灰色	口唇部波状文
118	G-3区	須恵器	甗			2.0	灰色	胴中部波状文
20図-119	H-4区	土師器	台付 甗	31.0	18.4	9.8	赤褐色	口唇・胴部外面スス付着
120	G-4区	土師器	台付 甗	31.8	17.8		褐色	
121	G-3区	土師器	台付 甗	26.0	14.2	8.6	暗褐色	口唇・胴部外面スス付着、被熱による剥離
122	G-4区	土師器	台付 甗			10.4	黒褐色	
123	C-1区	土師器	宇田型 甗		13.2		褐色	胴下半部黒色変化
124	I-5区	土師器	宇田型 甗		17.0		黄褐色	胎土に石英含
125	C-1区	土師器	宇田型 甗		17.0		黄褐色	
126	E-2区	土師器	台付 甗		17.2		黄白色	胴上部沈線1条
21図-127	G-3区	土師器	台付 甗		13.6		灰白色	
128	K-5区	土師器	甗		21.8		淡褐色	
129	C-2区	土師器	台付 甗	16.9	12.4	7.9	暗褐色	胴中～口縁外面スス付着
130	C-3区	土師器	台付 甗			9.6	明褐色	
131	E-1区	土師器	台付 甗			10.2	淡褐色	
132	K-5区	土師器	台付 甗			10.0	淡赤褐色	
133	F-1区	土師器	台付 甗			8.6	黒褐色	
134	G-4区	土師器	台付 甗			5.8	淡褐色	
135	G-3区	土師器	台付 甗			10.8	褐色	
136	G-3区	土師器	台付 甗			10.0	灰褐色	
137	F-1区	土師器	台付 甗			10.0	黒褐色	
138	G-2区	土師器	甗	22.3	14.8		黒褐色	胴中部被熱、器表面剥離
139	G-3区	土師器	甗	10.7	10.0	5.0	灰白色	外面スス付着
140	G-3区	土師器	甗		15.0		赤褐色	胴上～口唇外面スス付着
141	G-3区	土師器	甗		15.4		明褐色	
142	F-1区	土師器	甗		11.0		赤褐色	
143	G-3区	土師器	甗		15.6		明褐色	
144	G-3区	土師器	甗		10.8		暗褐色	
145	G-3区	土師器	甗		17.0		灰黄色	
146	G-3区	土師器	甗		13.0		赤褐色	
147	F-1区	土師器	甗		12.6		赤褐色	
148	G-2区	土師器	甗		12.5		暗赤褐色	外面スス付着
149	K-5区	土師器	甗		15.6		淡褐色	色調・作り、製塩土器様の特徴
150	G-4区	土師器	甗		11.4		暗褐色	外面スス付着
151	I-2区	土師器	甗?				褐色	
152	H-3区	土師器	甗	13.4	18.2	6.8	明褐色	底部中心1・周辺5孔
22図-153	G-3区	土師器	坏		14.6		暗褐色	
154	G-4区	土師器	坏		12.6		淡褐色	
155	G-3区	土師器	坏		12.0		明褐色	
156	F-1区	土師器	高 坏	11.5	15.4	11.6	赤褐色	
157	G-2区	土師器	高 坏	11.9	15.6	10.4	明褐色	
158	G-3区	土師器	高 坏	11.6	15.8	10.6	赤褐色	
159	G-2区	土師器	高 坏	11.2	7.0	9.6	明褐色	
160	G-3区	土師器	高 坏		14.2		赤褐色	
161	G-4区	土師器	高 坏		15.2		明褐色	硬質
162	G-2区	土師器	高 坏		13.4		明褐色	
163	G-3区	土師器	高 坏		17.5		明褐色	
164	G-2区	土師器	高 坏			10.2	明褐色	
165	G-4区	土師器	高 坏			12.4	明褐色	
166	J-5区	土師器	高 坏			12.6	明黄褐色	
167	G-3区	土師器	高 坏			9.0	赤褐色	
168	G-3区	土師器	高 坏			9.6	褐色	
169	F-3区	土師器	高 坏			9.4	暗赤褐色	

図番号	出土区	器種		法量 (cm)			色調	備考
				器高	口径	底径		
170	I-4区	土師器	高 坏			8.5	明褐色	
171	G-2区	土師器	壺		21.0		赤褐色	
172	F-1区	土師器	小型 壺	7.2	5.0	2.5	明褐色	
173	G-2区	土師器	小型 壺		8.4		明褐色	
174	H-3区	土師器	小型 壺		7.6		明褐色	
175	C-1区	土師器	小型 壺		11.0		明褐色	
176	G-4区	土師器	埴?		15.2		茶褐色	
177	I-5区	土師器	壺			7.3	明褐色	
178	G-2区	土師器	壺			6.6	褐色	雲母混入、底部木葉痕
179	G-3区	土師器	壺			6.8	赤褐色	
23図-180	J-4区	灰 釉	碗	5.5	17.0	10.0	白色	つげがけ
181	J-5区	灰 釉	碗			8.0	白色	つげがけ
182	I-3区	灰 釉	碗			8.6	灰白色	つげがけ
183	J-4区	灰 釉	碗			8.0	灰白色	つげがけ
184	I-11区	灰 釉	碗			6.8	灰白色	
185	L-3区	灰 釉	碗			7.8	白色	
186	I-11区	灰 釉	碗			7.7	灰白色	つげがけ?
187	B-3区	灰 釉	碗			7.4	灰黄色	
188	G-3区	灰 釉	碗			5.0	白色	
189	K-5区	緑 釉	段 皿			8.4		
190	I-11区	灰 釉	皿			6.2	灰白色	刷毛塗
191	I-11区	灰 釉	段 皿	2.2	15.0	7.4	灰白色	つげがけ?
192	I-3区	灰 釉	段 皿	2.6	15.0	6.0	灰白色	つげがけ
193	J-5区	灰 釉	皿	2.8	13.8	7.2	白色	つげがけ
194	K-5区	灰 釉	皿	3.3	14.8	7.9	灰白色	発色せず
195	K-5区	灰 釉	皿	3.0	14.0	7.2	灰白色	つげがけ
196	J-4区	灰 釉	皿	2.7	13.2	7.0	灰白色	つげがけ
197	J-5区	灰 釉	皿			7.0	白色	つげがけ
198	J-2区	灰 釉	皿			6.4	灰白色	
199	J-2区	灰 釉	皿			7.0	白色	つげがけ
200	H-2区	山茶碗	碗			7.8	灰色	高台部に糊がら圧痕
201	K-5区	灰 釉	長頸瓶		12.0		灰白色	
202	K-5区	灰 釉	長頸瓶		11.0		白色	
203	G-3区	灰 釉	瓶			10.8	灰色	
204	G-2区	灰 釉	瓶			12.0	灰色	
205	K-5区	須恵器	大 甕		38.4		灰白色	
206	K-5区	須恵器	大 甕		34.8		暗灰色	
210	I-4区	中世	土師皿	1.0	8.2	5.5	暗灰褐色	

第6表 土錘計測表

(単位 cm)

図番号	出土区	孔径	長さ(推定)	径	重さ(g)	備考
24図-212	F-2区	1.3	9.5	3.3	66.9	知多式4類伴出
213	G-2区	1.5		3.9	72.4	知多式4類伴出
214	D-3区	1.4	5.1	3.3	41.7	
215	F-2区	1.3	9.0	3.3	53.0	知多式4類伴出
216	H-11区	0.3	4.5	1.2	6.1	
217	B-1区	0.4	5.0	1.5	7.6	
218	I-3区	0.4	5.3	1.4	6.5	
219	H-11区	0.3	4.2	1.3	5.1	知多式4類・灰釉伴出
220	K-5区	0.9	5.1	2.9	32.3	灰釉伴出
221	B-3区	0.5	6.0	2.3	23.9	
222	K-5区	0.5	6.8	2.2	30.6	
223	K-3区	0.7	6.0	2.3	23.6	
224	L-3区	0.8	6.0	2.5	21.0	
225	L-4区	0.8	5.9	2.5	22.7	
226	L-5区	0.9	5.9	2.9	36.7	灰釉伴出
227	H-11区	0.7	5.3	2.6	23.9	
228	J-4区	0.9	4.5	2.5	21.5	
229	J-3区	0.7	7.4	2.0	21.3	
230	I-5区	0.7	5.7	2.5	27.0	
231	H-11区	0.7	5.7	2.8	28.8	灰釉伴出
232	K-5区	0.7	6.0	2.2	21.0	
233	I-3区	0.7	6.0	2.1	18.6	
234	L-3区	0.8	5.7	2.2	13.5	
235	I-11区	0.6	5.9	2.4	22.4	知多式4類伴出
236	K-5区	0.8	6.4	3.1	42.8	灰釉伴出
237	F-2区	0.4	6.5	2.4	23.7	知多式4類伴出
238	H-11区	0.7	6.0	2.5	24.1	知多式4類伴出
239	K-5区	0.7	5.2	2.5	25.0	灰釉伴出
240	I-11区	0.7	6.2	2.3	14.8	

第7表 製塩土器等観察表

図番号	分類	底径	脚高	脚径	口径	色調	出土区	備考
1	松崎類	3.4	1.6	2.2		暗赤褐色	H 2 褐色砂層	
2	松崎類	3.2	1.8	2.2		暗赤褐色	H 3 黄褐色砂層	
3	松崎類	3.7	1	3.1		赤褐色	F 1 黒色砂層	
4	松崎類	3.7	1	3		赤褐色	F / G 2	
5	松崎類	3.7	1.5	2.6		明褐色	H 2 褐色砂層	
6	松崎類	3.1	1	2.6		赤褐色	H 3 黒色砂層	
7	松崎類	4.4	0.7	3.2		褐色	I 11 黄色砂層	
8	松崎類	5	1.9	2.4		褐色	G 3 褐色砂層	
9	松崎類	4.1	1.7	2.3		褐色	H11黒 - 黒褐色砂層	
10	松崎類	4.8	3	2.8		茶褐色	F 1 混貝黒褐色砂層	
11	疑似松崎類	5.2	2.7	2.7		黒褐色	G 3	
12	知多式0類祖形	4.3	4.4	2.7		赤褐色	G 2 / 3	
13	知多式0類祖形			3.4		褐色	D 2 黄色砂層	
14	知多式0類	4.5	4.3	2.6		淡灰褐色	G11混貝黒褐色砂層	
15	知多式0類	4.7	4.7	2.8		橙色	G11混貝黒褐色砂層	
16	知多式0類	4.7	5	2.5		淡橙色	G11混貝黒褐色砂層	
17	知多式1 A 2類	3.7	6.5	2.9		明褐色	G 3	
18	知多式1 A 2類	3.7	7.1	2.8		明褐色	G 3 黒褐色砂層	
19	知多式1 A 2類	3.5	6.9	3.2		明褐色	G 2 黒色砂層	
20	知多式1 A 2類	3.7	6.9			明褐色	G 3 黒色砂層	
21	知多式1 A 2類	4	7	3		明褐色	G 3 黒色砂層	
22	知多式1 A 2類	3.3				明褐色	E 1 貝層	
23	知多式1 A類			2.5		明褐色	D 2 黄色砂層	
24	知多式1 A類			2.4		赤褐色	H 3 黒褐色砂層	
25	知多式1 A 2類	3.1	7.1	2.7		褐色	F 2 茶色砂層	
26	知多式1 A 2類	3.3	7.3	2.5		明褐色	H 3 黄褐色砂層	
27	知多式1 A 2類	3.9	7.9	2.6		明褐色	A 2 地山直上	
28	知多式1 B類	3.5	7.5	2.8		白橙色	G 3	
29	知多式1 B類	3.5	7.5	2.7		褐色	G 3 茶褐色砂層	
30	知多式1 B類	3.4	7.9	2.6		淡褐色	G 2 黒褐色砂層	
31	知多式1 B類	4.2	7.5	2.9		明褐色	H 3 褐色砂層	
32	知多式1 C類	2.9	7.8	2.6		明褐色	G 3 茶褐色砂層	
33	知多式1類				14	明褐色	F 2 かまど内	
34	知多式1 B類	4.2	6.5	2.9		明赤褐色	F 2 かまど内	
35	知多式2 A類			2.6		褐色	C 1 黄色砂層	
36	知多式2 C類		8.7	2.6		明褐色	D 3 黒褐色砂層	
37	知多式3 A類		10.3	3.1		明褐色	A 1 茶褐色砂層	
38	知多式3 A類			3.2		橙色	G10混貝黒褐色砂層	
39	知多式3 A類					灰赤色	C 1 黄褐色砂層	
40	知多式3 A類					褐色	G 3	
41	知多式3 B類					明褐色	E33類暗茶褐色砂層	□縁部
42	知多式3 B類					明褐色	E 2 暗茶褐色砂層	□縁部
43	知多式3 B類			2.4		明褐色	E 2 暗茶褐色砂層	
44	知多式3 B類			2.3		明褐色	E33類暗茶褐色砂層	
45	知多式3 B類		8.7	1.9		明褐色	E 2 暗茶褐色砂層	
46	知多式3 B類		8.9	2.2		明褐色	E 2 暗茶褐色砂層	
47	知多式3 B類		9.1	2.2		明褐色	E 2 暗茶褐色砂層	
48	知多式3 B類		7.8	2.4		明褐色	E 2 暗茶褐色砂層	
49	知多式3 B類		8.5	2.6		明褐色	E 2 褐色砂層	
50	知多式3 B類		8.4	2.7		灰褐色	E33類暗茶褐色砂層	
51	知多式3 B類		9.5	2.4		明褐色	E 2 暗茶褐色砂層	
52	知多式3 B類		9	2.4		橙色	E33類暗茶褐色砂層	
53	知多式3 B類		9.2	2.5		黒褐色	E 2 暗茶褐色砂層	
54	知多式3 B類		8.8	2.2		橙色	E33類暗茶褐色砂層	
55	知多式3 B類		9.2	2.1		明褐色	E 2 暗茶褐色砂層	
56	知多式3 B類		9	2		赤褐色	E 2 褐色砂層	
57	知多式3 B類		9.1	1.9		明褐色	E 2 褐色砂層	

図番号	分類	底径	脚高	脚径	口径	色調	出土区	備考
58	知多式3B類		9.4	1.9		明褐色	E33類暗茶褐色砂層	
59	知多式3B類		9.3	1.9		明褐色	E33類暗茶褐色砂層	
60	知多式3B類		10	2.2		明褐色	E2暗茶褐色砂層	
61	知多式3B類		10.5	2.5		明褐色	E2暗茶褐色砂層	
62	知多式3B類				14	明褐色	D23類灰層	口縁部
63	知多式3B類					明褐色	D23類灰層	口縁部
64	知多式3B類					灰赤色	D23類灰層	坏部
65	知多式3B類					明褐色	D23類灰層	口縁部
66	知多式3B類		8.6	2.3		暗赤褐色	D23類灰層	
67	知多式3B類		9	1.9		明褐色	D23類灰層	
68	知多式3B類		8.9	2		明褐色	D23類灰層	
69	知多式3B類		8.8	2		暗赤褐色	D23類灰層	
70	知多式3B類		9.4	2.1		褐色	D23類灰層	
71	知多式3B類		9.5	2.1		褐色	D2黒砂層灰層	
72	知多式3B類		9.5	2.3		灰褐色	D2黒砂層灰層	
73	知多式3B類		9.8	2.1		褐色	D2黒砂層灰層	
74	知多式3B類		9.3	2		明褐色	D23類灰層	
75	知多式3B類		9.9	2.3		灰色	D23類灰層	
76	知多式3B類		10.8	2.2		明褐色	D23類灰層	
77	知多式3B類					明褐色	D13類黒色砂層	口縁部
78	知多式3B類					黄褐色	D13類黒色砂層	口縁部
79	知多式3B類					明褐色	B2黒褐色砂層	口縁部
80	知多式3B類		8.2	1.9		明褐色	D13類黒色砂層	
81	知多式3B類		8.7	2.1		褐色	D13類黒色砂層	
82	知多式3B類		8.7	2		灰褐色	D13類黒色砂層	
83	知多式3B類		9	2.1		灰褐色	D13類黒色砂層	
84	知多式3B類		9.4	2		明褐色	D13類黒色砂層	
85	知多式3B類		9.5	2.4		灰褐色	D13類黒色砂層	
86	知多式3B類		9.6	2		黄白色	D13類黒色砂層	
87	知多式3B類		9.8	2.1		明褐色	D13類黒色砂層	
88	知多式3B類		9.8	2.2		明褐色	D13類黒色砂層	
89	知多式3B類		10.2	2.1		明褐色	D13類黒色砂層	
90	知多式3B類		10.2	2.2		灰褐色	D13類黒色砂層	
91	知多式3B類		11.1	2.2		明褐色	D13類黒色砂層	
92	知多式3B類		8.5	2.2		明褐色	C3黒色砂層	
93	知多式3B類		8.4	2.5		褐色	C3黒褐色砂層	
94	知多式3B類		7.7	2.6		明褐色	C3黒褐色砂層	
95	知多式3B類		8.1	2.4		明褐色	C3黒褐色砂層	
96	知多式3B類		8.2	2.2		明褐色	B1黒色砂層(SD4)	
97	知多式3B類		8.4	1.8		明褐色	B1黒色砂層(SD4)	
98	知多式3B類		8.3	2.5		明褐色	B1黒色砂層(SD4)	
99	知多式3B類		8.9	2		明褐色	B1黒色砂層(SD4)	
100	知多式3B類		8.9	1.9		淡褐色	B1黒色砂層(SD4)	
101	知多式3B類		9.8	2.3		明褐色	B1黒色砂層(SD4)	
102	知多式3B類		9.8	2.2		明褐色	B1黒色砂層(SD4)	
103	知多式3B類		9.6	2.4		明褐色	B1黒色砂層(SD4)	
104	知多式3B類		9.8	2.3		明褐色	B1黒色砂層(SD4)	
105	知多式3B類		9.5	2.2		褐色	B1黒色砂層(SD4)	
106	知多式3B類		9.7	2.4		明褐色	B1黒色砂層(SD4)	
107	知多式3B類		9.6	1.9		褐色	B1黒色砂層(SD4)	
108	知多式3B類		10.7	2		明褐色	B1黒色砂層(SD4)	
109	知多式3B類		10.2	1.9		明褐色	B1黒色砂層(SD4)	
110	知多式3B類				12	明褐色	B2黒色砂層	口縁部
111	知多式3B類					明褐色	B1黒色砂層(SD4)	口縁部
112	知多式3B類					明褐色	B1黒色砂層(SD4)	口縁部
113	知多式3B類					明褐色	B1黒色砂層(SD4)	口縁部
114	知多式3B類					黄褐色	G3褐色砂層	口縁部
115	知多式3B類					明褐色	G2黒褐色砂層	口縁部

図番号	分類	底径	脚高	脚径	口径	色調	出土区	備考
116	知多式3B類		8.4	2.5		明褐色	C5黒褐色砂層	
117	知多式3B類		9.5	2.5		明黄褐色	G3黒-黒褐色砂層	
118	知多式3B類		9.3	2.2		明褐色	B2黒色砂層	
119	知多式3B類		9.2	1.8		赤褐色	B2黒色砂層	
120	知多式3B類		10.5	1.9		明褐色	B2黒色砂層	
121	知多式3B類		10.5	2.1		褐色	B1黒色砂層	
122	知多式3B類		7.2	1.9		明褐色	G3黒-黒褐色砂層	
123	知多式3B類			2		灰白色	G3黒-黒褐色砂層	
124	知多式4類					黄白色	F2暗茶褐色砂層	口縁部
125	知多式4類					明褐色	F2黒色砂層	口縁部
126	知多式4類					明褐色	F2黒色砂層	口縁部
127	知多式4類					明褐色	F2黒色砂層	口縁部
128	知多式4類					明褐色	F2黒色砂層	口縁部
129	知多式4A1類		9.5	2.1		褐色	F2灰褐色土層	
130	知多式4A1類		9.3	2		灰褐色	F2灰褐色土層	
131	知多式4A1類		9.5	1.9		褐色	F2灰褐色土層	
132	知多式4A1類		9	1.7		灰褐色	F2灰褐色土層	
133	知多式4A1類		9	1.7		灰褐色	F2灰褐色土層	
134	知多式4A3類		7	1.5		明褐色	F2灰褐色土層	
135	知多式4A3類		7	1.2		灰褐色	F2灰褐色土層	
136	知多式4A3類		7	1.5		灰褐色	F2灰褐色土層	
137	知多式4A1類		8.7	2		褐色	F2黒色砂層	
138	知多式4A1類		8.6	1.8		赤褐色	F2黒色砂層	
139	知多式4A2類		8.2	1.8		灰褐色	F2黒色砂層	
140	知多式4A2類		7.8	1.7		明褐色	F2黒色砂層	
141	知多式4A2類		8.2	1.6		明褐色	F2黒色砂層	
142	知多式4A2類		7.4	2.1		明褐色	F2黒色砂層	
143	知多式4A2類		7.3	1.6		赤褐色	F2黒色砂層	
144	知多式4A2類		7.6	1.5		明褐色	F2黒色砂層	
145	知多式4A2類		7.6	1.8		灰褐色	F2黒色砂層	
146	知多式4A3類		5.8	1.7		明褐色	F2黒色砂層	
147	知多式4A3類		6.4	1.4		褐色	F2黒色砂層	
148	知多式4A2類		8.1	2		明褐色	F2灰層	
149	知多式4類		8.5	1.7		褐色	F2灰層	
150	知多式4A2類		8	1.8		褐色	F2灰層	
151	知多式4A2類		8	2		黒褐色	F2灰層	
152	知多式4A2類		7.5	1.8		明褐色	F2灰層	
153	知多式4A2類		7.5	1.7		褐色	F2灰層	
154	知多式4A2類		8	1.6		褐色	F2灰層	
155	知多式4A2類		7.5	1.6		褐色	F2灰層	
156	知多式4A2類		7.4	1.5		明褐色	F2灰層	
157	知多式4A3類		7	1.7		褐色	F2灰層	
158	知多式4A3類		7.1	1.4		褐色	F2灰層	
159	知多式4A2類			1.6		明褐色	E1灰・炭黒色砂層	
160	知多式4A2類		8.4	1.6		明褐色	E1灰・炭黒色砂層	
161	知多式4A2類		8.1	1.6		明褐色	E1灰・炭黒色砂層	
162	知多式4A2類		8.1	1.6		灰褐色	E1灰・炭黒色砂層	
163	知多式4A2類		7.4	1.5		明褐色	E1灰・炭黒色砂層	
164	知多式4A2類		7.5	1.6		明褐色	E1灰・炭黒色砂層	
165	知多式4A2類		7.8	1.7		明褐色	E1灰・炭黒色砂層	
166	知多式4A2類		7.4	1.6		明褐色	E1灰・炭黒色砂層	
167	知多式4A2類		7.5	1.6		明褐色	E1灰・炭黒色砂層	
168	知多式4A2類		7.1	1.4		明褐色	E1灰・炭黒色砂層	
169	知多式4A2類		7	1.4		明褐色	E1灰・炭黒色砂層	
170	知多式4類					褐色	B3黒褐色砂層	口縁部
171	知多式4類					褐色	A1褐色砂層	口縁部
172	知多式4類					明褐色	B2黒褐色砂層	口縁部
173	知多式4類					明褐色	B3黒褐色砂層	口縁部

図番号	分類	底径	脚高	脚径	口径	色調	出土区	備考
174	知多式4類					黄白色	B2黒褐色砂層	口縁部
175	知多式4A1類		10.6	1.8		明褐色	B1茶褐色砂層	
176	知多式4A1類		10.3	1.9		赤褐色	B1茶褐色砂層	
177	知多式4A1類		9.8	2.1		明褐色	B2黒褐色砂層	
178	知多式4A1類		10	2.3		明褐色	B2黒褐色砂層	
179	知多式4A1類		10.1	1.8		赤褐色	B2黒褐色砂層	
180	知多式4A1類		9.4	1.6		赤褐色	B1黒褐色砂層	
181	知多式4A1類		9.5	1.6		赤褐色	B3黒褐色砂層	
182	知多式4A1類		9.4	1.8		明褐色	B1茶褐色砂層	
183	知多式4A1類		8.8	1.9		明褐色	B1茶褐色砂層	
184	知多式4A1類		8.4	1.6		明褐色	B2黒褐色砂層	
185	知多式4A1類		8.8	1.5		明褐色	A3黒褐色砂層	
186	知多式4類					明褐色	B1茶褐色砂層	口縁部
187	知多式4類					明褐色	B2茶褐色砂層	口縁部
188	知多式4類					暗赤褐色	B2黒褐色砂層	口縁部
189	知多式4類					褐色	B1茶褐色砂層	口縁部
190	知多式4類					褐色	B1茶褐色砂層	口縁部
191	知多式4類					明褐色	B2黒褐色砂層	坏部
192	知多式4類					明褐色	A1茶褐色砂層	坏部
193	知多式4類					明褐色	B2茶褐色砂層	坏部
194	知多式4A2類		7.6	1.9		赤褐色	B1茶褐色砂層	
195	知多式4A2類		7.1	1.7		黒褐色	B2黒色砂層	
196	知多式4A2類		7.8	1.7		黒褐色	B2黒褐色砂層	
197	知多式4A2類		7.4	1.7		灰褐色	B1茶褐色砂層	
198	知多式4A2類		8.1	1.6		褐色	B1茶褐色砂層	
199	知多式4A3類		6.7	1.5		赤褐色	B1黒褐色砂層	
200	知多式4A3類		6.5	1.6		明褐色	B1黒褐色砂層	
201	知多式4A3類		6.8	1.5		明褐色	B1黒褐色砂層	
202	知多式4A3類		6.8	1.7		明褐色	B2茶褐色砂層	
203	知多式4B類		11.5	2.4		赤褐色	B2黒褐色砂層	
204	知多式4B類		12	2.2		明褐色	A1黒褐色砂層	
205	棒状脚			3		白色	B1	
206	棒状脚			3.8		灰黄色	B1ブロックA黒褐	
207	棒状脚			3.3		明褐色	B1ブロックA黒褐	
208	棒状脚			4.5		褐色	A1黒砂砂層	
209	棒状脚			4.4		白色	B1ブロックA黒褐	
210	甕?					黒色	B1ブロックA黒褐	口縁部
211	甕?					黒色	B1ブロックA黒褐	口縁部
212	甕?					灰黄色	B1ブロックA黒褐	口縁部
213	甕?					灰黄色	B1ブロックA黒褐	口縁部
214	甕					明褐色	B1ブロックA黒褐	胴部
215	甕					明褐色	B1ブロックA黒褐	胴部
216	甕					明褐色	B1ブロックA黒褐	胴部
217	甕					明褐色	B1ブロックA黒褐	胴部
218	甕					明褐色	B1ブロックA黒褐	胴部
219	甕					暗灰褐色	B1ブロックA黒褐	
220	甕					明褐色	B1ブロックA黒褐	口縁部
221	甕					暗灰褐色	B1ブロックA黒褐	口縁部
222	甕					灰色	B1ブロックA黒褐	底部
223	甕					明褐色	B1ブロックA黒褐	底部
224	甕					明褐色	B1ブロックA黒褐	底部
225	甕					灰白色	B1ブロックA黒褐	底部
226	甕					灰色	B1ブロックA黒褐	底部
227	灰釉陶器碗					灰色	B1ブロックA黒褐	

圖 版



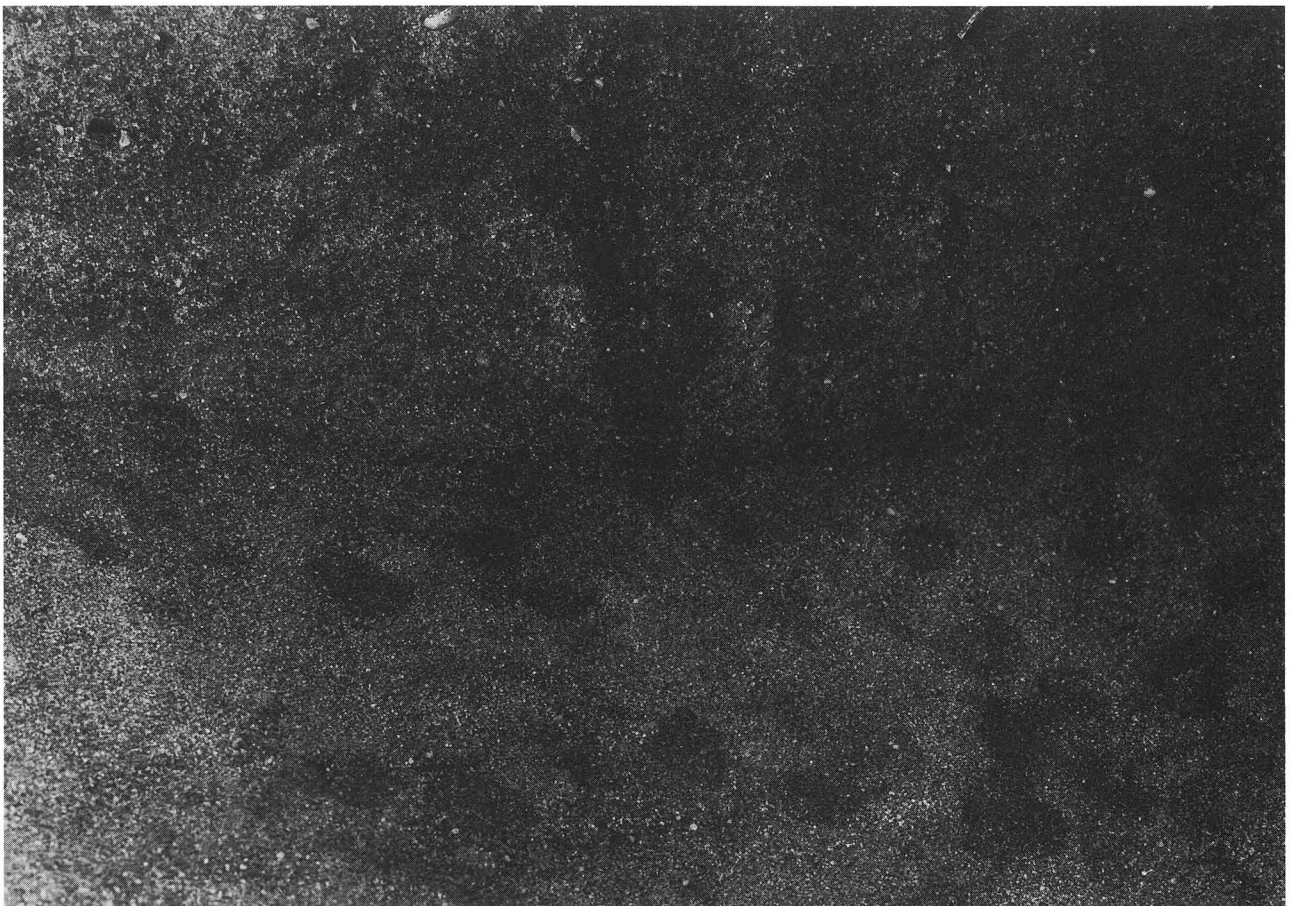
上浜田遺跡全景（北西を望む）



土坑（南西を望む）



獣骨出土状態



黒斑検出状態 (上半は断面)



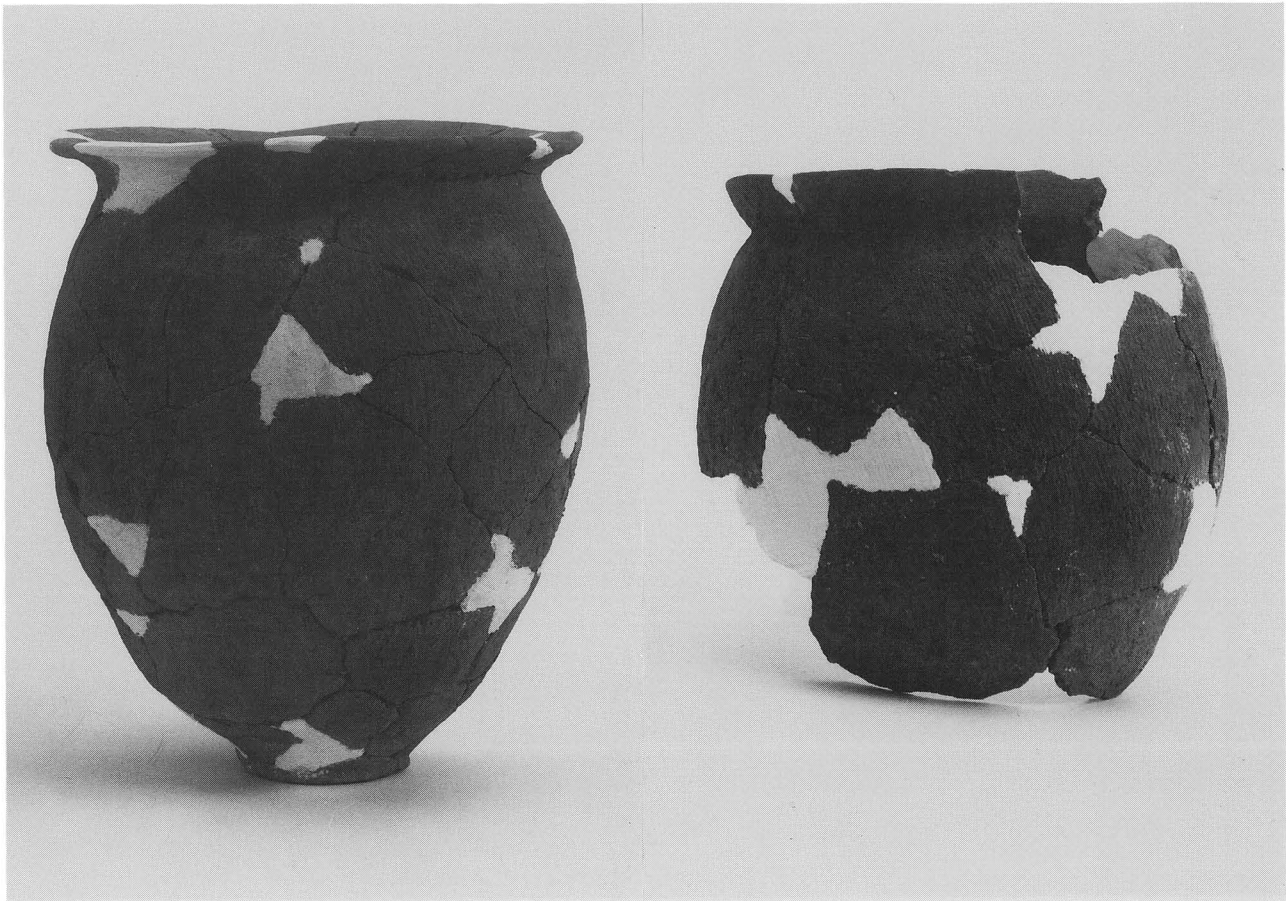
かまど検出状態（手前が焚口・北東を望む）



かまど側面（左が焚口）



かまど（手前が焚口・奥が煙道）



かまど内出土土師器（甕・左実測図番号2・右6）

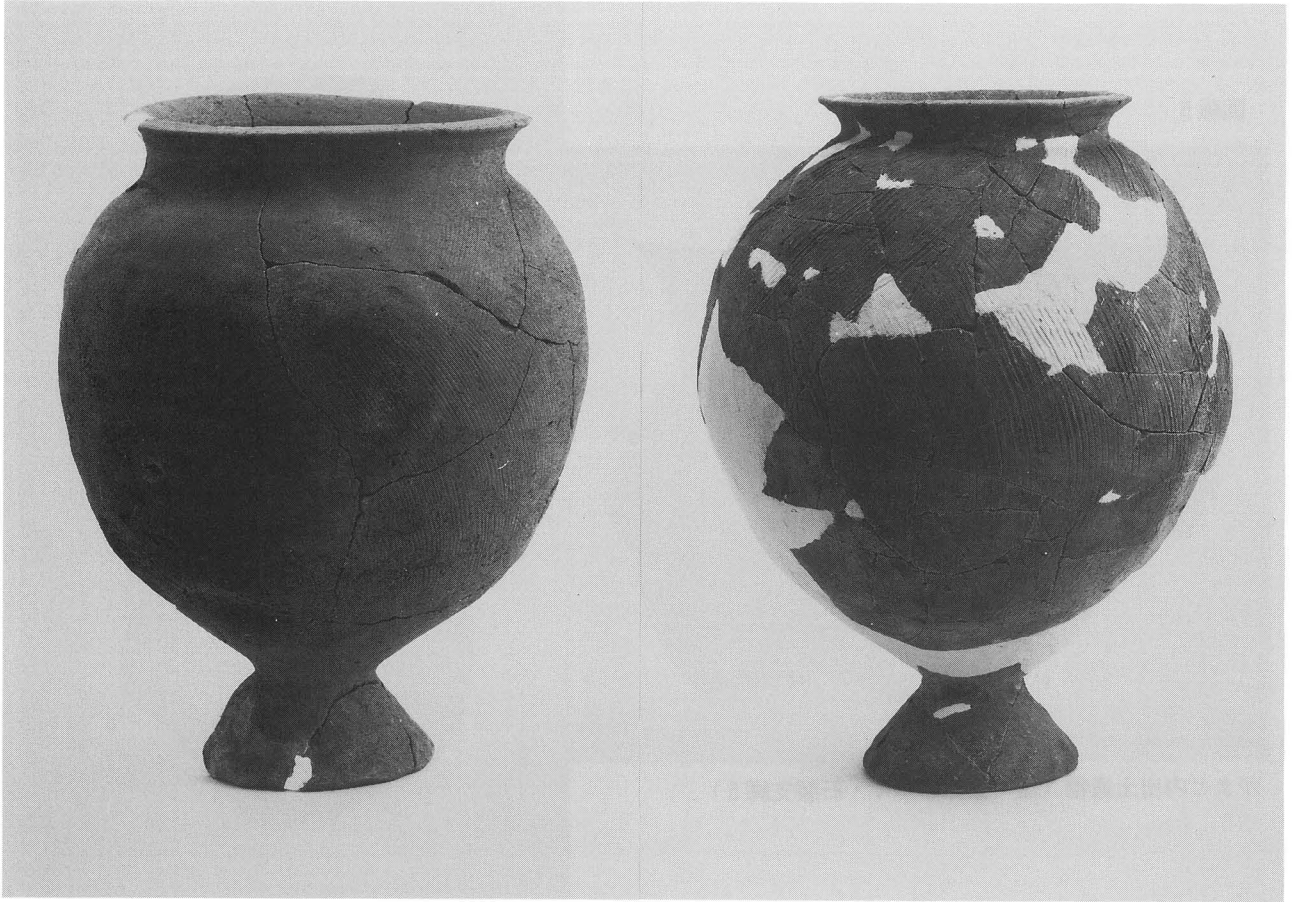
図版 5



かまど内出土遺物 (左・土師器甕 4・石製支脚 5)



調査区 2 (遺物集中部)



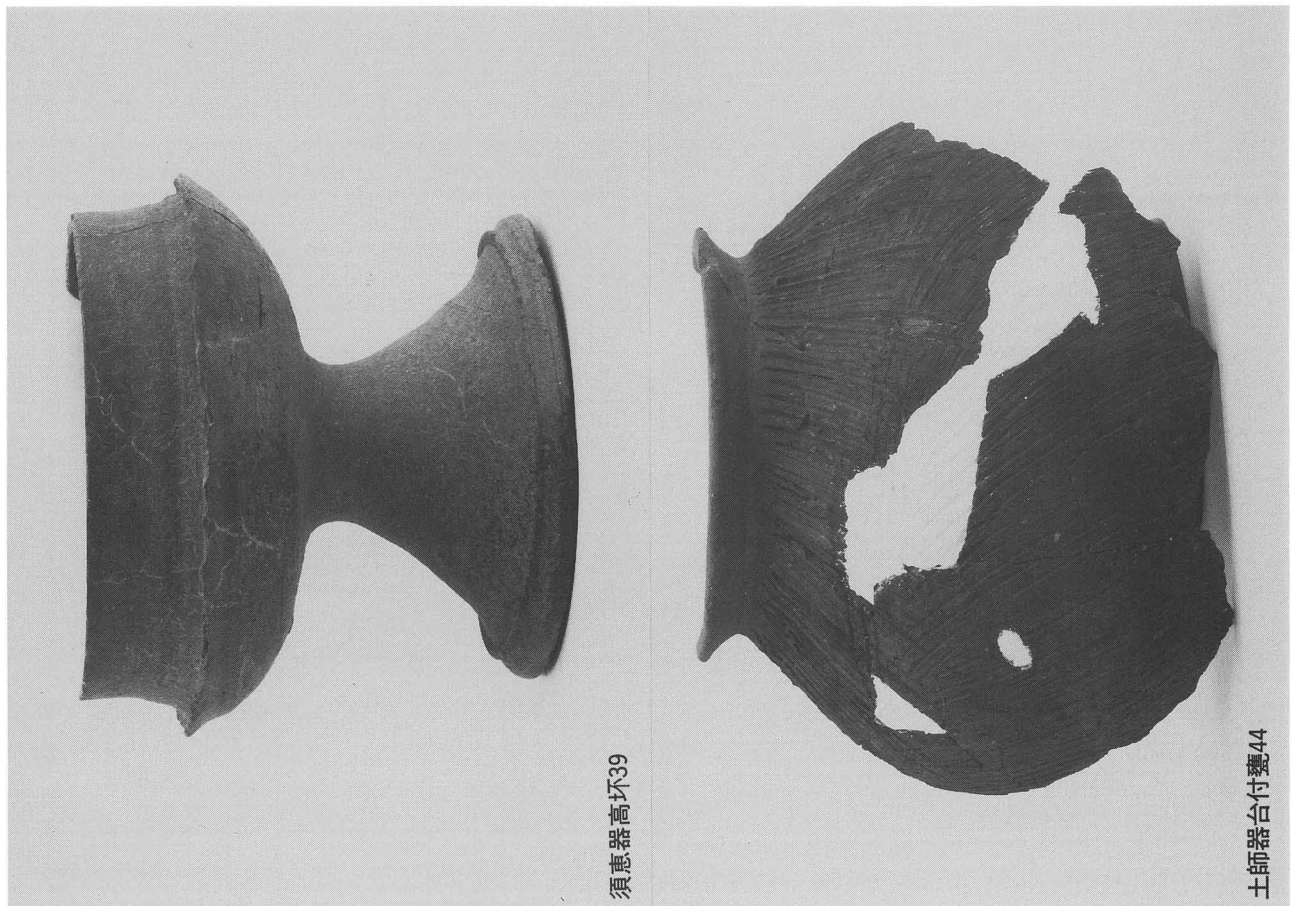
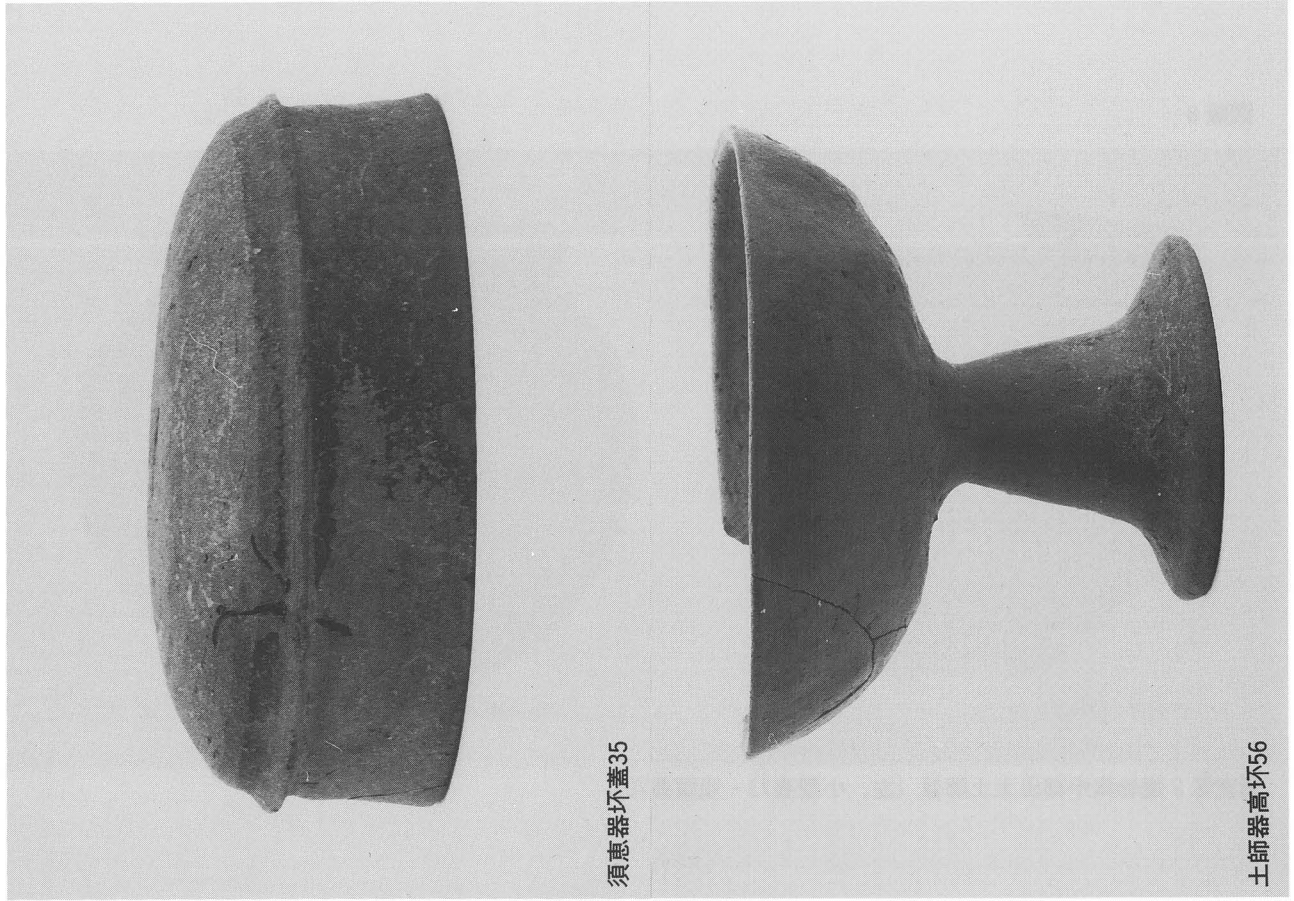
台付甕42

台付甕43



台付甕50

高坏65





調査区 2 遺物集中部出土土師器 (左、小型壺73・短頸壺70)



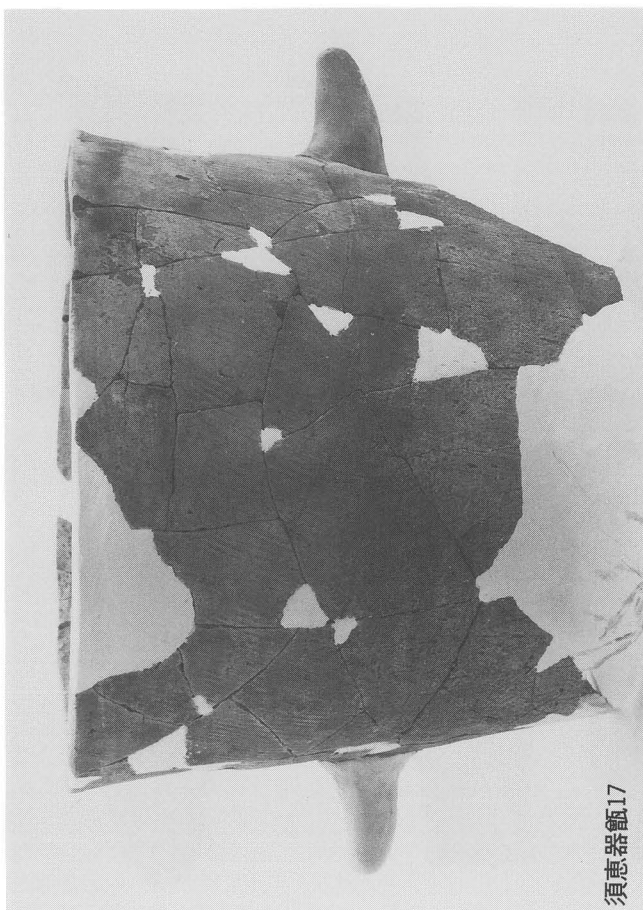
C-1区 須恵器集中部



須惠器坏身88



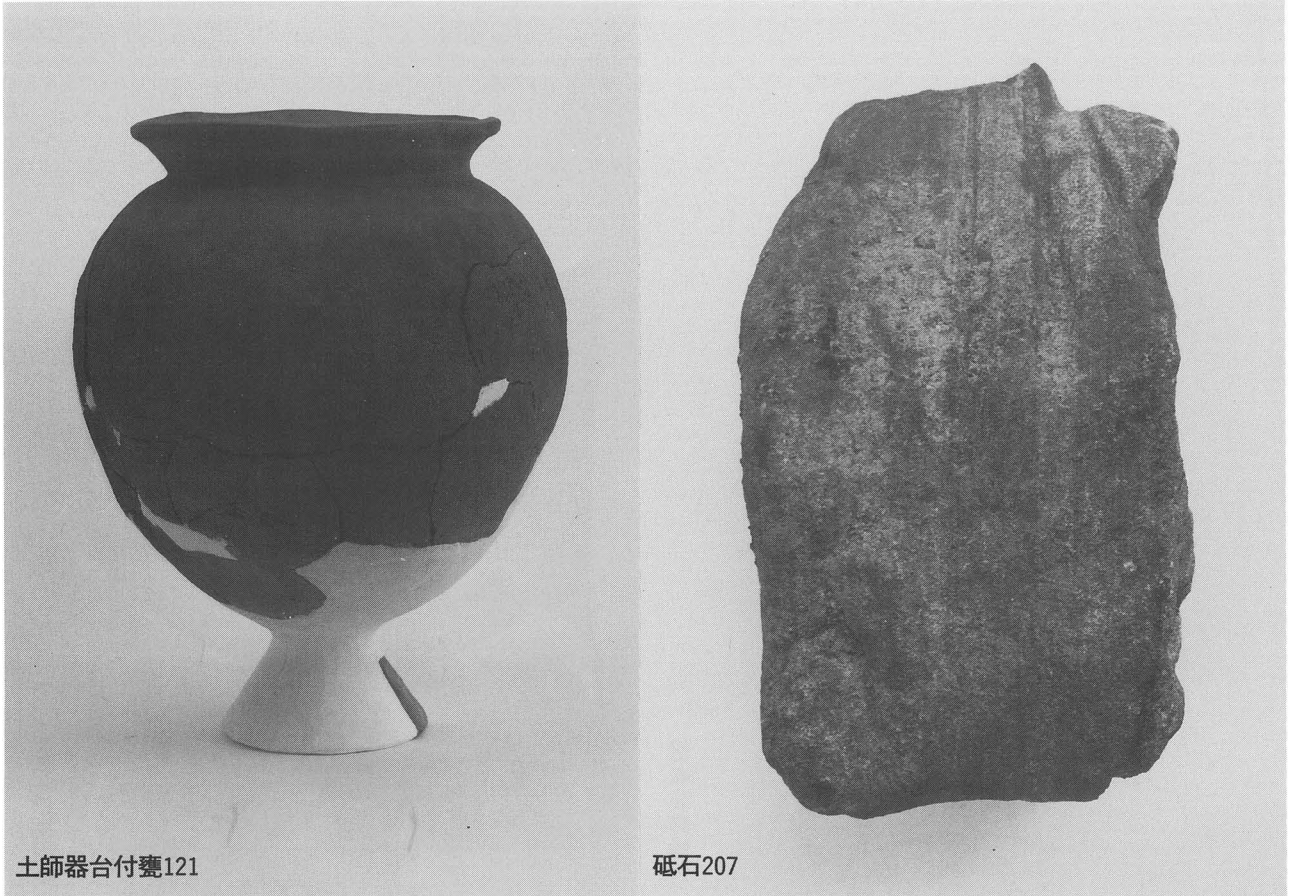
土師器甕138



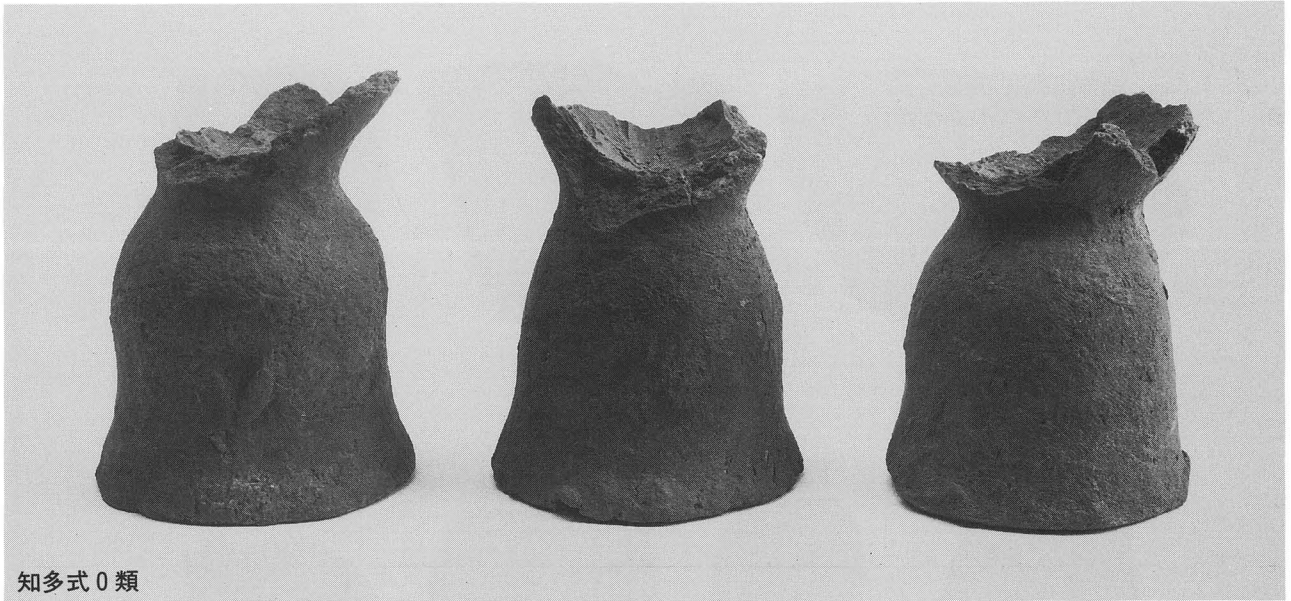
須惠器甕17



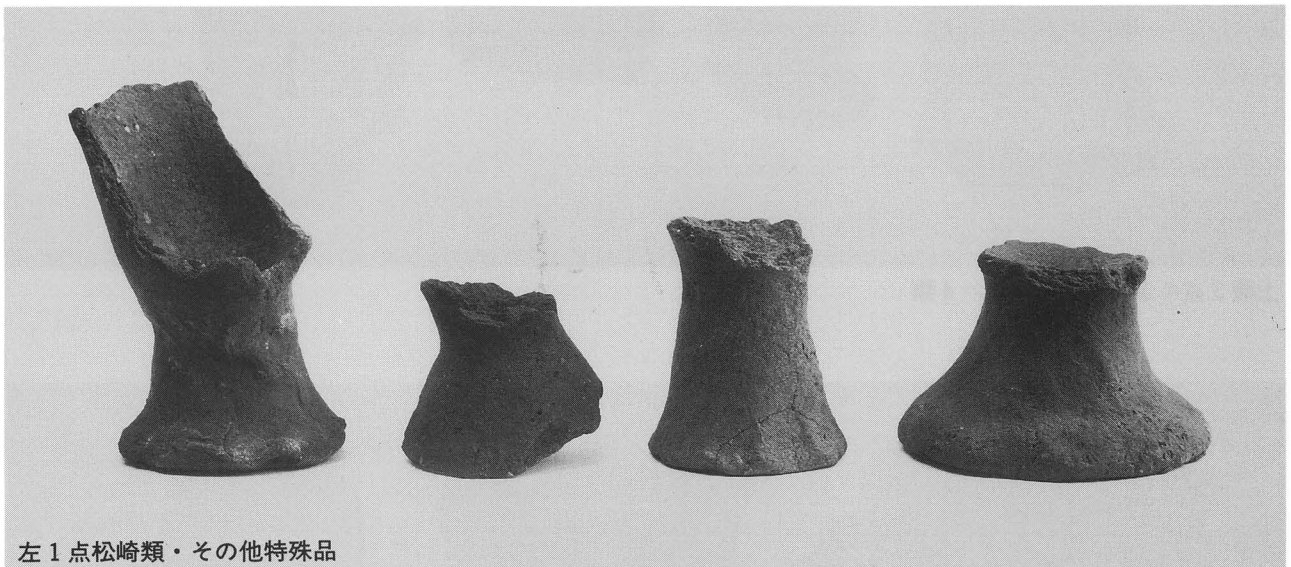
土師器甕152



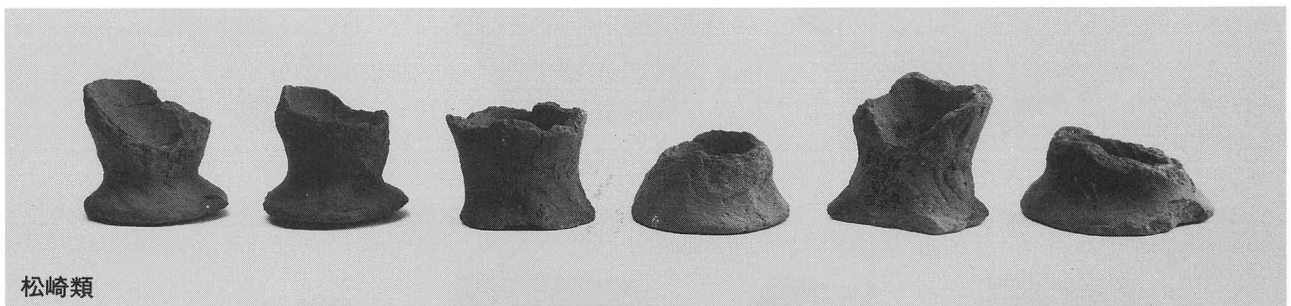
知多式製塩土器 1類 (下段右端 1点は2類)



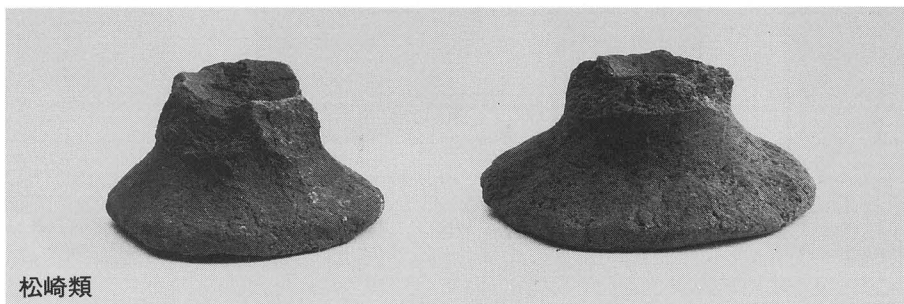
知多式0類



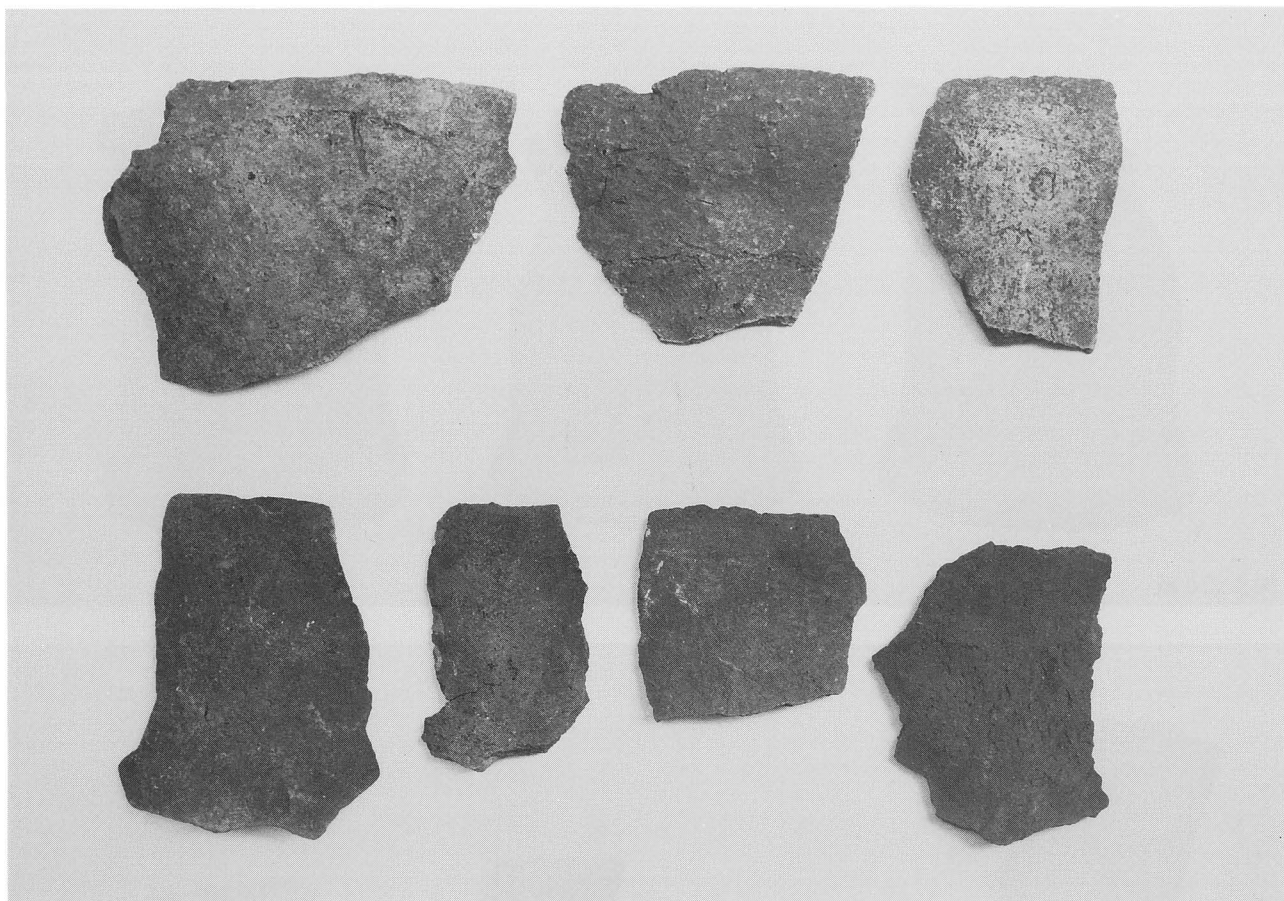
左1点松崎類・その他特殊品



松崎類



松崎類



上段3点=3類・下段4点=4類



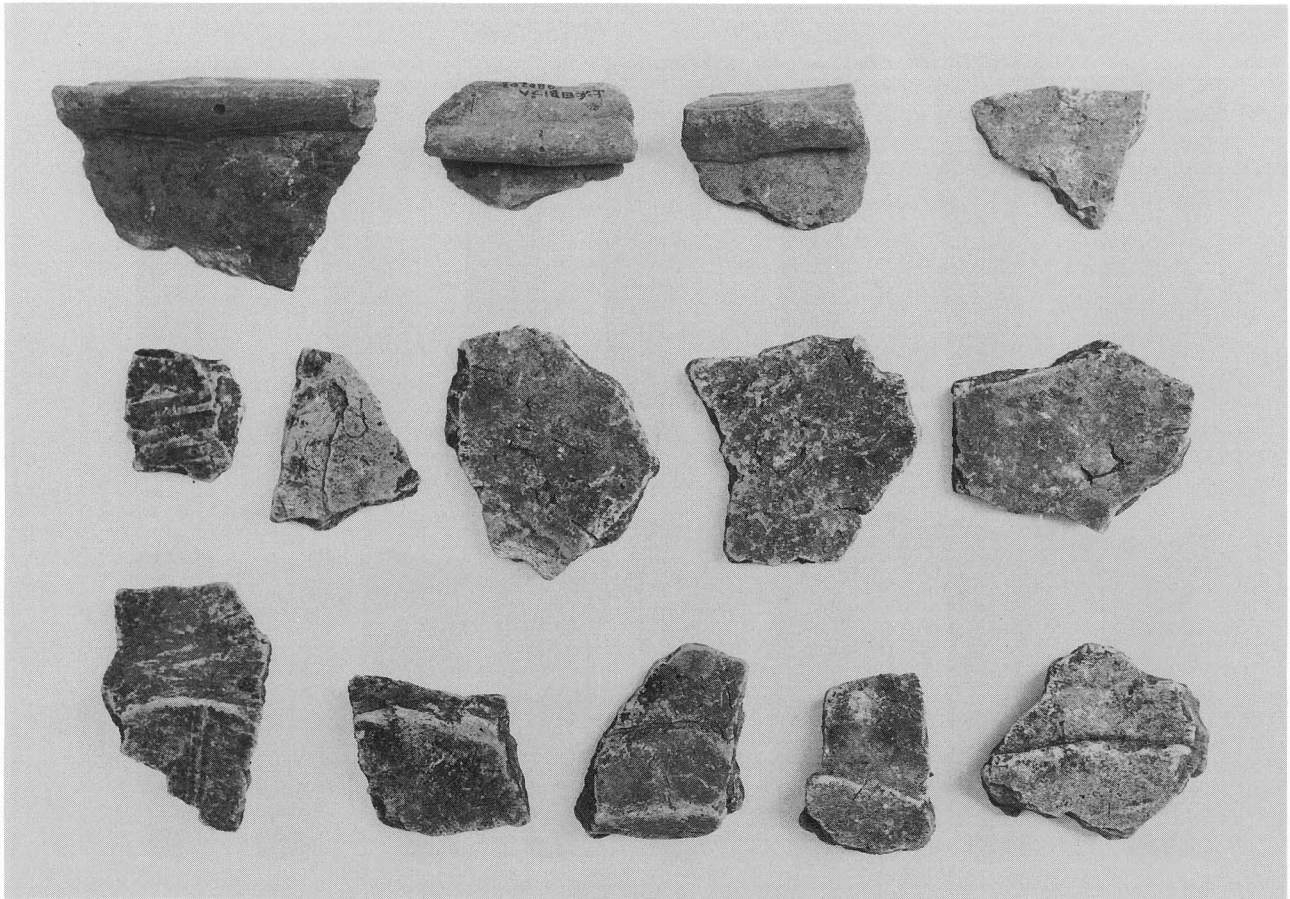
同上内面調整



3類



4類



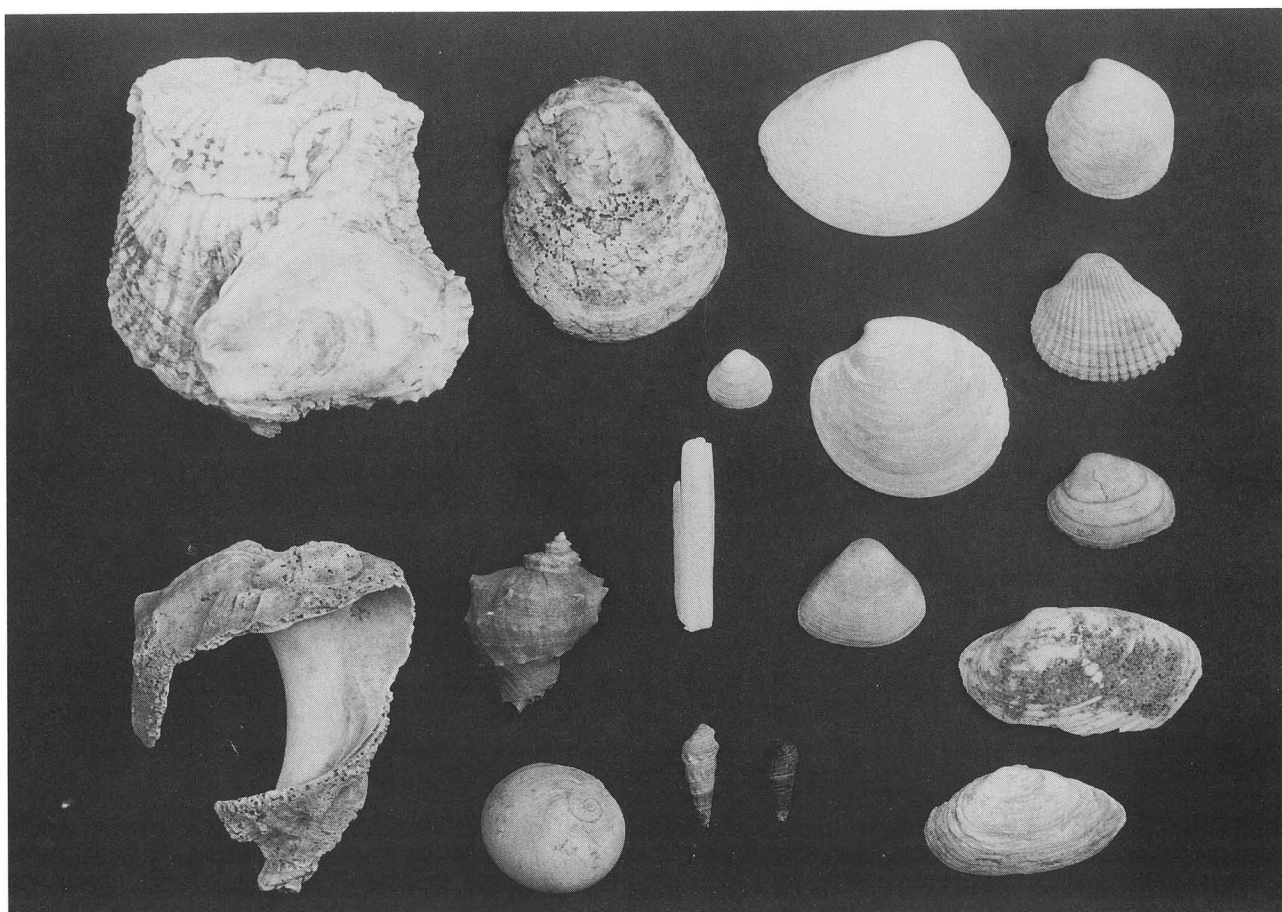
清郷型様甕（上段=口縁部・中段=胴部・下段=底部）



棒状脚土製品（右端は土棒状）



土錘



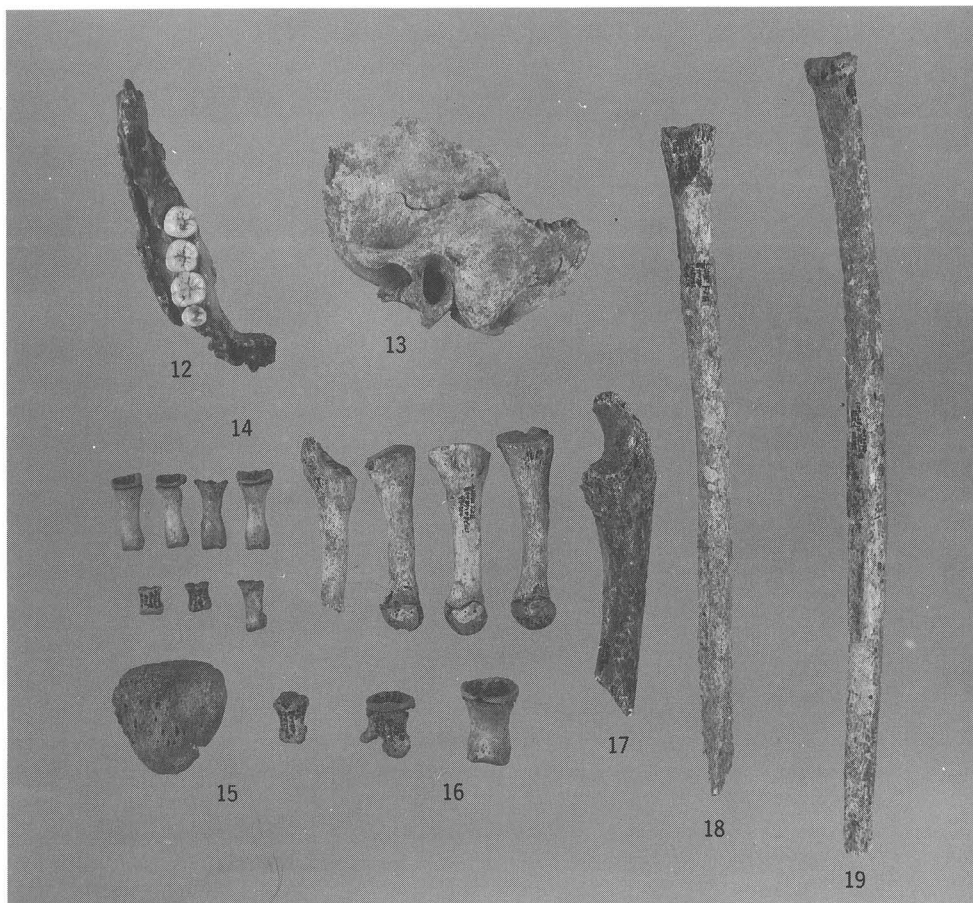
貝類 (上段左2点イタボガキ→ハマグリ→オキシジミ、その下段ヤマトシジミ→カガミガイ→サルボウ、その下段マテガイ→シオフキ→アサリ、下段左2点アカニシ→ツメタガイ→イボウミニナ→ウミニナ→オオノガイ上下2点)



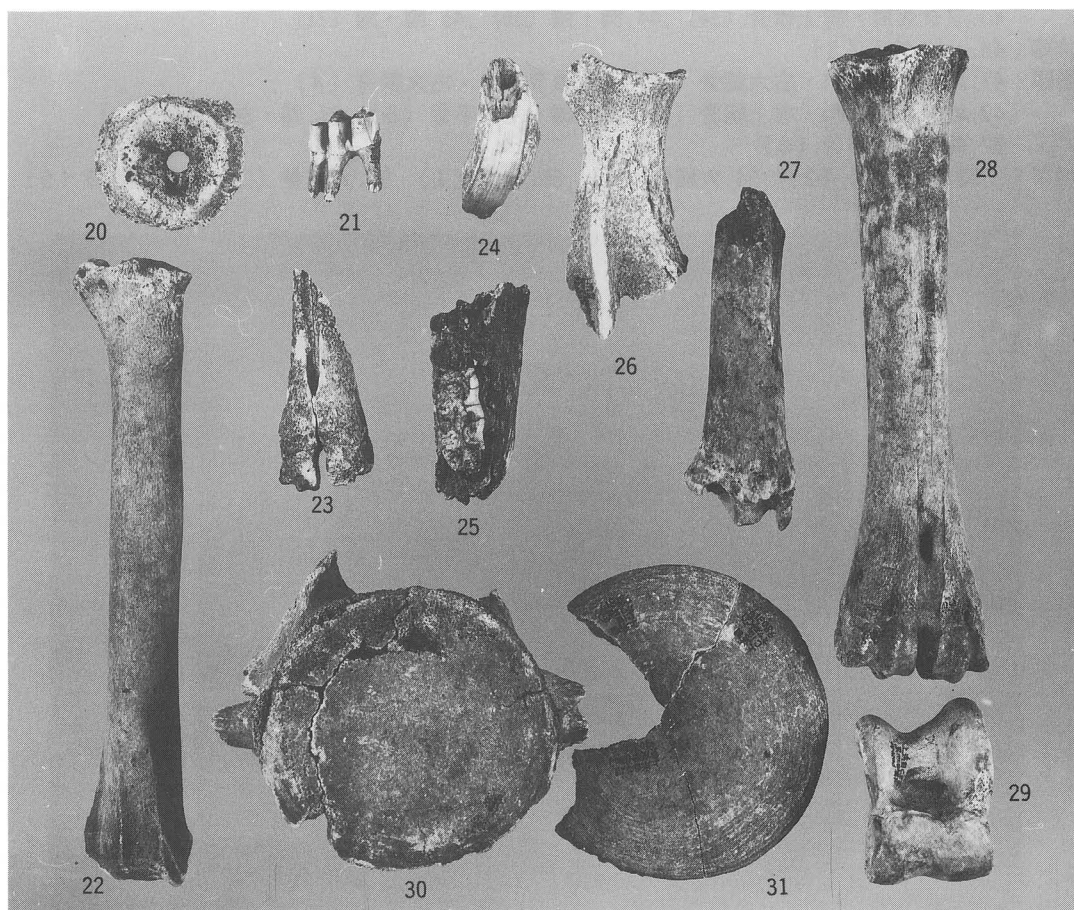
ウマ：1.左下顎骨 (116) , 2.環椎 (88) , 3.頸椎 (89) , 4.頸椎 (87) , 5.胸椎 (36)



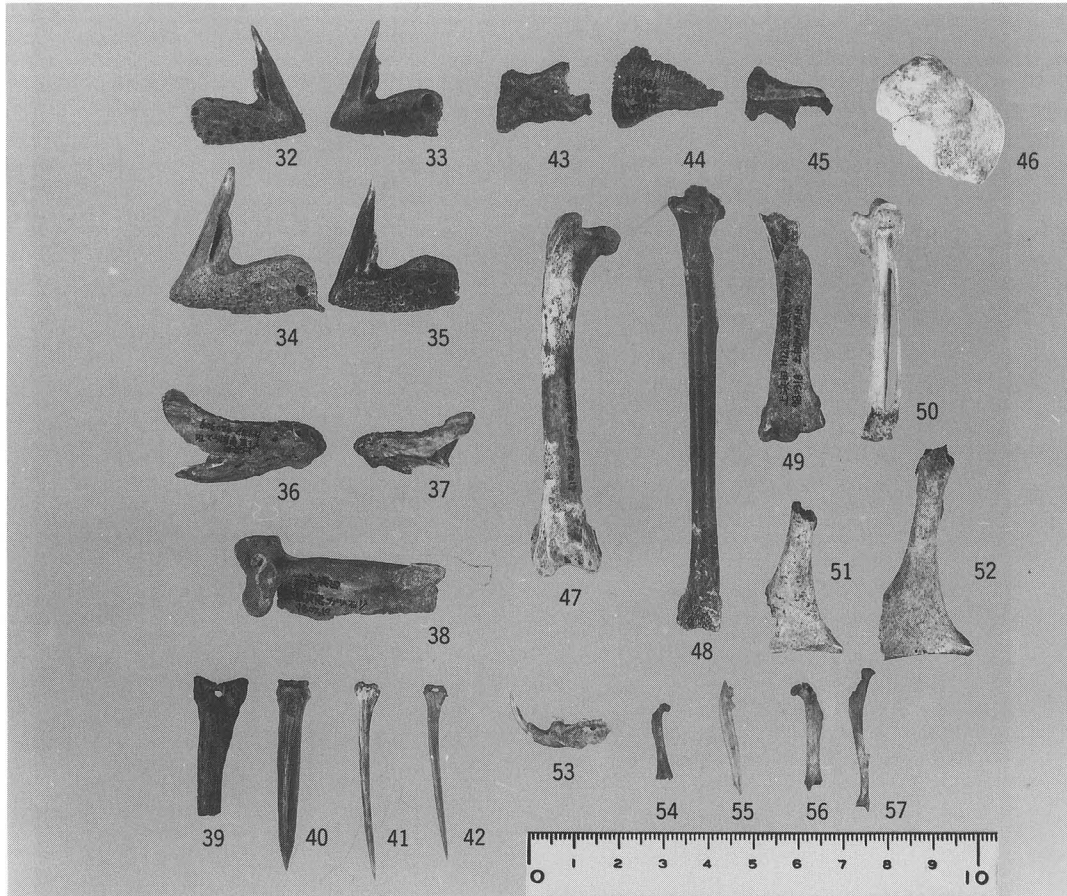
ウマ：6.右中手骨 (75) , 7.左中手骨 (77) , 8.左中手骨 (73)
9.基節骨 (49) , 10.中節骨 (46) , 11.末節骨 (85)



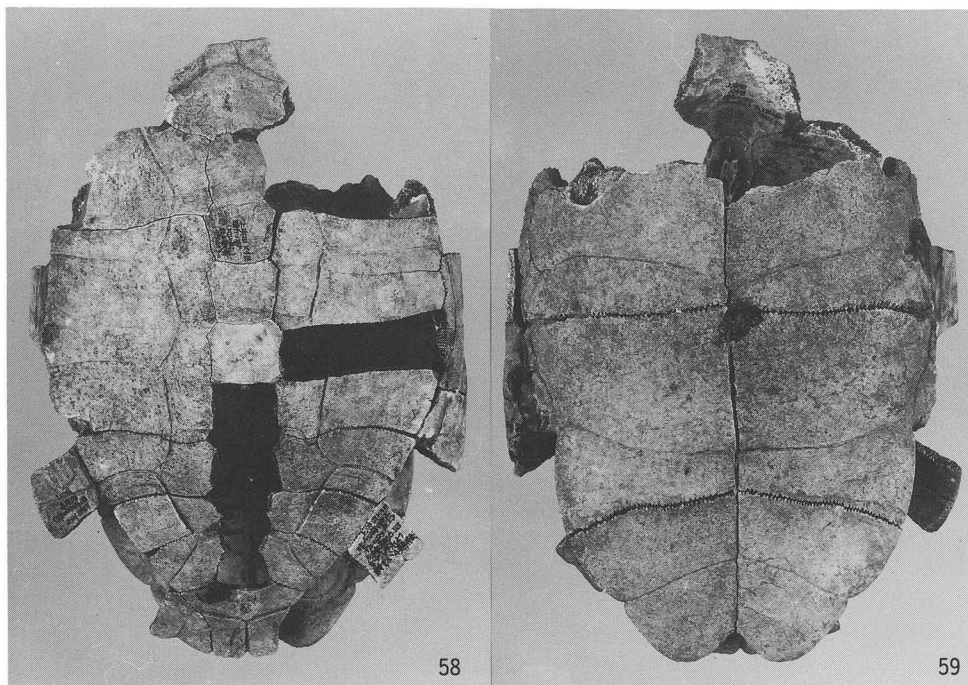
ヒト：12.右下顎骨（4）,13.左側頭骨（2）,14.手指骨（14）,15.膝蓋骨（18）
16.足指骨（22）,17.右尺骨（13）,18.右腓骨（11）,19.左腓骨（12）



シカ：20.角座（1）,21.左第3大白歯（9）,22.右脛骨（15）,23.中手骨（20）
イノシシ：24.犬歯（4）,25.右下顎片（5）,26.右肩甲骨（6）,27.右脛骨（14）
ウシ：28.左中手骨（1）,29.左距骨（2）
イルカ類：30.椎骨（1）,31.椎骨片（2）



- 魚類：32.クロダイ属・左前上顎骨 (17) ,33.同・右前上顎骨 (16) ,34.同・同 (15) ,
 35.同・同 (25) ,36.クロダイ属・歯骨 (18) ,37.同・同 (24) ,38.マダイ・主上顎骨 (46)
 39.タイ科・鰭棘骨 (31) ,40.同・同 (51) ,41.同・同 (27) ,42.同・同 (47) ,
 43.フグ亜目・前上顎骨 (34) ,44.同・同 (35) ,45.同・同 (21)
- 貝類：46.ハマグリ (3)
- 鳥類：47.ガン・カモ科・右大腿骨 (19) ,48.カラス?・右大腿骨 (4) ,
 49.ガン・カモ科・右上腕骨 (14) ,50.同・左中手骨 (5) ,51.同・左肩甲骨 (7) ,
 52.同・右肩甲骨 (8)
- ネズミ：53.左下顎骨 (2) ,54.大腿骨 (4) ,55.尺骨 (1) ,56.大腿骨 (3) ,57.左脛骨 (5)



ヌマカメ科：58.背甲 (1) ,59.腹甲 (1)

報 告 書 抄 録

ふりがな	あいちけんとうかいしかみはまだいせきはくつちょうさほうこく							
書名	愛知県東海市上浜田遺跡発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	立松 彰・永井伸明							
編集機関	愛知県東海市教育委員会							
所在地	〒476-8601 愛知県東海市中央町一丁目1番地 TEL052-603-2211							
発行年月日	西暦 1999年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみはまだ 上浜田	とうかいし 東海市 おおたまち 大田町 かみはまだ 上浜田	23222	43135	35度 1分 17秒	136度 53分 49秒	980119 ～ 980331	1,000m ²	マンション建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上浜田	製塩跡	古墳～平安	煎熬場 かまど (縦穴住居跡) 土坑	製塩土器 須恵器 土師器 灰釉陶器				

愛知県東海市
上浜田遺跡発掘調査報告

1999年3月23日

編集・発行 愛知県東海市教育委員会
印刷 株式会社ぎょうせい
